

東方黒雲録

文才の無い本の虫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あるところに黒い霧の様なモノが産み落とされた。

彼の者は“始まりの妖怪”という概念。

彼は、温もりを、会話を求めた。

ーのだが、彼のことを認識することができる者は現れなかった。

そんな彼に、紅い光が差し込む。

適当に作った表紙の様な何か。

リメイク版「東方黒雲録」Traveling Black Monster」
制作中！

リメイク・・・というより闇鍋？

<https://syosetu.org/novel/314675/>

可也真面目にリメイク版を書くか否か・・・。

目次

第一章 「孤独な煙の古い話」

0	「始まりの黒」	1
1	「紅と黒」	11
2	「一人の旅路、出逢い」	23
3	「黒と諏訪子」	32
4	「白蛇と誓い」	43
5	「新たな出会いと月の都」	56
6	「月移住計画」	64
7	「クレーター」の中心で……ゑ？」	
75		
81	忘れてた第一章の登場人物紹介	

第二章 「柏手様と諏訪子様」

1	「新たな出会い、名付け」	85
2	「紫との旅路、紫の巣立ち」	
96		
3	「諏訪子との再開」	107
4	「諏訪子との日々」	122
5	「諏訪大戦」	133
6	「守矢神社、別れ」	145
	今回は忘れなかった登場人物紹介（第 二章）	162
	第三章 「幻想郷」	
1	「時の放浪者」	168
2	「再会」	182

3	「ようこそ幻想郷へ」	195
4	「天狗との交渉（物理）」	207
5	「博麗の巫女」	221
6	「紅い霧」	235
7	「紅い館での再会」	246
8	「金の狂気と黒の正義」	257
9	「解決と宴」	266
	主な登場人物紹介（第三章）	276
	第四章「異変と幻想郷」	
1	「束の間の平穏」	282
2	「明けない冬」	296
3	「冥界と嫌な予感」	309
4	「西行妖」	324

5	「明日はきつと騒がしい日になる（胃痛）」	343
6	「盛大な誤解 in 紅魔館」	357
7	「お兄ちゃん、修羅場だね☆」	369
8	「日常回なはず！」	387
9	「修行！修行！！」	399
10	「酒と鬼と宴」	416
11	「宴だ宴！」	427
12	「明けない夜に」	437
13	「墓参り」	457
	今章の設定？	468
	第五章「表と裏、白と黒、始まりと終わり」	

E X T R A

1	「平穩は唐突に」	474
2	「予感」	484
3	「崩壊のキツカケ」	497
4	「ワールドドリフター」	507
5	「作戦開始!!」	521
6	「帰ってきてやらかした男」	535
7	「アイを叫ぶ」	548
8	「真相と花火」	565
9	「廻る」	577
ex	「こぼれ話」	594
	設定・・・なはず	606

EX√	「ずっと一緒に」	612
EX√	「面白可笑しく」	624
EX	「とある観測者の日記」	646
EX, Another√	「銀」	651
TR√	「運命の出会い」	669
	「蛇足のような設定集」	703
NX	「(真面目な) 黒雲録リメイクに向けて」	709
EX√	「聖夜の奇跡」	718
■ ■	「何時か…」	726

第一章「孤独な煙の古い話」

0 「始まりの黒」

うん？

ここは？

僕は、さつき※※に殺され?!

・・・何で生きてるんだ？

いや、手も足も無いし煙だし・・・ってどうゆうこと?!

・・・

・・・

・・・少し整理しよう。

僕の名前は■ ■ ・ ・ ・ん？

思い出せない。

・・・それは置いておいて、えつと。
覚えているのは

①自身が人間として生きていたこと

②弟の※※に殺されたこと

③生きていた12年間の記憶
だ。

でも、僕生きてるし。

これはもしや寺子屋の先生が言っていた輪廻転生と言うやつでは？

・・・記憶って洗われるんじゃないかなかったつけ？

第二の人生ってやつか？

僕って今、手足無い黒い煙なんだが？

これって人か??

・・・。

前向きに行こう。

僕は今から——煙だ。

煙らしく風に吹かれて旅でもするか。



そうして僕が煙に転生？してから数十回目の春を迎えた。
未だに僕を認識できる存在は居ない。

世界一周もしたし風景も見飽きた。

人は、とても増えた。

それでも、僕のこと黒い煙に気づいてくれる存在は現れない。

でも、少し前から不思議な存在を見掛けるようになった。

火を吐いたりする異形。

水の上を走ったりする人の形をしたもの。

ずっと姿が変わらない人間。

こういう存在ならもしかしたら・・・



彼等——妖怪や神と言う存在が現れ始めてから、千は降らないぐらいの春を見た。
僕黒い煙が何者だったのかはとうに忘れてしまった。

覚えているのは何かの温もりを感じたいという強い想渴いだけ。

僕が最初の頃に見た火を吐く異形は退治され、水の上を走っていた彼らは天人と名を変え空の上去过って行った。

変わらないのは八意とか呼ばれていた人間くらいだ。

僕は外を見るのに飽き、ふと思ひ出した。

そういえば、人と駆け落ちした妖怪がいたなど。

妖怪と人間では寿命が違うし、能力から容姿迄違うことだらけだ。

でももし、その違うことだらけだの彼彼女らに子供ができたら？

もしかしたら、僕に気づくかもしれない。

——もし、それでもだめだったらこの星の中心にでも行って寝てしまおう。

——嗚呼、誰か気付いてくれ・・・



ようやく着いた。

彼らはこの竹林に居るようだ。

早速見に行ってみよう。

着いた先には紅い女と白い老人がいた。

ふと、紅い女が此方を向いた。

そして、その顔に驚愕を浮かべ、黒い煙僕のことを見て口を開いた。

「貴方は？」

——驚いた。

そりやあもうたまげた。

そして、感動した。

人間と駆け落ちした紅い妖怪は俺のことが分かるみたいだった。

そして紅い女妖怪は俺のことを見て、何かに気付いたように言った。

「黒き存在よ、30年後にここに来なさい。貴方には其れが最善だ。」

と。

彼女には未来でも見えるのかと思っていると、紅い女妖怪は続けて言った。

「私は、【ありとあらゆるものを読む程度の能力】によつて未来がわかります。黒き存在よ、取引です。」

——取引？

「ええ。」

——というか、僕の言いたいことが判るのか？

「ある程度ですが。」

——なるほど。で、取引とは？

「取引とは、これから生まれてくる私の子供の家族になって欲しいのです。」

——家族？

「ええ。代わりに貴方の願いは私の^この子供の^子”能力”によって叶うでしょう。」

——判った。でも、何故30年？

「私の^この子供は半妖です。それ故に成長が緩やかだ。そして、成長の過程で貴方が入ってしまうとこの子の”能力”はつかえなくなる。」

——なるほど。判った。30年後だな。

「ええ。30年後に会いましょう、黒き存在よ。」

そうして僕は、30年後への期待を胸に——煙だけど暇つぶしの旅に出た。



そうして、30の春が通り過ぎた。

僕は、あの約束の竹林に来ている。

竹林を漂っていると、少し向こうに紅い少女が見えた。

その少女は俺に気づいたのか、此方に向かってきた。

そして俺の前に来ると口を開いた。

「お母さんの言………た通りね。私は、出雲^{イヌモ} 紅^{ベニ}。貴方の名前は？」

——名前？

「無いの？」

——ああ。

「そっか。じゃあ、私が付けてあげる!!」

少女はそう言って悩みだした。

しばらく経って、少女がおもむろに口を開いた。

「よしっ決めた!!貴方は今日から、

——イズモ 出雲 クロ 黒、私の弟ね!!」

”与えられた”名前を認識する。

すると、僕の中に温かい何かが流れ込んできた。

——何時も黒い煙だった俺の体^{カラダ}が形^{カタチ}を変^カえる。

小さな手足、目の前の少女と同じぐらいの目線の高さ。

流れ込んできたコレは紅の記憶?

僕は、黒い髪に水色の目の少年になっているみたいだ。
すると、紅い少女は俺と同じ水色の瞳で俺を見て言った。

「クロ、これからよろしく!!」

「——ああ、よろしく。紅。」

——でも、一つ言いたい。

僕、年齢?的にせめて兄では?

まあ、そうして僕は出雲イヅモ 紅ベニの弟の出雲イヅモ 黒クロに成った。

1 「紅と黒」

紅に手を引かれてたどり着いたのは、30年前に見たあの屋敷だった。気になったので紅に問い掛けてみた。

「……が紅のお家？」

すると紅は満面の笑顔で、

「そうよ！そして、今日から貴方のお家!!」

と言った。

紅の名付けによってか僕の口調が幼く？というか紅の語彙に引っ張られてるみたいだ。

すると屋敷の中から見覚えのある紅い女が現れた。

「こうして見るとまるで姉弟のようですね。久しいですね黒き存在よ。」

「違うわ、お母さん。黒は黒よ！私の弟!!」

「あら、ふふ。そうですか。すみませんね、紅。」

そうして紅い女は此方を向いた。

僕は挨拶でもしようと口を開いた。

恥ずかしいが、言うか？

「……あー。久し振り？これからよろしく。か、義母さん？」

紅が俺の姉なら、この紅い女は僕の義理の母になるんだと思う。

すると紅い女——僕の義理の母？は目を真ん丸にして驚いたあと、微笑んだ。

「ふふ。母ではなくアカコでいいですよ。黒き存在、いえ。黒。」

「ああ。よろしく、アカコ。」

「ええ。よろしくお願いします、黒。」

そうして僕、出雲 黒は紅とアカコの家族になった。



僕が紅とアカコの家族になってからは、時間があつという間に過ぎていった。

アカコに稽古を付けてもらったたり（ボコボコにされた）、紅と筈を採りに行ったりしたことは今も覚えている。

そうして、あれから60年がたったころ。

僕は青年へと成長し、紅は立派な女性に成長した。

それに対比するようにアカコは体が衰え、寝たきりになって行った。

そしてある日、アカコの寿命が来た。

「紅、どうか幸せになりなさい。黒、紅をたのみましたよ。」

「お母さん？」

「アカコ、逝くのか？」

「ええ。黒、貴方の幸せも願っています。私の子供達……」

僕たちに「幸せになれ」という言葉を残して——アカコが息を引き取った。

その後のことはあまり良く覚えていない。

アカコの体は空に溶けるように消え、彼女の身に着けていた服しか残らなかった。

僕と紅はアカコの身に着けていた服を庭の端にある紅の父親の墓の隣に埋め、アカコの墓を造った。

僕はアカコと紅の父親の墓に死後の国がもし有るのなら、二人がまた会えますようにと手を合わせた。

隣を見ると、紅も手を合わせていた。

その後、今更になって僕は気付くことになる。

——運命は残酷だと。



アカコの墓を作つて少しがたつた。

僕と紅は屋敷の整理や、遺品の確認等をしていた。

するとアカコの部屋の机の上に遺書があつた。

見つけた遺書には次の様なことが記してあつた。

①自分の遺品は好きにしていいこと

②自分の部屋の箆笥の一番上に紅への贈り物と手紙が、上から2番目に俺への贈り物と手紙が仕舞つてあること

③二人共幸せに生きて欲しいこと

「・・・アカコ。」

「お母さん……」

涙は枯れたと思つていたが、未だ枯れてなかつたらしい。遺書に涙が落ちないよう、着物の袖で涙を拭う。

「……遺書に書かれていた筆筒を見よう。」

筆筒にはアカコが偶に着ていたような太極図が描かれた前掛けの付いた着物のような道士服と、大きめの背囊が仕舞つてあつた。

手紙を広げる。

——黒へ

——貴方が此れを読んでいるという事は、私が何らかの要因で死んだのでしよう。

——貴方には私が黒専用で作製した道士服一式と私が昔使つていた旅の道具一式を贈ります。

——この道士服はとある妖怪の産み出す糸で私が作つたため、貴方のことを守つてく

れるでしょう。

——前掛けの方には万が一のために貴方の「ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力」によつて貴方が曖昧にならないようにするための術が織り込んであります。

——ですが、修行は怠らない様に。

——貴方にはこれから様々な出会いと別れを経験するでしょう。

——紅は貴方より早く死ぬでしょう。それに絶望せず、見聞を広め、友を、愛するものを作りなさい。其の為には旅に出ると良いでしょう。

——幸い、私が能力で見た限りでは貴方の旅には辿り着く場所がある。縁を大切にしなさい。

——困つたり悩んだりすることも有るでしょう。ですが、立ち止まらず貴方の答えを出しなさい。其れが貴方の助けとなるでしょう。

——長々と書いてしまいましたが、一つ言いたいことがあります。

——黒、貴方は私の自慢の息子です。背を伸ばし、胸を張りなさい。

——愛しい息子、黒へ母より

「……アカコ。いや、母さん。ありがとうございましたっ。」

隣を見ると紅も泣いていた。

僕達は二人で大声を上げて泣いた。

そりやあもういい歳して、泣きじやくりまくった。

そして僕達は泣き疲れて寝た。



ある日、紅が吐血して倒れた。

紅の体からは靈力と妖力がたれ流しになっていた。

当て嵌まる症状はアカコの遺した本の中に記述があつた。

——不治の病、死に至る病と。

「紅、大丈夫か？」

「ええ。今日は未だマシな方ね。」

「そうか。何か僕に出来ることはあるか？」

「うーん。じゃあ黒、お願いを一つ聞いてくれる？」

「お願い？まあ、僕に出来ることなら。」

すると紅は一拍おいてから語り始めた。

僕は唐突に理解した。紅はこの話が終わったら、死ぬのだと。

「……私ね、一度旅を試みたかったの。でも、私はもうすぐで死ぬ。自分の死期って案外わかるもんなのね。だから、私が死んだら、私の全部をあげる。私を、一緒に連れてって？」

「紅……」

「黒、泣かないで。私はこれでも結構満足してるの。私達には誰しも終わりが来る。私は其れが来てしまっただけ。」

「でも。」

「でも、も、だって、も無しよ。私の最後の我儘。黒、私の家族。どうか幸せになつてね・・・」

紅は息絶えた。

僕は瞼を閉じようと紅の顔に手を当てた。

瞬間、紅は光になって僕の中に流れ込んできた。

コレは紅の魂と能力?!

——黒、私は貴方と共に有る

ふと、紅の声が聞こえた気がした。

「わかったよ。紅、僕はもう泣かないよ。」

——それでこそ私の弟ね!!

——ええ。私達の自慢の家族です

「え？」

庭にある墓の方にゆらりと幻が見えた。

直ぐに消えてしまったが、「頑張りなさい」と言われた気がした。



屋敷の片付けは終わり、旅の準備は整った。

取り敢えず100年ぐらい能力の修行したし。

能力で入れられる容量を曖昧にして何でも入るようにした背囊に必要な物を詰め、
母^アさん^カからもらった道士服に袖を通す。

「うん。いい感じた。」

屋敷の外から門を閉じる。

屋敷に僕以外が辿り着け無いように、曖昧にする結界を張る。

よし。

出発だ。

「母さん、行って来ます。」

こうして僕の旅が始まった。

——思い出の場所を背に。

2 「一人の旅路、出逢い」

僕はさくさくと竹林を歩く。

100年能力の修行をしたお陰である程度の物は持つてくることができた。

竹林の分岐地点にきたので、一旦立ち止まってどこに行くか考える。

「どこに行こうか？」

「うーん。そうだ！あの八意とかいうずっと変わらない人間に会いに行ってみよう。」

目的が決まったので、昔その人間を見かけた方向へと歩き出す。

「方向は・・・まあ、ざっくりでいいか。」

「僕には時間だけはたっぷりあるからな。」



うーん。

僕が一人で「時間だけはたっぷりある」とかカッコつけてから1週間がたった。

地形、変わったのかなあ……。

まあ、紅が「私の全部」をあげる」っていうののお陰で寂しくなく（旅への強制力？みたいなのは感じるが）1週間歩き続けられるぐらいの体力があるので焦ることはない。

「今日は流石に何処かに結界張って寝よう。物も食べたいし。」

ってなわけで川の近くに結界を張って、背囊から布団を出して広げる。

「あ。飯食ってねえ……。」

「・・・釣るか、魚。」

僕は釣りの道具を求めて背囊を漁る。

確か釣り竿がここら辺に・・・つと。

あった。

さて、久し振りの釣りとお洒落込もう!!

「よっこらせつと。」

川辺に丁度いい石を見つけたのでその石に腰を下ろす。

「釣りは久しぶりだなあ。」

「確か、紅とどつちが多く釣れるか競争したっけ。」

懐かしいなーと思いながら糸を垂らす。

「お、かかった!!」

そんなこんなで二尾の川魚を入手した僕は、結界を張った場所へ戻る。

「妖術で火を浮かべて、魚の腸をとって、串に刺して焼く!!」

「できた。いただきます。」

結構美味しかった。

適当に塩をふったのが良かったのだろう。

僕は満腹になったので、布団で寝ることにする。

「おやすみなさい。」



気持ちの良い朝が来た!!

って言いたいところだけど・・・

残念ながら寝過ごしたみたいでもう夕方だ。

「まあ、良く寝れたことには変わらない。」

「出発だ。」

僕は布団を背囊に収納し、また歩き出した。

「てか、ここに何処？」

まあ、前途多難だな。



旅立ちから、かれこれ3週間が経った。

今更気づいたのだが、別にここが何処だろうが関係無かった。

そういえば、今日の能力の修行中に新しい発見をした。

能力の対象を自身の五感とかの感覚にすると、知覚範囲を”曖昧にして”物凄く広げたり出来るようになった。

あと、能力は強い”できる、あたり前”みたいなイメージが大切だ。

紅からもらった【与える程度の能力】を使えば物とかに能力の効果を持続させられるのがすごい。

制約はあるけれどとても助かる。

今日の修行を終え、また歩き出す。

「次は此方に行ってみよう・・・妖力?!」

向こうから妖力を感じる。

何となく行った方がいい気がする。

勘が「助ける」と叫ぶ。

「ちっ。跳ばないと間に合わない気がするっ!!」

勘が「間に合わなくなる」と僕を急かす。

なので僕は、能力を使つて”空間の距離”を曖昧にする。

僕はこの技を”空間の距離”を曖昧にして跳ぶから「空間跳躍」と呼んでいる。

「空間跳躍っ!!」

跳んだ先では、今まさに5尺程の金髪の女が妖怪の爪でとどめを刺される直前だった。

僕は右腕を一旦煙に変え、煙を刀に変えて、生やした右腕で持つ。

その金髪の女の前に割り込み、妖怪の爪を弾く。

「間に合つたっ!!」

「邪魔スルナア！」

「そりゃ、無理な相談だっ！」

妖怪の爪による連撃を造った刀で往なして切る。
僕は、流れるように妖怪の左腕を切り飛ばす。

「ギャアア」

「速く去ね!!」

妖怪が傷を押しえながら去ってゆく。
満身創痕の女が俺に問う。

「き、みは？」

「僕は、黒。君はの名は？」

「諏訪子……。」

安心したのか彼女は気を失った。

3 「黒と諏訪子」

襲われていた女——諏訪子が気を失ってしまったので、近くの洞窟に連れて行つた。

「……これは、酷いな。」

背囊から予備の布団を広げて、その上に彼女を寝かして傷などの状態を診る。

主な外傷としては左脛の切り傷、左腕の骨折、身体の様々などところにある打撲。あの時間に合つて良かったと思う。

「取り敢えず、軽い応急処置だけでもして置こう。」

背囊の中から薬箱と包帯、清潔な布を取り出す。

——そういえば、母^{アカカコ}さんに「黒、貴方は処置が丁寧で良い」と褒められたっけ。そんな事を考えながら布と包帯で簡易的な眼帯を作る。

幸い、左脛の傷は目には届いていないみたいだ。

母謹製の外傷用の傷薬（血止め、殺菌、回復促進の効果がある）を塗って眼帯を付ける。

手足の打撲には痛み止めと腫れを抑制する軟膏を塗っておく。

「この骨折は、どうしようか……。」

最悪の場合、切らなければならいかも？

うーん。

やるか？アレ。

やりたく無いけど、人の腕を切るよりはマシ……かな？

僕は左腕で諏訪子の左腕に触れ、能力を使った。

「僕の左腕と諏訪子の左腕の」境界を曖昧にする。『僕の左腕の骨折』を『諏訪子の右腕』に与える……痛っ。」

【ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力】を解除し、彼女と僕の境界をもとに戻す。

どうやら無事、彼女の骨折は僕の右腕に移ったみたいだ。

コレ、あんま多用すると曖昧になって混ざっちゃうから他の傷はしょうがない。

「あー痛い。一旦煙にしてから再構成つと。」

僕の折れている右腕を一旦煙にしてから折れていない形に戻す。

こういうときは自身が妖怪で良かったと想う。

妖怪の能力や妖力の使い方を教えてくれた母アカさんに感謝だな。

さてと、ある程度の処置は終わった。

後は彼女が目覚めるのを待つだけだ。



そうして待つこと数時間。

彼女が目を覚ました。

「あーうー。此処は？」

「近くの洞窟だよ。」

「この手当は君が？」

「ああ。左瞼はあんま開けない方がいいぞ。傷が開く。」

「うん。」

会話が途切れでしまった。

そういうえば、彼女の名前とかは聞いたけどちゃんとした自己紹介はしていないなど思
い至った。

紅が「自己紹介はちゃんとしなさい！」って言ってる気がするし。
そう思って、彼女に声をかける。

「あー。あらためて？僕は、イズモ出雲 クロ黒。君は？」

すると、彼女は驚いた様な顔をしたあとくすつと笑った。

「ふふつ。君は結構不器用なんだね。私は諏訪子。しがない白蛇だよ。よろしく、クロ。」

「ああ、よろしく。諏訪子。」



諏訪子が起きたので、事情を聞くことにした。

諏訪子は僕の知らない様々なことを話した。

「私はね、正確には土地に居着いた霊物みたいなものなんだ。」

「霊物は膨大な力を内包している。まあ、霊物って妖怪とかにとつては御馳走みたいなものなんだ。」

「で、あの妖怪に見つかって襲われてたってわけなの。」

「なるほど。でも、膨大な力があるんだったら妖怪ぐらい撃退できないのか？」

「それはね、霊物は存在自体が力なのさ。要するに力を使うと自分も減っちゃうってわけ。さっきの妖怪は思いの外強かったみたいでね、クロが来なかつたら今頃彼奴の腹の中よ。」

「諏訪子。この後はどうするんだ？」

「あーうん。クロを私の住処に招待したいけど、未だ動けなさそうなんだよね。」

「怪我人なんだから無理はしなくていいぞ。僕が助けたんだし、治るまでぐらいは面倒を見るよ。」

「あーうー。じゃあ、お世話になります。」

「うん。任せとけ。」

こうして俺と諏訪子の生活が始まった。



朝起きて、何時もの修行をする。

昼ぐらいに魚をとってきて諏訪子と食べたり。

そうして諏訪子と暮らし始めて2日がたった。

諏訪子は消耗していて存在が安定しないのか朝起きたら蛇になって首に巻き付いていたりする。

諏訪子によると無意識に近くの力を吸収しようとしてしまったらしい。

「……じゃあ、僕が諏訪子に力を渡せば良いんじゃないか？」

「……」

「……」

てな訳で今日、包帯を変えた後に力の譲渡を試すことになった。



万が一のために洞窟に結界を張り、諏訪子と向き合う。

諏訪子が僕の背中と首に手を回し、僕を引き寄せた。

このときの諏訪子はとても蠱惑的だった。

「クロ、少し痛いかも。我慢して。」

そう言った後、諏訪子は僕の首に噛み付いた。

諏訪子は僕を強く抱きしめた。

瞬間、何かが吸われる感覚と諏訪子との境界が曖昧に……あつ。

嗚呼、溶けて、融けて、解けて、曖昧に――

僕の意識はそこで暗転した。



――寂しいと感じた

――感じてしまった

――僕は寂しかった

— 僕は永いときの中で温もりを、関わり求めた

— 私は産まれたときから孤独で、下に立つものは居ても隣に立つものは居なかった

— そんなとき、私は僕に出逢った

— 私は僕に助けられた

— 僕は私に救われた

— 僕には私が輝く太陽の様に見えた

— 私には僕が優しく照らす月の様に見えた

— 嗚呼、温かい

— 寂しくない

——
ずっと、このまま

——
「黒、起きなさいっ!!」

4 「白蛇と誓い」

「ん。あー。あれ？」

目が覚めた。

目の前には諏訪子の顔がある。

幸い、左瞼の傷は治ったようだ。

諏訪子を見てふと、思う。

「綺麗だ・・・」

僕、何言ってるんだ。

聴こえてないよな？

あー心臓がバクバク言ってる気がする。

えーつと、昨日は何をつ！?

あー思い出した。

諏訪子に力の譲渡をするために首を噛まれたんだった。

で、噛まれて力を譲渡したから俺の能力が暴走して、諏訪子と混ざる前に母さんのお陰で戻って来れたと。

あつぶねえ。

母さん^{アカコ}本当にありがとう・・・。

僕は体に不具合は無いか確かめようとして、気付いた。

——あれ？僕と諏訪子、抱き合ってたね？

何か凄く離したくない。

うん。

諏訪子も未だ寝てるし、起きてなかったことにして二度寝しよ。

——「聴こえてるよ。ばか。」



諏訪子の声がする。

「黒、起きて。」

「うー。諏訪子？おはよう。」

「おはよう、黒。」

目を開けると諏訪子が僕を揺すっていた。

——あれ？

諏訪子を見て違和感を感じる。

よく見ると、諏訪子の左目が水色になっていた。

「諏訪子、その目は？」

「目？」

「ああ。左目が水色になってる。」

「へ？」

その後、諏訪子と二人で変わったところは無いか調べてみたものの精々僕の力が1割ほど減っているだけだった。

「あーうー。多分、黒と私が一時的に曖昧になったのが原因だと思う。多分それで黒の要素が混ざったみたい？」

「あー。それって僕にも諏訪子の要素が出てるんじゃないか？」

「うーん。精々記憶位じゃないかな？黒の記憶をちらりと見た気がするし。」

「それって不味くないか？」

「うーん。まあ、黒ならいいや。私も黒の記憶を見たからおあいこってこと。」

「まあ、諏訪子がそう言うならいいんだが。」

その後、諏訪子の包帯を取って見ると傷は全て塞がっていた。傷が治ったので諏訪子の住処に行こうということになった。

「諏訪子の住処って何処にあるんだ？」

「湖の底。」

「底？」

「うん。湖の底に沈んでる社に結界を張って住んでたんだ。」

「へえ。」

そうして洞窟から歩くこと数十分。

湖に着いた。

「此処が諏訪子の住んでる湖？」

「うん。黒を私の住処に招待するよ。ちよつと泳ぐから、私の手を離さないでね。」

諏訪子に手を引かれながら泳ぐ。

その社はすぐに見えてきた。

半球形の結界に覆われており、空気もあるみたいだ。

諏訪子と僕はその結界を通り抜けた。

「うん。着いたよ。」

「此処が諏訪子の住処……。」

「うん。一度言ってみたかったんだ。いらつしやい、黒。」

「うん。お邪魔するよ、諏訪子。」

諏訪子に案内されて社の居間に座る。

すると諏訪子は社の奥から瓶と徳利を2つ持ってきた。

「コレは？」

「お酒。」

「・・・僕、酒なんて飲んだことなんだけど？」

「あーうー。実を言うと私もない。」

「ま、まあ二人共初めてな訳だしゆっくり飲んでみればいいと思う。」

「そうだね。」

諏訪子が2つの徳利に酒を注ぐ。

片方を僕に渡して、諏訪子は言った。

「うん。私達の出逢いに、乾杯。」

「ああ。乾杯。」

始めて飲む酒はとても美味しかった気がした。



——黒は多分、これから永い時を生きる。

——正確には黒は、不滅の存在だ。

——このことは黒と混ざった私しかわからない。

——嗚呼、離したくない。離したくないとも。

——でもそれは黒の為にならない。

——黒は紅という女の最後の我儘を叶えたいから。

——ならせめて、黒に私の分霊を預けよう。

——それがあれば黒と二度と逢えなくなることもない。

——私は黒がいる限り不滅なのだから。



目が覚めた。

目の前には諏訪子が寝ている。

——うん。何か見覚えのある状況だ。

あー離したくない。

こういうのを人を駄目にするってやつかなと思う。

あーでもそろそろ旅を再開しなきゃなあ。

そんな事を考えながら諏訪子のことを見ていると、目が合った。

「あーうー。おはよ、黒。」

「ああ、おはよう。」

「……。黒、行くんでしょ？旅。」

諏訪子は起き上がりながら僕にそう言う。

「・・・ああ。」

「紅——お姉さんとの約束を叶えたいんでしょ？」

「ああ。」

「うん。でも、会いには着てね？」

「ああ。約束する。」

「約束ね？黒、指切りしよう!!」

——指切りげんまん、嘘ついたら、食べちゃうぞつ。」

「・・・じゃあ食べられないように会いに来なきやな。」

湖の外に出る。

すると諏訪子が何かを取り出しながら言った。

「あ。あとコレ上げる。」

「白い蛇？」

諏訪子が何処からともなく取り出したのは金と水色の目をした白い蛇だった。

「コレは私の分霊ってやつかな。多分、黒の助けになると思う。」

「ありがとう。」

その蛇は何時かの諏訪子のように僕の首に巻き付いた。

「黒、必ずだよ？また会った時のお土産話期待してるよ。」

「諏訪子、お土産話を沢山つくって会いに行くよ。」

「じゃあ、また何時か。」

そうして僕は諏訪子に再開を誓い、歩き出した。

5 「新たな出会いと月の都」

あれからどれぐらいが経っただろうか。数年は経ったが十年は経ってないはず。

僕は暇なので能力の確認をすることにした。

僕の能力は主に3つ。

1つ目は僕が生まれてから持っていた「ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力」。

その名の通り、ありとあらゆるものを曖昧にすることができる。

主な使い方としてはある地点とある地点の間の距離を曖昧にして跳ぶことで瞬間移動をする空間跳躍などがある。

2つ目は紅からもらった「認識を操る程度の能力」。

認識を操ることができ、自分を認識されないようにしたりできる。

同時にありとあらゆるものを認識することができる。

3つ目は紅からもらった「与える程度の能力」

自分の持っているものや意味、能力などを強制的に与えることができる能力。僕の名前も意味としてこれによって付けられている。

他に妖怪としての能力があり、僕の種族に名前を付けるとすれば「ケムリ妖怪」となるだろう。

母さんアカコによると僕は、紅によって名前を与えられた影響で出雲 黒と定義されているので今の人間の姿か煙にしか変化できないようだ。

最近試したら何故か目の色が変わったあとの諏訪子になら変化することができた。(きつと使うことはない。)

諏訪子にだけ変化出来ることが気になって僕の状態を「認識を操る程度の能力」によつて認識してみたら、やばいことがわかった。

わかった事は3つあり、1つ目は紅のことだ。

紅の最後に言った「私の全部」をあげる」のときに僕という妖怪の体と紅の体が融合して別種の妖怪モドキの人間モドキになっていた。

要するに僕は人間でも妖怪でもないバケモノってわけだ。

その為、僕は妖怪で在ると同時に人間という不思議な側面をもつ。

2つ目は諏訪子との融合が思いの外深かったことだ。

その為、僕は黒で在ると同時に諏訪子という謎掛けみたいな状態になっている。

まあ、悪影響はない。

精々諏訪子と離れると1時間位、半身を失った様な気分になるだけだ。(超重症)

3つ目は僕の出自についてだ。

僕、実は始まりの妖怪だったらしい。

僕って何歳なんだろう。



今日もお日柄もよくーってありえないほど森が広い。

かれこれ3か月直進してるんだが風景に変化がない。

落ち込んでいると、首に巻き付いている諏訪子の分霊の白蛇が舌でなめて慰めてくれる。

諏訪子(分霊だけど)、ありがとう。

僕、感動で泣きそう。

「ん？妖力？」

勘も「さっさと行け」って言ってるし。

——何かこの流れ覚えがあるなあ。

「最初から飛ばしてこうつと。——空間跳躍っ！」

目的地まで跳ぶ。

うん。

襲われている女の前に割り込んで妖怪の拳を往なす。

今回は拳かあ……。

僕も拳を構え、相対する。

殴ってきたので、力づくで妖怪の腕をへし折る。

出来るだけきれいに折ったのでちゃんと処置すれば治るだろう。

「ほら、速く去れ!!」

今回の妖怪は頭が良かったのかすぐに退いてくれた。
はあ。

八意だっけ？

うーん、でもなあ。

聞かか。

「あー。僕は黒。君は？」

「助けてくれてありがとう。私は八意~~×~~。」

「うん。よろしく。八意~~×~~。あれ？これで発音合ってる？」

八意は少し驚いた表情をした。

「え、ええ。合ってるわ。言いつらいなら永琳でいいわよ。」

「わかった。」

「で、永琳はどうして襲われてたの？」

「ああ、ここの薬草を取りに来てたの。」

「助けてもらったお礼をしたいから私の住んでいる都に招待するわ。」

「じゃあ、お言葉に甘えて。」



永琳に連れられ、しばらく歩くと大きな都が見えてきた。

諏訪子の分霊は僕の中に隠れてもらっている。

何気に人が多く住んでいる所に来るのは初めてだ。

「ここが私の住んでいる都よ。」

「でっか。」

永琳が門番らしき人に事情を説明したみたいで、通してもらえた。

「行くわよ。着いてきて。」

そうやって永琳は都の中心の方に歩いていった。



あーうー。

何でこんなことになってるんだろう。

横には僕の挙動を監視する永琳。

前には何か凄^い気配を放つこの都の偉^い人^様（ツクヨミというらしい）がいる。
その神様が僕に問いかけた。

「人間のようであるが人間ではない。しかも妖怪や神ですらないと視える。貴様は、何者だ？」

——うーん。僕が何者か、かあ・・・。

僕は少し考えてから言った。

「うん。あえて言うなら、妖怪^バモド^ケキの人間^モモド^ノキかな。」

と。

6 「月移住計画」

ツクヨミとの間が静まり返る。

——あ、これだけは言っておかないと討伐されちゃう。

そう思い、僕は言った。

「あつ。でも危害を加えるつもりはないよ。僕は旅をしていろんなところを見て回りたいたいだけだから。」

「ふむ。まあ、バケモノだろうと月移住計画を邪魔しなければ好きにしろ。」

「永琳、コイツがここにいる間はお前の所で面倒を見る。」

「はい。わかりました。」

こうして突然始まった話し合いは、僕が永琳の所でお世話になることが決まってお開きとなった。



「今日からここが貴方の家よ。」

永琳の家、というか診療所みたいなどころについた。
すると永琳が僕に聞いてきた。

「黒、今のうちに聞いておきたいことがあったら私が答えるわ。何かある？」

じゃあ、話し合いのときに出てきた「月移住計画」について聞いてみようと思い永琳に言う。

「そうだ、永琳。」

「何かしら?」

「月移住計画って?」

そうすると永琳はそれに纏ることを僕に語った。

永琳によると人間は永琳の作った薬のお陰で老化の原因の「穢れ」を体から追い出しているのが長寿らしい。

で、発展した人間は考えた。

老化の原因が「穢れ」ならその無い月に移住すればいいのではと。

って言うことらしい。

で、月に出発するのは1年後らしい。

僕は丁度良い時に来たようだ。

——じゃあ、僕は月移住のためのロケット? っていうのを見届けよう。

きっと良いお土産話になるだろうから。

「なるほど。じゃあ、そのロケット? で月に行くまでお世話になるよ。あらためてよろしく、永琳。」

「ええ、よろしく黒。」



—— 偶に黒の夢を見る。

—— コレは分霊私の記憶。

—— 次はいつ黒を見れるのだろう。

—— 私は、夢でもいいから黒半身を感じていたい。



——夢を見た。

夢を見るのは久しぶりだなと思う。

でも、内容はあんまり覚えてない。

何かとてもいい夢だった気がする。

でも覚めてしまうと半身を喪った様な気分になる。

これが名残惜しいってやつだなと思いつつながら、永琳の貸してくれた余っていた部屋から出る。

しばらく歩くと永琳を見つけたので、朝の挨拶をする。

「おはよう。」

「ええ。おはよう。」

「あ、永琳。朝つくるからちよつと待ってて。」

「ええ。わかったわ。」

最近、永琳と過ごしてわかったことがある。

——永琳は結構な面倒くさがりなのだ。

朝は料理が出来るのに栄養ゼリー？とか言うので済まそうとするし、服は何時も赤青のだし、被検体を用意するのが面倒だからと自分や僕で実験するし。

最初の方のしつかりしていた永琳は幻想だったらしい。

今では僕がちよくちよくご飯をつくっている。

本当に料理を教えてくれた母さんアカコには頭が上がらない。

因みに僕も面倒くさがって何時も母さんからもらった道士服姿だが、人のこと言えないなあ……。

「いただきます。」

永琳と食卓に座り朝食を食べる。

「黒、相変わらず私より料理が上手いわね。」

「まあ、姉が料理ができなくてね。母さんに教えてもらったんだ。」

「あら、貴方って家族がいたのね。」

「うん。血は繋がってないけどね。」

「黒が自分のことを話すなんて珍しいわね。」

「まあ、最後だしね。」

そんな他愛もないことを話しながら永琳と朝食を食べる最後の時間が過ぎていく。

今日は、月移住計画の最後のロケットが発射される日だ。

永琳はこの都の創設者として最後を見届けるために最後のロケットに乗るんだと。

朝食を食べ終わり、片付けをする。

ふと、距離が離れていても感知出切る程の妖力がすごい速度で此方に近づいてくる。

勘が警鐘を鳴らす。

「ん？妖力が。永琳、伏せろっ！」

僕は咄嗟に永琳の前に出て防御。

——直後、視界が凄まじい光で埋め尽くされ、凄まじい爆発音が鳴り響いた。

◇◇◇◇

どうにか防御には成功した。

僕はすぐに永琳の安否を確認する。

「永琳、無事か？」

「ええ、なんとかね。貴方こそ大丈夫なの？」

「まあ、ちよつと疲れたけど。怪我は無いですよ。」

こんな成りだけで始まりの妖怪だし。

能力が間に合わなかったから妖力で相殺したけど、1割位持つてかれた。

周りを見渡すと僕が立つてる場所より前は更地になっていた。

幸い、ロケットの発射場や居住区は僕達の後方にあるので人死は少ないはず。

「永琳、君はロケットに!!僕が抑えるから、予定を繰り上げれば逃げられる!!」

「でも、それじゃ貴方は。」

「うーん。死にはしないよ。この一年間の恩返しもしたいしね。」

「・・・黒、ありがとう。少し、頼むわ。」

「ああ。任せとけ。月では健康に気をつけて。——頑張れよ、永琳。」

「ええ。貴方に言うのも可笑しいのだけど。黒も、どうか健康で。」

そうして僕と永琳は別々の方向へ走り出す。

僕は妖怪達を抑えて時間を稼ぐために。

永琳は月に行く為に。



向こうには見渡す限りの妖怪の群れ。

此方は僕一人。

諏訪子の分霊は僕の中に避難したみたいだ。

「ざっと見て、一対千つてとこかな。」

——あー。手加減.....していると勝ち目なさそう。

出すか、本気。

変化の応用でひたすら頑丈に3尺1190cm位の棒を作る。

何時もは隠してる妖力を全開に、何故か使える霊力も棒の強化につき込む。

少し、向こうが怯んだ気がする。

そんな量多いかなあ、僕の妖力。

まあ、時間稼^戦ぎ^争を始めよう。

7 「クレーターの中心で・・・彗？」

拝啓、諏訪子。

僕は今、おつきなクレーターの中心にいます。

何でこうなったんだっけ？

えーっと。

確か、永琳と別れた後に時間稼ぎのために本気で妖怪相手に無双してたらロケットが無事に発射されたんだよな。

そしたら、何か視界が真っ白になって目が覚めたらクレーターの中心だった。

・・・。

どういうこと？

よく見ると、クレーターの所々に木が生えてるし。

・・・。

もしかして凄い時間が経ってる？

あーうー。

うん。

【認識を操る程度の能力】で「僕の寝ていた時間」は認識できるはずだ。

「ふむ。二百年かぁ・・・。」

——長いよ!!

うん。

落ち着こう。

まあ、永琳は無事に月に行けたっほいし。

僕は長い間寝ただけで無傷だから良しとする。

でも、どうして二百年も寝てて何もなかったんだ？

すると僕の鎖骨あたりから諏訪子の分霊の白蛇が出てきた。

よく見ると、疲れているみたいだ。

ん？

「・・・もしかして、お前が結界を張っててくれたのか？」

諏訪子の分霊はその長い首をだるそうに縦にふる。

「そうなのか、ありがとう。」

諏訪子の分霊はどういたしましてというように頭を振ったあと、僕の首に巻き付いて寝てしまった。

——ありがとう、諏訪子。



「ツクヨミ様、どういう事ですか!」

「どうもこうもない。幾ら今害が無かろうと、あんな不確定要素の塊の様なバケモノは消せるうちに消してしまった方がいい。」

「彼は私達を守るために戦ったのにですか?」

「そうだ。あのバケモノがあのまま二千年程成長すれば、神である私でさえ片手間で滅ぼせる様に成っただろう。ヤツには限界が存在しない。」

「それは、どういうことですか？」

「・・・歳を重ねるごとに力は増え、技は冴え渡り、やがて不滅の怪物に成る。」

「・・・。」

「・・・もし、万が一、奴が生きていたら。もう二度と奴を倒すことはできん。良いか、八意[×]。もし奴に属するモノに出会ったら、絶対に敵対するな。何故なら、奴はもう不滅なのだから。」



—— 黒の気配が薄くなった。

—— どうやら大きな怪我を負った様だ。

—— 未だ、黒は生きてる。

—— なら、心配しなくても大丈夫。

—— 黒には私のあの時持てる力を全て託した分霊が付いてる。

—— ほら、黒が回復してる。

—— 嗚呼、次は何時逢えるのだろう。



うーん。

どうしよう。

結局、永琳にも会えなし。

地味に、次の目的地が決まらないなあ。

・・・。

困ったときは。

近くの地面に、適当に作った棒を立てて手を離す。

右に倒れた。

よし右に、

—— ドサツ

「あー。」

その時、僕の前に傷だらけの幼女が降ってきた。

忘れてた第一章の登場人物紹介

名前：出雲 黒（イズモ クロ）

種族：ケムリ妖怪（始まりの妖怪、詳細不明）↓バケモノ（妖怪×人間×霊物×神のハイブリッド）

容姿：黒髪、水色の瞳、中性的な青年⇄不定形の黒い霧

能力：【ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力】

（黒の認識出来るものを曖昧にする。）

——【認識を操る程度の能力】

（そのまんま。副次効果としてありとあらゆるものを認識出来る。）

——【与える程度の能力】

（意味や能力を強制的に押し付．．．与える。）

性格：お人好し、優しい、即時即決即行動？

概要：主人公。凄い永く生きてる。世界が存在する限り消滅することはない概念的存在。妖怪よりも人間寄りな考え方をする。ヒロインは諏訪子のつもり。身長は180。強さは．．．というか厄介さは身体能力だけで原作ゆかりん位？

名前：出雲 紅〔イズモ ベニ〕

種族：寿命が少し長いだけの人間（半妖の成り損ない）

容姿：紅色の長髪、水色の瞳、美少女

能力：〔認識を操る程度の能力〕

（そのまんま。副次効果としてありとあらゆるものを認識出来る。）

——〔与える程度の能力〕

（意味や能力を強制的に押し付．．．与える。）

性格：自由奔放、お人好し、冷静沈着？

概要：主人公の姉。黒の性格や人間性に大きな影響を与えた。ヒロインにするか迷ったけど結局は、家族ポジションに落ち着いた。身長は165位。現在は黒の中で眠っている。

名前：出雲 吾可子〔イズモ アカコ〕

種族：最強の妖怪（詳細不明）

容姿：紅い長髪、紅い瞳、美女

能力：【ありとあらゆるものを読む程度の能力】

（何でもわかる。）

——【認識と記憶を操る程度の能力】

（そのまんま。副次効果としてありとあらゆるものを認識出来る。）

——【愛する者のためなら絶対に敗北しない程度の能力】

（そのまんま。ぶっ壊れ。運命を捻じ曲げ、可能性さえ創り出す。）

性格：誠実、紅と夫のためなら何だつてする

概要：紅の母。強くて親馬鹿で天才。地味に作中最強。能力がぶっ壊れ性能。愛する

者のため↓生還することと認識されているため殺し合いでは絶対に敗北しない。身長

は170位。故人。

名前：洩矢 諏訪子（モリヤ スワコ）

種族：白蛇（靈物）↓神（土着神）

容姿：金色の長髪、爬虫類の様な金色の瞳（水色と金色のオッドアイ）、美女⇄美少女

（変化可能）

能力：〔坤を創造する程度の能力〕

（地面を創ったり創った地面を操ったり出来る）

性格：お気楽、腹黒い、率直

概要：ヒロイン。蛇なので嫉妬深く独占欲強めで行きたい。助けられたときにコロツと堕ちちやつたチヨロイン。捏造設定増々でほぼオリキャラと言ってもいい。身長は150位（大人状態では170位）。

第二章 「柏手様と諏訪子様」

1 「新たな出会い、名付け」

うん。

この子の切傷を手当をしながら、今起きたことを整理しよう。

まず、棒を倒した。

そしたら僕の前に傷だらけの幼女が落ちてきたと……。

意味わからん。

この子が目覚めそうだ。

「うう……。ひつ。」

あるえ？

僕なんかした？

あ、僕のことを人間だと思って怯えてるのか。

この小さな妖怪に目を合わせて言う。

「大丈夫。僕は君を傷つけないよ。」

「ほ、んとう?」

「うん、本気だ。諏訪子に誓ったっていい。」

「すわこ?」

「ああ、僕の大切な人だよ。」

「・・・へんな人。」

「・・・うん。まあ、今はそれでいいや。手当するからじっとしてて。」

「・・・わかった。」

そうしてこの子の手当を再開する。

まあ、諏訪子の時よかマシだな。

手当の刀傷に擦り傷。

骨に異常は無しつと。

後は、何時も通りに母さん謹製の傷薬を塗って包帯を巻く。

「うん。これでよし。」

「ねえ、なんで助けるの？」

この子が聞いてきた。

「うーん。何でって言われてもね……。助けられるから助けた、じゃだめかな？」

「うん。やっぱりへんなひと。」

そう言つて彼女は寝てしまった。

彼女は訝しみながら匙を口に運ぶ。

「!!・・・おいしい。」

「それは良かった。おかわりは有るから好きなだけお食べ。」

「うん。」

彼女は掻き込むようにお粥モドキを食べきると、皿を差し出しておかわりを要求した。

その後、彼女はお粥モドキを計6杯おかわりした。
いろんなことがあったのだろう。

彼女は満腹になったあと、泥のように眠ってしまった。

「ゆっくりお休み。」



——人間に襲われた。

——わたしは何もしてないのに。

——刃物で切られて、転んだりしながらスキマを使って命からがら逃げ出した。

——逃げた先にいたのは黒い髪に水色の目をした気配がチグハグなへんな人間。

——彼はわたしの傷の手当をして、おいしいご飯をくれた。

——なんで助けるのか聞いたら、「助けられるから助けた」といった。

——へんなひとだと思った。

— 彼の側は暖かくて、安心できる気がした。

— 何となく、父親がいたらこんな感じなのかなと思った。



— 黒に大切な人って言われちゃった。

— 嬉しいやら恥ずかしいやら。

— 黒、適当に選んだ方向が私の居る場所に向いてるなんて運命を感じるね。



うん。

うん？

何か勝手に事態が好転してる気がする？

ま、まあ、この子が起きたら自己紹介をしよう。

色々してて忘れてた。

このまましないでいると、この子からずっとへんなひと呼ばわりされてしまう。

僕に変な趣味は無いっ。

まあ、妖怪から見たら妖怪を助ける変な人間だからなあ。

あ、そろそろ起きそうだ。

「・・・うーん。」

「おはよう。」

「・・・おはよう。」

挨拶は返してくれるみたいだ。

「遅くなったけど、僕の名前は出雲^{イズモ} 黒^{クロ}。君のは？」

「・・・わたしには名前は無い。」

「それは、すまん。」

「・・・。つけて。」

「え？それは・・・。」

「いいから、名前、つけて。」

彼女が迫って来る。

しようがない。

「ああ、わかったよ。名前かあ……。」

彼女を見る。

金髪に紫水晶のような瞳。

うーん。

目の色から紫^{ムラサキ}じゃ安易だから、紫^{ユカリ}かな。

苗字は僕の出雲をもじって八雲^{ヤクモ}で良いか。

「よし、決めた。君は今日から、八雲^{ヤクモ} 紫^{ユカリ}だ。」

「八雲^{ヤクモ} 紫^{ユカリ}……。」

「あー。気に入らなかつた？」

「ううん。気に入った。わたしは今から八雲 紫！よろしく、クロ。」

「ああ、よろしく。紫。」

2 「紫との旅路、紫の巣立ち」

「紫、これからどうする？やりたいこととかあるかい？」

「・・・わたし、やりたいことなんてない。」

「じゃあさ、紫がやりたいことが見つかるまで僕の旅についてくる？」

「うん！」

つていうやり取りが有って、今僕は紫と旅をしています。

僕は変わり者だけど、紫も十分変わり者だった。

紫は人間に興味を持っていた。

妖怪によくある捕食対象や玩具としてではなく、隣人としてだ。

因みに紫は僕に師事するつもりらしい。

曰く、「クロは強そうだから」とのことだ。
暫く歩いていると、周りが暗くなってきた。

「紫、今日はここら辺で泊まろうか。」

「うん。わかった。」

「僕は魚採ってくるから、紫は結界の練習として結界張っておいてね。」

「うん。頑張る。」

うん。

紫がうちの子さ、かわいいんだよ。(親馬鹿)

なんというか、純粹で頑張り屋さんときた。

僕は、眩しくて直視できないよ。

つとしようもない本心ことを考えながら魚を2尾驚掴みする。

紫の所に戻ると、紫は結界を張るのに四苦八苦していた。

——魚の下処理が終わって、串に刺したら教えに行こう。そうして、魚の下処理が終わって串に刺したので紫の隣に行く。

「紫、結界はこうすると楽に張れるんだ。やってごらん。」

「(うん?)」

「うん。上手だね。」

うん。

紫、うちの子天才かよ。

一回実演しただけでコツを掴んだんだが？

客観的に見ても僕の数十倍の才能がある。

紫はすごいなあ。(親馬鹿)

はあ、諏訪子に逢いたい。(重症)

そんな事を考えながら魚を焼く。

魚が焼けたら、背囊に仕舞ってあつた炊き込みご飯モドキを取り出して皿によそう。

「紫、晩御飯が出来たよ。」

「うん。」

紫と二人で手を合わせる。

「いただきます。」

「クロの作るご飯はどれも美味しいね。」

「そうか。そう言ってくれると嬉しいよ。」

だって、元々は一人旅だったし。

味のことに関して永琳もあんまり言わなかったし。

諏訪子の分霊も、あれからは常に僕の中で眠っているしなあ。

「い、ちそうさま。」

こうして、僕と紫の一日は過ぎ去っていく。何時も



紫の能力の修行をしたり、人里に寄って医者 of 真似事をしたり、秘境を見に行ってみたり。

紫は強く美しく成長し、僕は大妖怪を超えるバケモノに成長した。

そうして、紫との旅を始めてから60年位が経った。

僕は、人里で悪霊や病魔を祓っていたら「柏手様カシデゼマ」と呼ばれるようになっていた。最近編み出した一回目の柏手で能力を使い、二回目の柏手で霊力を使って祓う技。その行為が神様にでも見えるのだろうか？

まあ、人里で自由に行動出来るようになったし人も助けられるしいかなと思う。

ある日、小さな村に立ち寄った。

その村では小さな子供が子供に化けた妖怪と遊んでいた。

その妖怪に後で聞いたなら、「子供と遊ぶのは楽しい」と言うので悪さをしないならと何もしないことにした。

その日の夜、紫が話しかけてきた。

「ねえ、黒。やりたいことが見つかったの。」

「そうか。それはどんなことなの？」

「人間と妖怪の共存できる世界を創ることよ。」

「・・・うん。世界を創るとは大きくでたね。やり遂げられる？」

「ええ、実現させて見せるわ。」

「そつか。うん。こんな日が何時か来ると思ってたよ。」

僕は、背囊から大きな箱を取り出して紫に渡す。

「紫、これをあげるよ。」

「これは？」

「僕が紫の為に作った道士服と本だよ。開けてみて。」

箱の中には紫の太極図が描かれた前掛けの付いた白い道士服と二冊の本が入っていた。

「僕の道士服を参考にして鎧よりも丈夫だし、前掛けに何個かの術が織り込んであるから役に立つはずだよ。」

「それは、すごいわね。でもこの二冊の本は？」

「それは、僕が紫の為に書いた秘伝の書？と紫への指南書みたいな物。」

「指南書はわかるけど、秘伝の書？奥義みたいなものってこと？」

「そう。僕の使う全ての我流結界術を記したよ。指南書の方は考えつく限りの紫の能力の応用法と傷の手当や病気等への対処法が書いてある。」

「全て？・・・もしかして、『空喰い』も？」

「うん。僕の『空喰い』も書いてあるよ。紫なら僕的能力も再現できるし使いこなせると思う。」

——そう。紫は「境界を操る程度能力」で僕の「ありとあらゆるものを曖昧にする程度能力」を再現できる。

【空喰い】とは僕の我流結界術の奥義。(100年修行したときに編み出した)

【空喰い】は空——空間のエネルギーを”正と負を曖昧にする結界”で変換し、己の力にする究極の結界術。

まあ、擬似的に無限のエネルギーを取り出す結界ってとこだ。

うん。

月に行った永琳が聞いたら卒倒しそうだ。

紫なら悪用しないと思うし、万が一は僕が止めればいい。

今の僕には片手間でそれぐらいならやってのける程の力がある。
つくづく、バケモノになったなあと思う。



——黒が近づいて来る。

——嗚呼、早く、早く逢いたい。

——ねえ、黒。

——私は貴方が恋しい。



次の日の朝、僕は紫を見送りに人里の外に来ていた。
紫は大きなスキマを背に此方を見る。

「紫、行くのかい？」

「ええ。先ずは場所と賛同者を集めなきゃね。」

「うん。紫、また会おう。」

「ええ、ク口。また何時か。」

そうして、僕の贈った道士服を身に着けて紫は旅立って行った。

——娘の門出を見ている気分だなあ。

うん。

頑張れよ、紫。

君の夢が叶うことを祈っている。

「さてと。僕も旅に出ますか。」

確か、こっちの方に大きな国が出来たらしい。

じゃあ、その国を見に行ってみよう。

僕は、その国を目指して歩き出した。

3 「諏訪子との再開」

ほー。

凄い賑やかだ。

僕は今、諏訪の国に来ている。（名前はそこらへんで聞いた）
うん。

諏訪の国？

絶対に諏訪子に関わってるに違いない。
きつとそうだ。

一秒でも早く逢いに行かないと!!

そうして僕は諏訪の国の中心にある神社へ空間を跳躍した。

其処に諏訪子は居る!!（勘）



——黒が来た。

——うん。

——行こう、黒に逢いに。

——私は神社の鳥居の前に見えた黒に向かって走り出した。



僕は鳥居の前に着いた。

うん。

向こうから走ってくる少し小さくなつた見覚えのある人影。その人影が僕にぶつかって、僕は諏訪^{その人影}子を受け止めた。
うん。

とても安心する。

「久しぶり、諏訪子。」

「久しぶりだね、黒。逢いたかったよ。」

「僕も逢いたかった。」

「うん、先ずは神社の中でお土産話を聞きたいな。」

「うん。そうしよう。」

——そうして僕は諏訪子に手を引かれて歩き出した。



それから僕たちは様々なことを話した。

諏訪子は神様になったことや国をつくったことを。

僕は旅した場所や出会った人達のことを話した。

そうして時間はあつという間に過ぎていった。

「ねえ、黒。」

「ん？どうしたの諏訪子？」

「帰って来たことだし、私の住処に行こうよ。」

という訳で、今僕は諏訪子と酒盛りをしている。

酔った諏訪子が僕に向かって両手を広げる。

「あーうー黒お、抱っこー。」

「はいはい。諏訪子、おいで。」

諏訪子は力の節約の為に美女から美少女になっていてらしい。
その美少女状態の諏訪子は腕の中にすっぽり入ってとても温かい。

「んー。かぶつ。」

諏訪子さんよ、僕の首筋に噛み付くんじゃ有りません。

チクツとしただけで、あんま痛く無いけども。

僕はまあいいかと寝惚け始めた諏訪子の頭を優しく撫でる。

んー。

眠くなってきた。

諏訪子は僕に抱き着いたまま寝ちやったし。

布団を出してその上に諏訪子を起こさない様にゆっくりと寝転ぶ。

僕は諏訪子と一緒に掛け布団を被った。

「お休み、諏訪子。」



—— 嗚呼、黒を感じる。

—— 温かい。

—— 私の黒。

—— 寝惚けたふりをして印を付けてしまおう。

—— 愛しい黒。

—— 今は、少しだけこの温もりに、解けて、融けて、混ざって・・・。

——
嗚呼、食べてしまいたい。



目が覚める。

何かとても良い気分だ。

でもなあ……。

布団から出たくないというか、離したくないというか……。(重症)

目の前には元の大きさに戻った諏訪子の顔がある。

うーん。

綺麗だなあ。(重症)

……困ったら、二度寝に限る。

寝よ。



本日二度目の朝が来た。

さつきと違うのは僕が押し倒されていることだけだ。

誰に?・・・諏訪子しかいないだろ。

よく見ると、正気じゃ無さそう。

捕食者
蛇としての気配が強い。

あーなるほど、腹が減ってるのか。

力の節約のために小さな姿をとってた位だもんなあ。

「.....」

すると諏訪子は僕の首筋に噛み付いた。

「っ。」

結構痛い。

血出てるなこれ。

諏訪子は僕の血を飲んでるみたいだ。

引き剥がそうにも、強く抱きつかれているので剥がしようがない。

・・・しようがないなあ。

諏訪子の本能が満足するまで待つか。

出血程度じゃ死なんし。

まあ、美女の諏訪子に抱き着かれているわけだし役得だとも思っておこう。



暫くして、諏訪子の目が覚めた。

諏訪子は、状況がわからなくて口に血を付けたまま混乱していた。

「え？口から黒の血の味がする。なんで??」

「おはよう、諏訪子。僕の血って美味しい?」

「え?うん。美味しいけどさ、どういう状況なの?」

状況を説明する。

多分、始めて逢ったときの様に無意識に近くのを吸収しようとした状態だったのだらう。

美女の諏訪子がしょんぼりしていて大変可愛かった。(重症)

まあ、力は戻ったみたいなので永琳が言っていた結果オーライってやつだ。

すると諏訪子が美少女状態になって言った。

「黒、そろそろ神社に行こう。」

流石に神様が神社を2日も空けるのはよろしく無いようだ。

僕は諏訪子が立派に神様をやっているみたいで感動した。

拝んどこうかな、崇り神らしいけど。



「諏訪子様！うちの女房が！」

神社に着くと一人の男性が駆け寄ってきた。

「五郎、梅ちゃんがどうしたの？」

「女房が、梅が倒れちゃったんです！」

「医者には？」

「来てもらったら、診たことのない病気だって……。」

「そんな……。」

うーん。

諏訪子が困ってるみたいだ。

病気かあ。

うん。

柏手様の仕事をするかね。

そう思い諏訪子に声をかけてきたかける。

「諏訪子。」

「黒？」

「僕ならどうにか出来ると思う。連れてって。」

「でも……。」

「いいんだよ。諏訪子。柏手様は気紛れで人を助ける神様らしいよ?」

「……。ありがとう、黒。」

「諏訪子、行ってくるよ。じゃあ、五郎君だっけ? その梅とかいう娘が居るところまで案内して。」

「わ、わかりましたっ!」

そうして走ること5分。

一軒の民家に着いた。

中には悪霊に取り憑かれた女性が寝ている。

「うん。これなら。」

僕は、その梅とかいう娘の前で二回柏手を打つ。

一回目の柏手には「ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力」を乗せて、悪霊と娘の繋がりを曖昧にする。

二回目の柏手には霊力を乗せて悪霊を祓う。すると、梅とかいう娘が目を覚ました。

「ううん?・・・五郎?」

「梅、梅!!よかった。よかった!!」

「どうして?私は倒れたはずじゃ・・・。」

「ここにいる柏手様が助けてくださったんだ。」

「あの柏手様が!?!」

「ああ。柏手様、女房を助けてくださってありがとうございます!!」

五郎が僕に感謝を伝える。

うん。

柏手様の話はここまで伝わってるんだね。

まあ、助けられて良かったよ。

恥ずかしいので、僕は柏手様として行動しているときに何時も言っている^決照れ隠し^{台詞}で誤魔化すことにした。

「うん。僕は気紛れに人を助けてるだけだよ。」
と。

4 「諏訪子との日々」

あの時助けた夫婦の子供が大人になるぐらいの時間が経った。

僕は、柏手様として諏訪神社に居候させてもらっている。

諏訪神社には神主がいないため仕事を代行している。

あんまり仕事はないけどね。

そういえば、いつの間にか諏訪神社には僕の柏手様撰社が作られていた。

それによってなのか気紛れにと称して困っている人を片っ端から助けていたら、態々遠くから僕に頼み事をしに来る人などもいた。

まあ、助けられるなら助けに行っただけどね。

うん。

3日に一度ぐらいの頻度で柏手様として呼ばれ、残りは諏訪子と神社でのんびりする。

そんな感じで、今の僕の生活はそれなりに充実している。



朝起きると何時も通りに諏訪子に抱き着かされている。

あー離したくない。(重症)

この時間が永遠に続けばいいとさえ思う。

あーでもそろそろ起きないと？

ん？

神社の鳥居の方に強い霊力を感じる。

・・・んー諏訪子を起こそう。

「諏訪子、起きてくれ。」

「・・・あーうー。黒？どうしたの？」

「鳥居の方から強い霊力を感じる。」

「……行こう。」

そうして向かった先には、珍しい緑色の髪をした生後半年ほどの赤子が捨てられていた。

誰が捨てたのだろうと、諏訪子と国を回ったがこの赤子を知っている存在は居なかった。

すると諏訪子が僕に提案した。

「ねえ、黒。何かの縁だ。この子、この神社で引き取って育てよう。祝子ってやつだよ。」

「うん。僕も手伝うよ。なんたってこの神社の居候の神様だしね。」

そうして僕たちは捨てられていた緑色の赤子を神社で引き取ることにした。

赤子には諏訪子が髪の色から翡翠ヒスイと名付けた。

子育てはとにかく大変だった。

例えば、食事のことで諏訪子が焦ったり。

「どうしよう黒、赤子って何食べるんだっけ?!」

「多分、生後半年は経ってるはずだから離乳食かな。今から作ってくるよ。」

夜泣きをあやしたり。

「黒、翡翠が泣き出しちゃったどうしよう。」

「ふぎやああー!!」

「諏訪子かして。うん。よしよし、いいこいいこ。」

諏訪子が歩けるようになった翡翠の相手をして疲れ果てたり。

「諏訪子、翡翠ただいま。」

「黒、もう、疲れた。」

「諏訪子!?!ん?」

「かしわでしやま、だっこして〜。」

そうして、翡翠はすすくと育っていき立派な巫女になった。

翡翠には才能があり、僕の霊力を使った術はほぼ出来る様に成った。

祝子（神職）としても優秀で、僕が代行していた仕事も全て任せられる程だ。



ある日の朝。

「黒、久し振りにお出掛けしよう!」

「柏手様。神社のことは私に任せて諏訪子様と出掛けたらどうですか？」

という訳で諏訪子と少し変装して諏訪の国を歩いてます。

僕は何時もの白黒道士服を脱いで白と黒の着物を着て。

諏訪子は元の大きさに戻って何時もの帽子を脱いで紫色の着物を着ている。

綺麗だなあ。(重症)

「この国も随分と大きくなったね。」

「うん。黒や翡翠のおかげだよ。」

「いや、僕達だけの力じゃないさ。諏訪子の神様としての威光もあるし、住んでいる人々が国を大切にしたからだよ。諏訪子は胸を張っていいと思うよ。」

「・・・うん。」

僕と諏訪子は手を繋いで歩き出した。

諏訪子のいい気分転換になるといいな。
それから、市場の露店によってみたり。

諏訪子と団子を食べたり。

露店に戻って翡翠にお土産を買ったり。

諏訪子と神社の鳥居から夕方の国を見下ろした。

「黒、綺麗だね。」

「うん。綺麗だ。」

「・・・黒。次はいつ旅に出るの？」

「・・・。もうしばらくは此処にしようと思ってる。」

「ねえ、黒。私がさ、行かないでって言ったらどうする？」

「・・・。」

「黒の中で紅とかいう女の遺言が重いのは理解ってる。でも、大好きな黒に側に居て欲しい。私のモノであつて欲しい。そう思っちゃうのは駄目なのかな？」

「諏訪子っ僕は、」

諏訪子が人差し指で僕の唇を抑える。

「黒。きつと、永い永い時を旅すれば何時か黒の中の比重が私に傾く時が来る。だから、私は待つよ。何千年も何万年も。」

「……」

「ねえ、黒。だから、旅が終わったら必ず帰って来てね？」

だから、僕はあの時の様に言う。

「ああ、約束する。」

「本当に?」

「ああ。もしも僕が約束を破つたら、諏訪子が僕を食べてしまふだろうか? それもいいかなとは思うけど、約束は守らなきゃ母さんに叱られてしまう。」

「・・・黒。指切りしよう。」

——諏訪の神の名に於いて指切りげんまん。もし私神との約束を違えたら、黒を食べて私神のモノにしちやう

よ。」

「うん。指切りだ。」

——此処に神との契約は成った。

その夜の諏訪子は月に照らされて、とても妖艶だった。

そうして神とバケモノの夜は更けていく・・・



「諏訪子様、柏手様!!」

翡翠の声で目が覚める。

一緒に寝てた諏訪子も起きたようだ。

「翡翠、そんなに慌ててどうしたんだ？」

「それが、朝境内を掃除していたら足が3本ある鳥がこれを・・・。」

「どれどれ？」

翡翠から渡されたのは一枚の神の力を感じる手紙。

なるほど、神の力を感じたから翡翠は慌ててたのか。
僕はその手紙を読み上げる。

「――諏訪の神、貴方にお互いの信仰を賭けた戦を申し込む。大和の神、八坂神奈子。」

5 「諏訪大戦」

——諏訪の神、貴方にお互いの信仰を賭けた戦を申し込む。大和の神、八坂神奈子
これが今朝諏訪子宛に送られて来た手紙の内容だ。

うん。

よーするに、お前の信仰（国）を寄越せってことだ。

．．．。

うん。

キレそう。

何言つてんだ大和の神とやらは。

穏やかーに暮らしてただけなのに。

なに？そんなに戦が好きなんですか?!

．．．。

うん。

せめてさあ、時間や場所位書けよ。

うん。

大和の国にちよつと文句言いに行こう。

「つてことで大和の国に行つて一言いつてくる。」

「ごめん、黒。ちよつと急すぎてわかんない。」

「えーつとですね、僕は今は一応この国の神な訳でして。ちよつといきなり来たやつが平穩を壊そうとしてるから、ちよつと一言いつてきたいつてこと。」

「あーうー。黒、どうしよう。」

「うーん。断ると国総出で攻めて来そうだし、交渉ができる今のうちに神どうしの決闘とかに持ち込むしかないかなあ。まあ、今は僕がいるから負けることは無いけどどうする。」

諏訪子は少し悩んだ後、覚悟を決めたような顔でいった。

「黒、交渉を頼めるかな。この国は私の国だ。私が守りたい。」

「・・・。うん。わかった。交渉は任せて。」

「ありがとう黒。」

僕は神社の境内に出て、手を叩いて能力を使う。

目の前の空間が揺らいだ。

「じゃあ、諏訪子、翡翠。行ってくるよ。」



へえ、ここが大和の国か。

神の力の残滓から大雑把に空間を曖昧（曖昧）にしたけど、合（合）つてたみたいだ。

門番らしき人影が見える。

うん。

交渉を有利にするために柏手様として威圧感増々の盛々でいこう。

妖力じゃなく、最近使えるようになった神力？と霊力を全開にする。

門番に何となく神様っぽい口調で話しかける。

「頼もう。諏訪の国の使者として参った柏手と申す。大和の神にお目通り願いたい。」

「諏訪のつ。話は聞いております。どうぞ此方に。」

うん。

神様モード使えるわ。

門番？もびびってるみたいだし。

そうして歩くこと数十分。

何か大きい神社に着いた。

するとそこにいた背中に縄を背負った女の神？が話しかけてきた。

「貴様が諏訪の国の使者か。私は八坂神奈子。大和の神だ。」

「私は柏手と呼ばれている。諏訪の神の代理として参った。」

「ふむ、柏手。要件はなんだ。」

「諏訪の国に申し込まれた戦を神と神の一騎打ちにさせていただきたい。」

「うむ、いいだろう。もとよりそのつもりだ。民への被害は信仰に響く。」

「場所は国の間にある平原でよろしいか？」

「ああ。30日後に会おうと諏訪の神に伝える。」

「承った。では。」

僕は二度柏手を打ち、空間を歪める。

大和の神を背に歪んだ空間へと歩き出す。
ふう。

無事に終わって良かった。

「ほう。面白そうなのが居るみたいだねえ．．．。」



帰った後、交渉の結果？を諏訪子に伝える。

一騎打ちだと僕は手を出せない。

「と、いう訳で。諏訪子、特訓しよう!!」

そうして始まった諏訪子の特訓。

とはいっても神力？の使い方や能力に関してはお手上げなので、僕が教えるのは身のこなしと神力で使える様にした我流結界術くらいだけだね。
あとはひたすらに組手をして経験を積む。
そうして一ヶ月はあつという間に過ぎていった。



僕達は諏訪の国と大和の国の間にある平原に来ていた。

今日は一騎打ちの日。

今日の為に諏訪子と特訓してきた。

僕に出来るのは見届ける事だけだ。

「黒、私頑張るよ。」

「頑張れ、応援してる。」

そうして戦が始まった。

「くらえっ！」

「効かないねえ!!」

諏訪子が能力を使って空中に大きな岩を削って落としていく。

対する八坂神奈子は雷や暴風といった自然現象で迎撃する。

母さんが言っていた八卦？で考えると能力の相性は八坂神奈子は天候っぽいし大地に関する諏訪子とは悪そうだ。

「くっ、これならあ!!」

「む、落ちろ。」

諏訪子が地面をひっくり返す。

八坂神奈子は空を飛んで回避したあと諏訪子に向かって雷を落とす。

「っ『空壁』！」

「結界か?!」

咄嗟に諏訪子が僕の教えた簡易結界を使って雷を防ぎ八坂神奈子へ反撃する。

神の性質や格の問題か諏訪子の攻撃は八坂神奈子には効きづらいみたい。

そうした一進一退の攻防が繰り返される。

少しして双方とも疲れが見え始めた。

お。

諏訪子が勝負に出た。

紫に教えたアレを使うのか。

諏訪子は練度が足りなくて少ししか使えないが十分だろう。

「『空喰い』!!からの、くらえっ!!」

「なにいつ。力が跳ね上がった?!」

『空喰い』は本来、僕や紫のような存在の妖力を外部から取り出して変換する術だ。でも諏訪子は霊物で土着神。

意思や自然から力を受ける。

だから、変換は必要ない。

力だけ集めればいいのだから。

諏訪子は集めた力をそのまま太い光線として放った。

さしずめ永琳のところで見ただ束光線ってところか。

「くウ……。お返しだよっ!!」

「なっ?!」

あ。

八坂神奈子が光線を耐え抜いて疲れ切った諏訪子に極太の雷を放つ。

諏訪子は躲せずに雷を食らって倒れてしまった。

——決着だ。

勝者は八坂神奈子。

大和の国の神だった。



あの後、後日話し合いをしに行くと八坂神奈子は言い去って行った。

諏訪子が殺され無くて良かった。

最悪の場合は八坂神奈子を【空喰い・裏】で消し飛ばせば良いかと思ってたんだけど、準備が無駄になって良かったー。

今僕は諏訪神社で諏訪子が起きるのを待っている。

目立った外傷はなく、神に成った影響で体が丈夫になったんだろう。

軽く僕の神力？を譲渡したらかすり傷とかも治ったので大丈夫だと思おう。

「ううつ……。」

諏訪子が起きたみたいだ。

翡翠が見ているので僕も向かう。

「諏訪子、大丈夫？」

「黒？……ああ、負けちゃったのか。……ごめんね黒、翡翠。私、負けちゃったよ。」

「……。諏訪子、君は十分頑張った。少し神としての相性が悪かったただだよ。」

「そうですよ！諏訪子様は凄く格好良かったです!!」

「黒、翡翠……。」

諏訪子は僕と翡翠に抱きついて泣いた。

僕と翡翠は諏訪子がおちつくまで諏訪子をさすっていた。

6 「守矢神社、別れ」

次の日、八坂神奈子が神社に来た。

僕は何時を通りだけど、諏訪子と翡翠は少し緊張しているみたい。

まあ、八坂神奈子は内心とても焦っていることだろう。

あの一騎打ちから一週間弱。

大和の国の者が信仰を国中で広めていたのに、諏訪子の力が弱まってないのが何よりの証拠だ。

カマかけてみよう。

「ようこそ、八坂神奈子。顔色が悪いな、信仰は広まっているか？」

「っ。」

「なるほど。上手く行っていないと見える。」

「黒、どういふこと？」

「ん？ああ。諏訪の国の民は崇諏訪子り神の崇りが怖いんだと思うよ。一騎打ちのときに使った術、あれは八坂神奈子の暴風や雷よりもわかり易い脅威だからね。」

そう。

諏訪子と八坂神奈子の相性は悪いが、地上で暮らしている者たちからすれば暴風や雷よりも地面がひっくり返る方が危険だ。

それにより諏訪の国の民は改宗を拒んだのだろうと予測出来る。

うん。

哀れ、八坂神奈子。

あれ？

僕が考えた諏訪子が得する代案を今なら通せるのでは？

「八坂神奈子。提案がある。」

「なんだ。」

「此処の神社を改築し、お前と諏訪子を一緒に祀る。そうすれば諏訪子への信仰がお前に入るはずだ。そうすればお前はこれ以上の苦勞なく信仰を手に入れることができる。どうだ？」

「……。仕方ない。それしかないだろう。」

「うん。交渉が決裂しなくて良かった。」

「それがお前の素か柏手。貴様、交渉とはいってもほとんど脅しだろう。」

「あ、バレたか。」

「バレるものにも此れ見よがしに私を消滅させる気満々だっただろう。」

八坂神奈子は僕の背後を見る。

そこには僕が適当に作ったエネルギー塊が浮遊している。

エネルギー総量は八坂神奈子を消し飛ばしてお釣りがくるくらいだけだね。

「えっ。」

諏訪子と翡翠はわかってなかったみたいだけどね。

「うん。だって僕は知らない国の事より諏訪子達の方が大切だからね。その為なら神位殺してみせるさ。」

「その代案に乗るからくれぐれも敵対しないでくれよ。」

「うん。いいよ。」

「「え?!」」

そうして諏訪子と翡翠が混乱している間に八坂神奈子との交渉脅迫は終了した。
さーて。

仕事は山積みだ。

先ずは神社を改築して新しい名前を考えなきゃ。

「・・・翡翠、これってどういうことだと思う？」

「諏訪子様、私もさっぱりです・・・。」



よし、出来た！

あれから四日位で改築は終わった。

名前の方は諏訪子と八坂神奈子と翡翠が考えている。

翡翠はこのまま新しい神社でも巫女を続けるみたいだ。

うーん。

でもさ、柏手様僕の摂社って据え置きなの？

諏訪子、僕の摂社って「据え置きだよ。」はい。

わかったからその光のない瞳で僕を見ないでくれると……。
何というか、恐怖を感じるというか……。

「翡翠とやら、彼奴らは何時ものああなのか？」

「はい、神奈子様。柏手様は諏訪子様に弱くて……。」

「ああ言う夫婦の関係を尻に敷かれると言うんだな。」

「え？ 柏手様と諏訪子様は結婚してませんよ？」

「む？ いや、柏手には諏訪子の印がついているぞ？」

「ああ、なるほど。」

「?」



「どうやら新しい神社の名前は諏訪子の神としての苗字の洩矢から取って守矢神社に決まったらしい。」

「僕は諏訪子の苗字始めて知ったよ。」

「大和の国にはアマテラスとかいう位の高い神が居るようで八坂神奈子は此方に住むことになった。」

「大和の国との関係は僕がアマテラスに会いに行つて話したら「ツクヨミのやつ仕留め損なつてるじゃないか。」とかなんとか言われたあと姉妹国みたいな扱いになった。」

「ツクヨミって誰だっけ?」

「まあ、これで諏訪の国は安全だ。」

「よし、帰ろう。」

早く諏訪子に逢いたい。(重症)



「あ、柏手様。お帰りなさい。」

「翡翠、ただいま。」

うーん。

昔はかしわでしやま!! って飛び付いてきて可愛かったの「そのことは忘れてください
!」・・・えー。

まあ、翡翠をいじるのはここまでにしてアマテラスとのかつを諏訪子と神奈子に伝え
なきや。

「諏訪子ー。ただいま!」

「黒、お疲れさま。」

「む、柏手。アマテラス様はなんと？」

諏訪子と神奈子に先程決まったことを伝えると神奈子は驚いて「柏手、お前一体どんな手を使った？」と言われた。

うーん。

普通に会いに行っただけなんだけどなあ。

あ。

「神奈子。ツクヨミって誰か知ってる？」

「!？」

「?二人共どうしたの？」

「ツクヨミ様はアマテラス様に並ぶ高位神だよ。」

「へー。」

「柏手、お前は一体……。」

そうして諏訪神社は守矢神社と名を変えて、諏訪の国の平穩は保たれた。
うーん。

そろそろかなあ。



——黒はそろそろ旅に出る。

——印は付けたし、契約も結んだ。

——どう転んでも数千年後には黒は私のモノだ。

——嗚呼、待ち遠しい。

——今は出来るだけ黒を感じていたい。



何時もの様に朝起きて諏訪子を起こさないように布団から出る。

「おはよう、翡翠。」

「おはようございます、柏手様。」

「今日は僕が作るよ。」

此処での朝食の用意は僕と翡翠の交代制だ。

昨日は翡翠だったので今日は僕が当番だ。

——最後だし丁寧に作ろう。

予め用意しておいた食材や調味料に一工夫する。

今日の献立は、白米、お味噌汁、焼き魚、適当な野菜炒めだ。

翡翠は目を輝かせ、神奈子は直ぐに空になった器を差し出す。

諏訪子だけは浮かない顔だった。

「ん!! 柏手様。これ、凄く美味しいです!!」

「柏手、おかわり。」

「……。」

「諏訪子?」

「黒、行くの？」

まあ、諏訪子と僕の付き合いだ。
当然気付くよね。

「うん。」

「そっか。今日、旅に出るんだね。」

「旅？柏手様、どういうことですか？」

「ああ、旅を再開しようと思ってるんだ。」

「なんでですか？」

翡翠が問い掛けてくる。

「僕は、出雲^姉紅の最後の我儘を叶える為に旅を世界を見て回ら無きやいけなない。」

「……。」

「だから、翡翠。少しの間お別れだ。」

「少し?。」

「黒?。」

「うん。また会いに帰ってくるよ。あと、この御札をあげるよ。」

「この御札は?。」

「うん、御守りだよ。僕が丹精込めて削ったから翡翠を守ってくれる。あと諏訪子に

も。」

僕は諏訪子に黒と白の玉簪を渡す。

うん。

今の僕にはこれで精一杯なんです。

「黒。」

「僕の手作り。諏訪子に何かあれば何処に居ようと駆けつけるよ。」

諏訪子が抱き着いてくる。

僕は優しく諏訪子を抱きしめる。

ここで敢えて空気を読まない神奈子が一言。

「私にはなにか無いのか？」

「……。神奈子には、今適当に作った御札あげる。雷を一発防いでくれるよ。」

「雑だな。」

「うん。だって僕は諏訪子の方が大切だし。」

「黒お。」

「諏訪子、神奈子、翡翠。そろそろ行ってくるよ。」

そう言っ僕は境内に向かって歩き出す。

境内の真ん中らへんで柏手を打つ。

前の空間が歪み始める。

「そっだなあ……次は翡翠が結婚するときにくるよ。」

「へ？」

「あれ？ 諏訪子と神奈子は翡翠の想い人知らないの？」

「なんで柏手様が知ってるんですか〜?!」

「いや、何時も二人で楽しそうに話してるじゃん。」

「〜?!」

翡翠が赤くなる。

あ。

カマかけだったのに、大当たりと。

これは結構直ぐに帰ってくることになるか？

まあ、そろそろ行こう。

「じゃあ、行って来ます!!」

僕は諏訪子達に見送られながら空間を跳躍した。

今回は忘れなかつた登場人物紹介（第二章）

名前：出雲 黒（イズモ クロ）

種族：何者でもないバケモノ（神）

容姿：黒髪、水色の瞳、中性的な青年

能力：〔ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力〕

（黒の認識出来るものを曖昧にする。）

—— 【柏手を打つ程度の能力】

（そのまんま。神としての能力。）

性格：お人好し、優しい、最近交渉（脅迫）を覚えた

概要：主人公。最近神様になった。種族は神を含んだ何者でもないバケモノ。能力と霊力（その他）の併用を簡単にするために柏手を二回打つという今のスタイルを編み出した。（柏手を打たなくても能力は使える）困っている人を旅の途中でこのスタイルで助けていたら神様と勘違いされた結果、擬似的な土着神モドキに成った。ゆかりんに自身の編み出した結界術の奥義【空喰い】を教えた。今のところ神のいる国ぐらいなら滅ぼせる。未だ母親の背中は遠い。

名前：八雲 紫〔ヤクモ ユカリ〕

種族：スキマ妖怪（一人一種族の妖怪）

容姿：金髪ロング、紫水晶の様な瞳、幼女↓美少女

能力：〔境界を操る程度の能力〕

（認識出来る境界を操れる。スキマを操れる。）

性格：ドジな困ったちゃん、胡散臭いふり、根は優しい

概要：黒が拾った妖怪。黒が名前を付けた。黒が紫に贈った導師服を身に付けている。この道士服の前掛けには黒の能力によって”致命傷を曖昧にしてかすり傷にする”という付与（他にも汚れの自動洗浄、サイズ調整、自動修復、防御力向上等の付与）が成されている。〔空喰い〕と〔境界を操る程度の能力〕の相性が良すぎてヤバイ。（今気付いた）プロットの時点ではここまで強くなかった。作中最強まであと少し・・・かも？

名前：洩矢 諏訪子〔モリヤ スワコ〕

種族：神（土着神）

容姿：金色の長髪、爬虫類の様な金色の瞳（水色と金色のオッドアイ）、美女⇄美少女

(変化可能)

能力：〔坤を創造する程度の能力〕

(地面を創つたり創つた地面を操つたり出来る)

性格：黒のことが絡まなければ優しい、腹黒い、率直

概要：ヒロイン。嫉妬深く？独占欲強め。めでたく黒を確定で自分のモノに出来るようになった。実は黒に印を付けて自分のモノだと主張している。神奈子に負けたが二人で守矢神社を支えることで落ち着いた。(黒による脅は・・・交渉の結果)黒にもらった玉簪は何時も懸守りに入れて持ち歩いている。今のところ周辺被害を気にしなければ神奈子を倒せる。(「空喰い」を完全に習得したため)

名前：翡翠〔ヒスイ〕

種族：人間(現人神モドキ)

容姿：緑色の長髪、緑色の瞳、美少女

能力：〔風を司る程度の能力〕

(風に関することなら何でもできる)

性格：素直、優しい、初心

概要：黒と諏訪子が神社の鳥居で拾った赤子。人では最高峰の霊力を持つ。霊視能力

が低いと黒髪黒目に見える。諏訪子はテンパるため、主に黒が育てていた。黒と諏訪子に挟まれて育ったため、多量の神力により現人神モドキに成っている。黒と諏訪子を大切な家族と思う反面、神と人の違いを一番理解している。今のところ神社によく来る青年と仲がいいみたい。

八坂 神奈子〔ヤサカ カナコ〕

種族：神

容姿：青髪のセミロング、赤眼、美女

能力：〔乾を創造する程度の能力〕

（天気を創ったり創った天候を操ったり出来る）

性格：フランク、慈悲深い、黒の脅迫がトラウマ

概要：諏訪子に辛勝したあとに黒に脅迫された哀れな神様。諏訪子とは相性で勝ったようなもの。今やったら結果はわからない。最近、諏訪子のヤバさに気がついた。翡翠が心の癒やし。神様として接してくれるからか結構、翡翠を可愛がっている。

▶用語（作者の趣味増々&雑な設定）

【空喰い】

黒が編み出した結界術。特殊な結界を張り、空間内のエネルギーを強制的に自分の支配下に置く。エネルギーの隷属。要するに空間内のエネルギー（相手の放った攻撃などのエネルギーも）使い放題ということ。ゆかりんはスキマを使って他の空間からもエネルギーを持ってこれるので・・・。

【結界】

空間を区切る、正確には区切を付ける術。様々な種類がある。例としては区切りの外から中への干渉を遮断する防御結界。【空喰い】の特殊な結界は自身の支配領域の拡張が効果。

【神】

信仰によって産まれる存在。信仰が減ると存在が不安定になり、信仰が増えれば強くなる。信仰が消えると存在も消滅する。強大な存在による信仰は単体でも神の存在を維持できる。土着神はすでに存在しているものに信仰が集まった結果、神の力を獲得した存在。信仰が消えると神になる前の存在に戻る。

【妖怪】

人の恐怖等の負の感情から出た負のエネルギーが集まって出来る。核になる感情がある場合、その性質に引つ張られることがある。

【始まりの妖怪】

初めて産まれた妖怪。全ての妖怪の祖という訳ではない。核となったのは暗闇に對する”認識が出来ない”恐怖と暗闇での”寂しさ”と知らないという”曖昧”な感情だった。

第三章 「幻想郷」

1 「時の放浪者」

あれから少しー確か五年位？経った頃に翡翠が結婚した。

当然、結婚式には行った。

とうか結婚式を執り行いに行った。

翡翠の晴姿を見てみっともなく泣いた。

僕からの結婚祝いには翡翠に僕が創った勾玉を贈った。

諏訪子と神奈子に「過保護だねえ。」とか言われたけどしらん。

翡翠とその家族に何があるとすつ飛んで行けるようにしただけだ。

何か問題が？

因みに翡翠の結婚相手はあの青年だ。

僕の威圧に正面から「翡翠のことは守って見せる!!柏手様、そのために俺を弟子にしてください!!」と言うぐらいの青年だ。

気に入ったので弟子にすることにした。

そういえばあの青年は東風谷 春「コチャ ハル」というらしく、翡翠はその日から

東風谷 翡翠になった。

「翡翠、幸せにな。」

「翡翠、困ったことがあつたら私に言うんだよ？」

「翡翠。僕は、あー。——我が娘よ、幸せなりなさい。」

「神奈子様、諏訪子様、柏手様。いえ、お父さん。ありがとうございます。私、幸せになります!!」

こうして翡翠は結婚した。

青年と翡翠は神社の敷地に家を建てて住むらしい。

翡翠としても巫女の仕事は続けたらしい。

青年——春もそれを手伝う為に僕に弟子入りした。

暫くして、神社には仲睦まじい巫女と青年の姿が見られる様になった。

僕達はそれを見守っている。

——僕は翡翠が老いる迄は此処で見守ろうと思った。

「ねえ、翡翠。黒のことはお父さんって呼んだのに私はお母さんって呼んでくれないの？」

「それは少し恥ずかしいので……。」

「翡翠、お願い!!私だってお娘に母さんって呼ばれたい!!」

「うう……。お、お母さん？」

「……。翡翠い!!黒、うちの翡翠が可愛い!!」

「何言ってるんだ諏訪子。あたり前だろ？」（親馬鹿）

「そうだね！」（親馬鹿）

「うう……。」（間に挟まれて凄く恥ずかしい）



あれから、早くも40年が経った。

東風谷夫婦の間には2子の子供が出来た。

兄の秋と妹の冬華だ。

秋は春に似て、冬華は翡翠に似ている。

その二人も今は大人と言っても差し支えない程に成長した。

対して春と翡翠は老いた。

そしてある日、眠るように春が息を引き取った。

それから翡翠も老が顕著になってきた。

そうして翡翠にも別れの時が迫っていた。

ある日、神社の縁側でお茶をしていたら翡翠が隣に座った。

——ああ、神に成つたから理解つてしまう。

これは、翡翠との最後の時だと。

「柏手様。
お父さん」

「・・・翡翠。君は、幸せだった？」

「ええ。幸せでした。諏訪子様が居て、柏手様が居て、神奈子様が居て、あの^春の人が居る。そんな日常はとしても幸せでした。」

「そっか。」

「今ならお父さんのお姉さんの気持ちがわかる気がします。きつと、お姉さんはお父さんに生きて欲しかったただけなんだと。・・・でもその最後の我儘はお父さんの性質故に呪縛に成つてしまった。今更氣付いた私にはどうもすることもできません。だけど、お父さんには諏訪子様が居てくれる。」

——其処まで気付いたのか。

僕は静かに翡翠の最後の話に耳を傾ける。

「お父さん、幾ら時間が掛かっても必ず諏訪子様お母さんを幸せにしてあげてください。私はお父さんとお母さんに育てられて幸せでした。秋と冬華には幸せになってほしいと伝えて下さい。柏手様、私はそろそろ巫女として暇をもらいます。」

「翡翠、……。」

「お父さん、今までありがとうございます……。」

——翡翠の体から力が抜けた。

僕は倒れそうになった翡翠の骸を抱き止める。

「翡翠、……。」

僕は暫くの間泣いていた。

その泣き声を聞きつけた諏訪子達も翡翠の死に涙を流した。その次の日神社で葬式をした。

その時に秋と冬華に翡翠の言葉を伝えた。

諏訪子はずっと泣いていた。

その日のうちに僕は旅に出る支度を整えた。

「黒、行くの?」

「うん。時間が経って強制力は緩んでたけど僕も限界だったしね。次は約束を果たしに行ってくるよ。」

「・・・前にも言ったとおり私は待つよ。何千年も何万年も。」

「うん。」

「あと、私の分霊は最早別のモノに変質してる。多分、役には立つけどね。　：黒、行つてらっしゃい。」

「諏訪子、皆にはよろしく言っておいてくれると嬉しい。じゃあ、行って来ます。」
そうして僕は紅の最後の我儘を叶える旅に出た。



あれから、数え切れ無い程の時間が流れた。

人は発展し、小さな国が生まれたり滅んだりするのを繰り返した。

僕は旅の途中、剣を極めたり医者になってみたり。

ある程度のは極め尽くした頃、海に向こうに行ってみることにした。

海を渡るのは大変だったが操船は良い暇つぶしになった。

海に向こうでは諏訪の国等とはまた違った文化が発展していた。

とはいえ、永琳達の技術にはまだまだ届かないほどだけど。

そういえば不思議な人間達に会った。

聖人とか呼ばれていたかな？

色々あつてその聖人達の救世の旅に同行したりもした。

まとめ役の聖人は僕に「神でも人でも無い貴方にこの旅の行く末を見届けて欲しい。」
と言われたんだっけ？

あの時はとても驚いた。

何せ能力で完全に人に成つていたからだ。

僕はその聖人達との関わりで未だに知らなかつた事を沢山見聞きした。

最後は聖人の一人が騙され、まとめ役の聖人が処刑されてしまうことになった。
処刑される前に彼に会いに行つて話すと彼はこう言つた。

「これも又、主の試練なのです。」

彼は穏やかだつた。

僕は彼に人々の魂が時折放つ強い輝きを見た。

僕は問うた。

「これが君の旅の終わりか？」
と。

彼は微笑み、ただ見届けろと言つた。

そうして彼は十字架に貼り付けられ処刑された。

彼の弟子である聖人達は嘆き悲しんだ。

僕は彼の痕跡が消えるのを見届ける為に人から認識されないように柏手様に成つたら面白いものが見れた。

彼だ。

彼は試練を乗り越え、神様に成るらしい。

僕は人としての彼と最後の言葉を交わした。

彼は最後に僕にこう言った。

「何者でもない者よ、友人として貴方の幸せを願つてる。」

そう残して彼は去つて行つた。

彼の弟子達は彼の復活を見届けたらしく、彼の教えを広めると言つて各地に散つて行つた。

僕はまた旅を始めた。



あの旅から数百年が経った。

僕は久しぶりに戻ってきた日本（最近はそう呼ばれている）で不思議な半霊体質の少年と出会った。

彼の名は魂魄妖忌。

弟子にしてほしいというので少しの間教えてやることにした。

僕はその時の柏手様として活動していたので吃驚した。

なんと神様なら誰でも剣を使えると思ってたらしい。

僕の剣は永い時間の中で無駄を無くし効率を求めた剣はなので妖忌には合わないと思いい、基礎だけを完璧に叩き込んだ。

まあ、妖忌は才能があった。

妖忌はあつという間に上達し旅立って行った。

世界を回ってみたいらしい。

頑張れよ。

その後、海に向こうが凄く発展したという噂を聞き海を渡った。



あれからまた時間が経ち、人類は発展した。

僕は戦争を止めようとしている組織に入って凄腕傭兵として活躍してみたり、何処ぞの協会でエクソシストになってみたりした。

うーん。

紅の最後の我儘の呪縛？が結構弱くなってきた。

この呪縛？はあと千年位で解けそうかな？



情報屋から面白そうな話を聞いた。

ある町で殺人事件が起きたらしい。

その事件にはとある暗殺者の組織が関わってるらしい。

その犯行現場で銀髪の少女に会った。

彼女は研がれた刃物のような気配をしていた。

でも、何かに怯えていた。

気に入らなかつた。

僕はその少女を保護した。

少しの間だけでも救われて欲しいと思つたからだ。

傭兵やったりエクソシストやったりしたときに稼いだお金で買つた自分の仮家で少女に料理を振る舞つた。

少女は初めは警戒していたが少し食べると直ぐに完食してしまつた。

そんな少女と僕は数年の間一緒に暮らした。

少女はあまり喋らなかつたが、様々な事を教えてあげた。

少女が自立出来るようになるためだ。

それから少しして、少女はメイドになつていた。

・
・
・

何故に？

どうやらとあるお屋敷で雇ってもらえたらしい。

良かった。

僕は少女（咲夜という名前をもらつたらしい）に別れを告げて日本に戻ることにした。



とりあえず僕には戸籍が無いので、さくつと作っておいた。
お金の力って偉大。

それから僕は戸籍を変えて会社の社長になってみたり、学校の教師になってみたりした。

60年ごとぐらいに場所を変えないと怪しまれるからね。
そうして大きな戦争が起きたりして、世紀の節目を迎えた。

2 「再会」

「気をつけ、礼。」

学級委員の終わりの号令が教室に響く。

何時も同じ日常の一コマだ。

最近は何縛？の強制力もほとんど無くなり、何かの拍子で解けそうな感じだ。諏訪子の分霊は最近は何の首にマフラーみたいに巻き付いている。

僕は授業が終わり、昼休みになったので昼食を取るために屋上に向かう。

まあ、僕は友達が居ないんでね。

ん？

隣のクラスから人を嘲笑うような僕の嫌いな声が聞こえる。

机への落書き。

見に行くと緑色の少女が虐められているみたいだ。

うーん。

気に入らない。

確か、1年生の時にクラスメイトだった東風谷 早苗だっけか？
うん。

これもなにかの縁だ。

助けよう。

「おーい、東風谷。昼飯食べに行こう！」

「え？」

僕は彼女の腕を引いて教室を出る。

行き先は、屋上でいいか。

暫くして屋上に着いた。

「東風谷、大丈夫か？」

「・・・なんで助けてくれたんですか？」

「僕が気に入らなかつたから。」

「貴方が虐められるかもしれないですよ?!」

「いや、別に虐められても気にしないし。」

「そういう問題じゃ・・・。」

「東風谷、僕は気に入らなかつたから君を助けた。それでいいだろ?」

この娘は自分が虐められているというのに他人の心配か・・・。

ああ、何処ぞの今はもう人ではない友人を思い出す。

でも、似ている。

雰囲気も顔も髪の色も何もかもが僕に想起させる。

この娘から懐かしさを感じる。

嗚呼、逢いたい。

ん?

東風谷・・・？

東風谷って翡翠の。

もしかして。

「なあ、東風谷。」

「何ですか？」

「東風谷って守矢神社って知ってる？」

「何で貴方が神社家の事を?!」

なるほど。

なるほど。

この娘に感じる懐かしさは諏訪子の気配か。
つてことは諏訪子が近くに居る。

「東風谷。急で済まないが、今日帰ったら諏訪子に約束を果たしに今日逢いに行く伝えておいてくれ。」

「諏訪子様に?!」

「じゃ。」

「ちよ、ちよっと、待ってください!!」

困惑する東風谷を置いて僕は先生に早退する旨を伝えて、自宅に向かって走り出した。

ああ、準備することが一杯だ。



「ただ今帰りました。」

「ああ、お帰り早苗。」

「神奈子様、諏訪子様は？」

「諏訪子は未だ寝てるけれど。どうしたんだい？」

「それが、今日変な人に会いまして。」

「変な人？」

「ええ。首に蛇が取り憑いてる人なんですけど。諏訪子様に約束を果たしに今日逢いに
行くと伝えておいてくれて。」

「まさか!!」

「神奈子様、何か知ってるんですか？」

「ああ。早苗には話したことがあつただろう？この神社に居たもう一人のことを。」

「柏手様のことですか？」

「ああそうさ。柏手は理由は知らないが未だに旅を続けている。奴は遠い昔に諏訪子と
契約約束したのさ。」

「約束、ですか？」

「ああ。必ず逢いに行くっていうね。」

「じゃあ、あの変な人つて神様なんですか?!」

「多分ね。早苗、諏訪子を起こしてきな。諏訪子に柏手が来ると言えば飛び起きるはず
かい。」



——逢いたい。

——？

——黒の匂い？

——早苗から黒の匂いがする。

——え？

——今日来るの？

——嗚呼、やっと待ち望んだ時が来たのか。

——待ち遠しい。

——早く、早く。



うーん。

諏訪子にどんな格好で逢いに行けばいいだろうかとクローゼットの前で悩む。

まあ、こういうときは僕母さんからもらった道士服の正装一択だな。

神様として人には見えない様にしていけば大丈夫だろう。

懐かしい道士服に着替える。

ああ、とてもしつくりくる。

うん。

そういえば準備なんて殆ど無かった。

後は、あの早苗とか言う娘の気配から神社の位置を割り出して向かうだけ。
うーん。

あつちか。



ようやく着いた。

懐かしい階段だ。

ゆつくりと嘯みしめるように登っていく。

永い間違えていないし、諏訪子は元気だろうか。

やっとあの日の約束が果たせそうだ。

ふと、呪縛？のことであの友人が言っていた事を思い出した。

「旅とは目指す場所に辿り着くまでが旅なのです。」

ああ、確かにと思う。

紅の最後に残した呪縛？は僕にとっての諏訪子の辿り着くべき場所へと帰らないといけない

んだと唐突に理解した。

よし、そろそろ登り切る。

さあ、逢あいに行ゆこう諏訪子のもとに。

人影が見える。

ととてもとても逢あいたかった人影だ。

——ああ、今呪縛は解けた。

僕はその人影の前に立って言う。

「諏訪子、ただいま。」

「黒、お帰り!!」

——こうして神とバケモノの契約は果たされた。



それから、僕は一晩中諏訪子と話した。

諏訪子にお土産話を沢山話した。

聖人達と旅をして見聞きしたこと、様々な出会いと別れがあつたこと。

諏訪子は始終ご機嫌で、僕の話をにこにこしながら聞いていた。

諏訪子、くつそ可愛い。(重症)

諏訪子からはこれまであつたことを聞いた。

冬華の子孫が早苗であること、早苗の両親は他界していること、信仰が薄まり神としての存在が保てなくなりそうなこと。

——そして、紫が幻想郷に来ないかと誘いにきたこと。
なるほど、なるほど。

紫は無事に夢を叶えられたわけだな。

神社の鳥居の上に諏訪子と座る。

月が綺麗だな。

僕は旅の中で手に入れた神酒を取り出す。

そしてとつてあつたあの時の徳利を取り出す。

「諏訪子、久しぶりに乾杯しよう。」

「うん。」

「じゃあ、僕と諏訪子の再会に。」

「うん。黒と私の再会に。」

「乾杯。」

うん、月に照らされて諏訪子が綺麗だ。(重症)
そうして神とバケモノの再会の夜は更けていく・・・

3 「ようこそ幻想郷へ」

目が覚めた。

腕の中からは諏訪子の寝息が聞こえる。

確か昨日は諏訪子と乾杯した後に久しぶりに諏訪子の住処に潜って続きをして、そのまま布団を出して寝た。

うん。

神奈子とかに何も言わずに来てしまった。

どうしよ。

取り敢えず起きようと身体を起こすと、諏訪子に抱き寄せられる。

あれ？

力強くない？

いつの間にか美女モードだし。

ん？

首筋に噛まれたような痛みが。

妙に疲れてると思ったならそういうことだったのか。(察し)

諏訪子によって布団に押し倒される。

「黒お、もつと。」

「ちよ、ま、諏訪子?! 噛むのは?!」



——久し振りの黒の味だあ。

——うん。

——美味しい。

——昔より美味しくなってる気がする。

——黒が強くなったからかな？

——神奈子と早苗には悪いけど、もう少しこのままで・・・。



頑張った。

吸血？されて本当に疲れた。

まあ、この位の苦労は待たせた身としては甘んじて受け入れるべきか。

諏訪子は満足したのか、にこにこしながら僕の横に座っている。

そろそろ神社に戻って神奈子や早苗に説明しなきゃなあ。

「諏訪子、そろそろ神社に戻ろう。」

「うん。」

そうして僕と諏訪子は神社に戻った。

丁度神社では朝食の準備が終わったところだったのでそこで説明させてもらうことにした。

「え？じゃあ出雲君が柏手様だったんですか?!」

「うん。まあ、別に呼び方は自由にしてくれていいよ。」

「柏手。あんたこれからどうするんだい？」

「うーん。正直言つて僕は諏訪子と一緒に居られればいいからなあ……。」

「じゃあ、黒。此処に住みなよ！元々黒はこの神様なんだしさ！」

「……ちよつと気になったんですが。諏訪子様、何で大きくなってますか?!」

「?これが私の元の姿だよ?」

話し合いの結果、僕は諏訪子の住処の方に住むことになった。
諏訪子曰くその方が安心するらしい。

「・・・そういえば神奈子。幻想郷の話はどうするの?」

「うむ。このまま消えるのもちよつとね・・・。」

「うん。幻想郷に関してだったら話ぐらいはつけられるよ。後は東風谷をどうするかだね。」

「早苗か。早苗はどうしたい?」

「私は・・・。」

東風谷は悩む素振りを見せる。
うーん。

両親が居ないって言ってたな。
選択肢位は作ってあげよう。

「東風谷。」

「出雲君？」

「これから諏訪子達が行こうとしているのは正真正銘の異世界だ。ラノベの様に戻ってこれないかもしれない。そうしたら此方の世界とはオサラバだ。此方の人間とはもう会うこともできない。」

「……。」

「君は着いて来なくてもいい。着いて来ないなら暮らす場所と将来に困らない位の金はどうかしてあげるよ。よく考えるといい。」

そう言うと東風谷は少し考えて言った。

「着いて行きます。私は巫女ですし、よく考えたらこの世界に親しい人は諏訪子様と神奈子様以外居ませんから。」

「うん。わかった。」

すると神奈子が疑問に思ったのか話しかけてきた。

「柏手。妖怪の賢者とはどうコンタクトを取るつもりだ？」

「ん？ああ。紫ならさつきから視てるよ？」

「「え？」」

「おーい、紫。出て来ないと無理矢理スキマから引つ張りだすぞ？」

視線を感じる方向へそう言うとスキマが開いて紫が慌てて飛び出してきた。見覚えのある道士服を着ている。

「ふう。クロ、久し振りね。」

「・・・紫。慌てて出てきた後に取り繕っても、残念な感じしかないけど？」

「それはいいの。で、幻想入りの話だったかしら？」

「うん。ここら一带を向こうに持ってける？」

「ええ。行けるわ。ついでに此方の人間の記憶も消しておくわ。」

「じゃ、よろしく。」

「承ったわ。暫く待っていて。」

そう言い残して紫はスキマで何処かに行ってしまった。
そして直ぐに諏訪子や神奈子が質問してくる。

「『どういうこと(だ)?!』」

「ん？紫は僕の一番弟子だよ？」

「へえ。出雲君って凄いひと？神様？だったんですね。」

「いやいや、柏手。ツクヨミ様を知っていたり、お前の知り合いは一体どうなっているんだ。」

「普通だよ？」

そうやって話していると神社を浮遊感が襲った。
空気が変わる。

永らく感じていなかった汚れが少ない自然の空気だ。
周りに妖怪の気配、向こうには人の気配がする。

——此処が紫が創り上げた幻想郷か。
するとスキマが開き、隣に紫が現れる。

「歓迎するわ、ようこそ幻想郷へ。」



「で？紫、申し開きはある？」

「……(ぎ)いません。」

僕は今、紫に説教をしていた。

いや、ね？

土地ごと幻想入りできたのはいいんだけどさ。

でもさ、許可を取らないで山の上とかに持つてくるのはどうかなと思うんです。

「せめて話を通しといってくれよ。」

「すいません……。」

「……まあ、紫のおつちよこちよいは今に始まったことじゃないし。しょうがないなあ。山の天狗には僕が話力で脅迫し付けてくるけどね。紫は罰として僕が戻ってくるまで正座ね。」

「……はい。」

「つてなわけで諏訪子、僕は天狗に話を付けてくるよ。」

「うん。黒、行ってらっしゃい！」

そうして僕は神社の周りに結界を張って、天狗のもとに向かった。

「神奈子様。今、副音声で脅迫つて聞こえたんですけど・・・。」

「いいかい？ 早苗。柏手は諏訪子に関わることは基本的に交渉という名の脅迫で片付けようとする。絶対に怒らせちゃだめよ？」

「はー！」

4 「天狗との交渉（物理）」

「侵入者、覚悟!!」

「うん。寝てな。」

柏手を打ち、斬りかかってくる天狗の意識を刈り取る。

えーっと、これで20体目位かな？

天狗って殺意高くね？

うーん。

天狗の偉い奴のところ迄誰かに案内させるか。

「お次はこの私、清く正しい射命丸文がお相手です!!」

「ん？じゃあ、お前でいいか。」

「へ?」

射命丸とか言う娘を適度に叩きのめして、案内させることにする。神力と霊力の出力を上げる。

先ず結界で閉じ込めて、霊力の塊で全方位から軽く叩く。

わあ、一瞬でぼろぼろだあ。

威圧感増々で射命丸に言う。

「射命丸とやら、ここの長のところ迄案内しろ。」

「は、はいただいまあ!」

射命丸の後ろをついていく。

途中で天狗の集団や白狼天狗が襲い掛かって来たんだが、柏手で意識を刈り取る迄に留めておいた。

ん?

着いたっばい。

向こうに此処で一番大きい気配を感じる。

するとおぼろげと射命丸が目的地に着いたことを言う。

「……です……。」

「ああ。もう行つていいぞ。」

妖気？

もしかして未だ折れないのか？

……射命丸文、良い気骨をしてる。

もう一度叩きのめして折れないなら、式にしてみるのも面白いかもしれない。

「……一応、そう安安と通す訳には行かないんです！覚悟！」

「射命丸文。折れない君に敬意を称して、少し本気で相手してあげよう。」

射命丸文が飛び掛ってくる。

これは、風か。

懐かしい。

よく翡翠の組手に付き合ったなあ。

最近使つてなかった妖気を開放。

【空喰い】の応用で僕と射命丸文を囲む。

神力を使うと周辺被害が酷くなるから神力は抑えて。

うん。

翡翠の技を借りよう。

【空喰い】によつて僕の右に風と霊力と妖力を束ねて槍にする。

「射命丸文。死ぬなよ？」

「なんですかこの妖気と霊力はっ!!」

「翡翠、技を借りるよ。——破魔・風神槍っ！」

射命丸文は避けられない事を悟つたのか風と妖力で相殺しようとしている。

——甘い。

この技は非力な人間の巫女が大妖怪を破る為に編み出した破魔の風槍。この風槍は相手の防御や迎撃を巻き込んでその全てを貫通する。

「ぐううっ・・・な?!押し切られる?!」

僕の放った風槍は射命丸の防御を貫き、彼女の腹を抉り取った。

——うん、死んでない。

よく視るとこ認識するこら辺の天狗の中では上位の力を持つてるみたい。

うん。

凄く良いね。

良い暇つぶしに成り成長しそうだ。

僕はそう思い、彼女の傷を塞ぎ意識を刈り取る。

うーん。

札を貼って飲み込んでおこう。

僕は射命丸文を僕の中に彼女を曖昧にして飲み込む。

さあ、この山の長に会いに行こう。

side 目撃者：天狗

「……。」

「侵入者つて今、射命丸様を食べなかつたか？」

「……食べたな。」

「よし、逃げよう。」

side 目撃者：紫

（師匠が、ヤバい。助けて藍ー!!）

（どうしたのですか紫様?!）

（師匠が天狗を食べちゃったのよ?!）

（はい？紫様のお師匠様は神の一種だったと存じていますが？）

（だからヤバいのよー!!しかも、昔の数百倍は強くなってるしい!）



「お前が此処の長か？僕はこの山の長に要件がある。」

「如何にも。私がこの山を治める大天狗、天魔 村雨だ。」

「僕は巷では柏手と呼ばれている。山に出来た神社のことは把握しているな？」

「ああ、把握しているとも。しかし、貴方様がかの柏手様だとは……。」

「ん？僕のことを知っているのか？」

「ああ。あの妖怪の賢者に唯一勝てないと云わしめた太古の神。……それは事実か？」

「うん。まあ、やろうと思えば世界位は滅ぼせるかな？」

抑えてた神力と霊力を天魔に向けて叩き付ける。

天魔の知覚出来るぎりぎりの強さにしておくか。

天魔からゴクリとつばを呑むのが聞こえる。

もう少し脅し・・・忠告しておこう。

「・・・では、柏手様の要件とは神社のことかな？」

「うん。いきなり来たのは申し訳ないんだが、無闇やたらに攻撃しないようにしてくれ
ると嬉しい。まあ、隣人として仲良くしてほしいから滅ぼしたくはないんだ。」

「あ、ああ。天狗や山の妖怪にはよく言うておく。」

「うん。じゃあ、これから隣人としてよろしく。もし良ければ、神社に参拝してくれると
嬉しいかな？」

「ああ。今度伺わせて頂きます・・・。」

こうして山の長との交渉への脅迫は無事に終わった。

面白い拾いものもしたし、満足の行く結果だ。

あ、天魔に射命丸文のことは言っておかないと。

「あと、天魔。」

「何でございましょうか？」

「ここに居た射命丸文つての貰つてくから。」

「はい？」

「代わりに何かあつたら柏手様として協力してあげるよ。じゃー！」

そう言つて僕は柏手を打ち、諏訪子達の待つ神社へと空間を歪める。

さあ、帰ろう。

side 脅迫被害者：天魔

「天魔様、ご無事ですか?!」

「あ、ああ。無事だ。天狗の被害は?」

「は！天狗は基本的に軽傷で意識だけを刈り取られていました。．．．ただし、射命丸文様が食べられたとの証言が。」

「．．．。射命丸だけで済んだと捉えるべきか。射命丸のことに關しては箝口令をしけ。天狗達に伝えよ。あの神社には敵対するなど。」

「はー!」

(射命丸、すまぬ．．．。お前の死は無駄にはしない。)

※射命丸文は死んでいません。



「ただいまー!」

「黒、お帰り！」

飛び付いてきた諏訪子を抱き止める。

あー荒んだ（脅迫して来ただけ）心が癒やされるう。

すると早苗を連れた神奈子がこちらに来る。

「柏手、話はどうなった？」

「つけてきたよ。後ついでに天狗にこの神社に参拝しに来てくれると嬉しいって言った。」

「なるほど。上手く行ったみたいだな。（天狗達は、きつと脅迫されたんだろうな。少し哀れだ。）」

話していると抱きしめている諏訪子から何かの圧を感じた。

・・・見つめてくる瞳に光がない。

僕、何やらかしたつけ。

「・・・ねえ、黒？」

「す、諏訪子？」

「何で黒から、知らない女の匂いがするの？」

「あ。」

「心当たりが有るんだね？ねえ、どうして？」

「・・・えーつとですね。ちよつと面白そうな天狗を見つけまして、式にして鍛えたら良い暇つぶしに成りそうだなあと。」

「・・・。(式、式かあ。浮気？ではなさそうだし。それくらいならいいかな？匂いは後で上書きすればいいし。) うん。ならいいや。心配したよ。」

「諏訪子、心配してくれてありがとう。」

「ううん。私は黒が一番大切だから。無事ならそれでいいの。」

「じゃあ、続きは紫とかも交えて話そうか。」

そうして諏訪子の機嫌も治り、僕達は神社の中に入っていった。

side 神奈子と早苗

「神奈子様、諏訪子様が怖いです。」

「あー。諏訪子は祟り神だし独占欲が強いからねえ。」

「……。（強いとか言うレベルじゃないと思います。諏訪子様、あれ絶対に病んでますよ。ヤンデレですよ!!）」

「まあ、勝手に仲直りするさ。柏手も基本的に諏訪子の事しか考えてないからね。」

「……もうくつつけばいいのでは？」

「・・・まあ、気長に見守っておくしかないわね。」

(そういえば、簪を贈るって昔のプロポーズだった気が。諏訪子様の時々眺めている玉簪って・・・。)

5 「博麗の巫女」

さて。

今僕達は紫による細々とした説明を聞いている。

基本的には幻想郷のルールに関してだ。

博麗の巫女が創ったスペルカードルールって言う決闘の方式があるみたいだ。

どうやら人が妖怪に対等に勝負するためのルールだとか。

まあ、僕が使う事はないと思う。

後は博麗の巫女に関してだ。

博麗の巫女はこの幻想郷を維持している博麗大結界を維持し、妖怪と人間の間に立つ中立の抑止力。

要するに現代の警察と軍を合わせた様なものだ。

紫曰く今代の巫女はスペルカードルールでは最強らしい。

すると紫が僕に話しかけてきた。

「クロ、頼みたいことがあるの。」

「話の流れからして博麗の巫女に関して？」

「ええ。クロには霊夢の師匠になって欲しいの。」

「霊夢？」

「今代の博麗の巫女の名前よ。霊夢は確かにスペルカードルールのの中では強いわ。霊術にも体術にも才能がある。でも、」

「——でも、殺し合いではわからないってところかな？」

「・・・ええ、その通りよ。」

うん。

それは深刻だ。

外敵やルールを守らない大妖怪が現れた場合、その霊夢とか言う巫女は高確率で死

ぬ。

それはいけない。

スペルカードは飽くまでも決闘の一種。

お遊びの様なものだ。

そのルールの範疇で最強ということは、ゲームのチャンプみたいなもんだ。

格ゲーのチャンプが本物の格闘家と試合をしたら、格闘家が勝つ。

博麗の巫女はそんな存在だ。

うん。

丁度良い。

拾った式射命丸文候補も鍛えようと思っていたし、組手の相手にもってこいだ。

しかも、その博麗の巫女に興味が湧いた。

「紫、その話引き受けるよ。」

「ありがとう。」

「あ、紫。幻想郷って式を作るのって大丈夫？」

「?・・・ええ。大丈夫だけれど?」

「なら訓練も楽に出来そうだ。」

そうして僕の今後の予定が決まった。

よし、早速行こう!



此処が博麗神社かあ。

思ったよりも大きい。

ん?

縁側でお茶を飲んでるのが博麗の巫女かな?

話しかけてみよう。

「やあ。こんにちは。君が博麗の巫女？」

「ええ、そうよ。あんたは？」

「僕は出雲 黒。柏手様とも呼ばれている。今日ここに引っ越して来たしがない神様モドキさ。」

「今日？紫の関係者かしら？」

「うん。そうだよ。紫に頼まれて君の師匠になりに来た。」

「はあ？どういうこと？」

「紫、説明。」

「はいはいー。呼ばれて飛び出てゆかりんよ。」（ウウインク）

「きゅっつ。」(黒と霊夢)

「ひどいー!」

紫、ちよつとその歳でそのノリは・・・。

僕は少し霊夢にシンパシーを感じた。

その後、紫による霊夢への説明が終わった。

どうやら鍛えることに関しては同意が得られたようだ。

あ、射命丸文を飲み込んだままだった。

「紫、ちよつとここに妖怪出してもいい?」

「妖怪を出すつてどういうことかしら?」

「ああ。さつき天狗達の所でいい拾い物をしたんだ。二回叩きのめしても折れなかったから、天魔に許可取って式にしようかと。」

「……そう。(それってクロが食べちゃった天狗よね?) まあ、いいわ。」

「うん。よいしょっと。」

紫の許可が取れたので飲み込んでいた射命丸文を外に出す。

うーん。

今見ると結構ぼろぼろだな。

まあ、それは後でいいや。

式にするための術を組んで、射命丸文の額に貼る。

うん?

式としての名前が必要なんだっけ?

……『鳥』^{カラス}でいいや。

その方が反骨心を煽れそう。

よし。

式の出来上がり。

起こすか。

「『鳥』、起きろ。」

「はひい！・・・え？ここは博麗神社？」

「そうだよ。射命丸文。君は今から僕の式ね。」

「はい？」

「ん？丁度、暇潰しが欲しかったんだ。よろしく、『鳥』。」

「・・・。色々突っ込みたいところがあるんですけど、一つ聞きます。『鳥』って私の名前ですか?！」

「うん。何か不満が？」

「大ありですよ！『鳥』って何ですか『鳥』って!!私は射命丸文って言う名前が有るんで

す！しかも叩きのめされて起きたら式とか意味が分かりません!？」

何か紫と霊夢が絶句している気がするが無視。

『烏』もいい感じに反骨心が出てる。

でも少し黙らせよう。

「『烏』、いいと言うまで口を閉じてろ。」

「?!」

「クロ、ソレって?」

「『烏』?」

「!!」

「・・・。まあ、いいわ。」

よし。

まあどうにか成りそうだな。

紫と霊夢は何か話し込んでいるし、今のうちに『烏』と霊夢の訓練の内容でも考えるか。

side 紫と霊夢（小声）

「ねえ、紫。コイツヤバい奴じゃない？」

「いい、霊夢。クロはちよつと頭のネジが吹っ飛んでるけど、これでも定義的には人類の守護者なのよ?!」

「はあ？コイツが守護者？」

「ええ。しかも幻想郷位なら片手間で滅ぼせる程の強さを持つてるわ。」

「・・・それもつと駄目なやつじゃない！大丈夫なの?!」

「ええ。基本的にクロは優しいわ。寛大とも言おう。逆鱗にさえ触れなければ多少のこ
とじゃ怒らないし、超が付くほどのお人好しよ。」

「・・・逆鱗って？」

「クロの大切な神が居るのよ。この幻想郷に。洩矢諏訪子という守矢神社に祀られている祟り神。クロは良く言えば一部を除いて平等よ。．．．でもね、悪く言えば洩矢諏訪子とクロが気に入ったもの以外はいつでもいいのよ。だから悪人だろうと善人だろうと関係なしに助けるし気紛れに殺す。それが私の師匠。神であり、妖怪であり、人間。絶対に敵対しては駄目なの。」

「．．．何でそんな奴を私の師匠にしようとしたの?!)」

「(クロは興味を持った相手しか弟子にしないわ。要するに霊夢はクロに興味を持たれたのよ。クロは弟子のことを無碍にはしないわ。貴方は幻想郷の抑止力。クロを少し抑えられる様になり、強くなれる。一石二鳥じゃないかしら?)」

「．．．。紫、要するにあんたは私に面倒ごとを押し付けただけじゃない!!)」

「(てへっ。)」

「(てへっ。じゃないわよっ!どうしてくれんのよ!あんたあいつの弟子なんでしょ。あんたがどうにかしなさいよ!)」

「(．．．霊夢。貴方には才能がある。頼んだわよ!)」

「(真面目ぶって逃げんな、紫い!!)」

「(あ、あと黒はスパルタよ。)」

「(おい。)」



うん。

話し合いが終わったみたいだ。

「霊夢、改めてよろしく。黒でも柏手でも師匠でも好きな様に呼んでくれ。」

「え、ええ。これからよろしく、師匠。」

「くー!!」

煩い『烏』を無視して霊夢と握手をする。

こうして僕に霊夢という弟子が出来た。

取り敢えず。

「霊夢、『鳥』。外に行こう。修行の時間だ」

「えっ、今からやるの？」

「ー?! (私もですか?!)」

「うん。あ、『鳥』はもう喋っていいよ。」

「・・・拒否権って有ります？」

「ん？^{玩具}式に拒否権なんて無いよ？」

「今、玩具って言いましたよね?! うわあん！」

「・・・ブン屋、一緒に頑張りましょう。」

「霊夢さんが優しい！ 霊夢さん、頑張りましょう！」

「よし、二人共殺す気で掛かってこい。先ずはどれぐらいが動けるかの確認だ。」

「言われなくとも！」

「行くわよ、師匠！」

6 「紅い霧」

諏訪子の息遣いを感じながら目を開ける。

諏訪子は腕の中ですやすやと寝ている。

最近結構な頻度で吸血されているので諏訪子は基本的に元の美女状態だ。

まあ、起きたら首筋が痛いのは未だになれないけども。

昨日は霊夢と『烏』を鍛えて、その後諏訪子と酒盛りをした。

あ。

ヤバい。

諏訪子が酒を沢山飲んだ次の日は不味い。

力加減が無くなるし、タガが外れる。

僕も学習しないなあ。(諦め)

「んう……黒お。」

諏訪子が僕の背中に両手を回して強く抱きしめる。

骨がミシリと軋む。

そう、諏訪子は地味に力が強いのだ。

要するに、鯖折を掛けられているような状態だ。

まあ、痛いには痛みが耐えられない程じゃ無い。

こうなつた諏訪子は僕の血を吸うか、自然に目が覚めるまでこのままだ。

それまで諏訪子の寝顔でも見てよう。

・
・
・

暫くして諏訪子が目を覚ました。

基本的に諏訪子の住処家では僕が軽い朝食（基本的に味噌汁等の汁物）を作る。

守矢神社で寝ている時は早苗や神奈子と朝食を食べるのだが、諏訪子の住処此で起きるのは昼近くになるので早苗達とは別に朝食を食べることが多い。

正直に言えば僕がご飯を食べなくとも大丈夫だし、諏訪子は僕の血を吸えば大丈夫だ。

ご飯は食べる方がいろんな意味で満足感が出るので出来るだけ食べている。

永い時間では娯楽は多い方がいいしね。

味噌汁が出来たので諏訪子を呼ぶ。

「諏訪子、運ぶの手伝ってくれ。」

「はい。」

居間にある小さな食卓に二人で座る。

「いただきます。」

味噌汁を食べきり、諏訪子が言う。

「美味しかったよ黒。ごちそうさま。」

「うん。お粗末様。」

週に2日程度の何時もの会話。

こうして僕の一日が始まる。



守矢神社で諏訪子と別れ、霊夢と『鳥』がいる博麗神社に向かう。

最近は昼前に博麗神社で修行をつけ、霊夢と『鳥』に昼飯を作り、夕方迄修行、守矢神社に帰る。

そんな一日を送っている。

霊夢と『鳥』に修行をつけ始めてから3ヶ月程が経ち、霊夢と『鳥』は随分成長した。霊夢は僕の1割と互角に、『鳥』は僕由来の能力を使えば3割と互角つてところだ。

二人には成長したので祝いとして武器等を贈った。

霊夢には翡翠に贈った札と同等のものと「空喰い」の術理を刻んだ勾玉を贈った。

勾玉無しで「空喰い」を使える様になるのを期待している。

『鳥』には山伏の衣装を参考にした戦闘服と持っていた刀の強化、そして1日の自由を与えた。

式として縛ってばかりでは伸びるものも伸びないからね。

そしたら『鳥』は射命丸文として山に行ったらしいのだが、死亡扱いだったり自宅に

お供え物があつたり墓が建てられていたりひと騒動あつたらしい。

知らんが。

諏訪子に言われてちよつと可哀想に思ったので『烏』には修行と僕の式として働いている間以外は射命丸文として自由にして良いことにした。

・・・だけど諏訪子に泣きつくのは止めてくれ。

まあ、僕の式として働くことなんて面倒臭くなつた時のお使い位しかないが。

そんな事を考えながら博麗神社に向かう。

ん？

向こうの方から紅い霧が漂つてきている。

少しの毒性がある？

ただの一般人には危険だ。

「どういうことだ？・・・ああ、紫が言っていた異変つてやつか。じゃあ、状況把握のため博麗神社に急がなきゃ。」

ゆつくり歩くのを止め、柏手を打つ。

——最近僕も成長したので別に柏手は打たなくてもいいんだが神としての能力で

打つ方が精度や効率がいいのでこの方式を採用している。(そっちの方が格好良いと諏訪子に言われたのもある)

目の前の空間を曖昧にして博麗神社に繋げる。

向こうに話している紫と霊夢を見つけたので話しかける。

「霊夢、紫。これは？」

「異変よ、師匠。」

「多分これは湖の吸血鬼共の仕業ね。異変解決に行ってくれるかしら霊夢？」

「・・・はあ。面倒臭いけど行くわよ。さっさと解決して報酬を貰って寝るっ!!」

※異変等の用事がある場合黒の修行は1日免除

すると、霧を突つ切つて箒にのつた金髪の少女が現れた。

彼女の名は霧雨魔理沙。

最近知り合った霊夢の友達だ。

人そのまま魔法を使う稀有な存在、人間の可能性を感じるね。時々博麗神社に訪れるので稽古をつけてあげていたりする。彼女が影で結構な努力をしているのを僕は知っている。

つい翡翠を思い出して甘やかしてしまう。

そして彼女も霊夢と同じ様に異変解決者だ。

「よつ。霊夢、紫、黒。異変解決に行くのか?」

「ええそうよ。魔理沙も?」

「おう。ジメジメしてて呑気に実験も出来やしないぜ。」

「じゃ、行きましょ。」

「おう。黒、紫、行ってくるぜ!」

そう言って霊夢と魔理沙は紅い霧の発生源に向けて飛び立った。

すると紫が心配そうに話しかけてくる。

「クロ、少し頼みたいことがあるの。」

「・・・何か不味い未来でも見た？」

「ええ。」

「それはどんな？」

紫は僕との修行の結果、”認識出来るものと出来ないもの”の”境界”を操ることで少しだけあり得る未来を垣間見ることが出来るだ。

紫は頑張って少ししか見れない・・・すべてを見通す母さんがどれぐらい強かったか理解出来ない。

紫はゆっくりと言葉を紡いだ。

「異変の犯人も含めて全員が死ぬ未来よ。」

「……。犯人は？」

「少し見えたのは金髪の吸血鬼。」

「なるほど。霊夢達には手に負えないであろうソレをどうにかして欲しいところ？」

「ええ。お願いできるかしら。」

「うん。いいよ。若人の未来を守るのも神僕としての役割だしね。」

「クロ、ありがとう。」

僕は紫の話を聞き、異変の発生源に向かうことにした。

——僕の勤が「放置すれば人が沢山死ぬ、諏訪子にも被害が行く可能性がある」という。

急がなきゃ。

霊夢達にも援護が必要だな。

僕の知ってる中で一番速い彼女を呼ぼう。

『『鳥』、来い。』

「はい、ただいま。で、主様何の用ですか？」

「うん。今回は真面目なお仕事だ。異変解決に向かった霊夢と魔理沙を助けてきてくれ。」

「承知しました！ いつてきます！」

彼女は飛び立って行った。

『『鳥』はここ3ヶ月で僕のことを認めたようで、主様と呼び従ってくれている。自由意志は縛って無いので少し嬉しかったりする。

これがペットを飼う人の気持ちかぁ・・・。

よし、僕も向かおう。

柏手を打つ。

「紫、行ってくるよ。」

「ええ。霊夢達を頼んだわ。」

「うん。任せて。」

空間を跳躍し、発生源に向う。

——それにしても金色の吸血鬼ねえ。
どんな相手なのだろう。

7 「紅い館での再会」

目的地に着いた。

此処が異変の発生源か。

・・・

紅いな。

ひたすらに紅い。

さしずめ紅い館ってところかな。

『烏』はさつき館に入って行ったから霊夢達は大丈夫だろう。

僕は金色の吸血鬼を探さなきゃな。

中で聞こう。

館に近づく。

門番が居るようだ。

・・・

紅い洋館の門番ってチャイナドレスを着てるんだ、知らなかったよ。そんな下らないことは置いておいて、門番からは武人の気配がする。

少し神力を出す。
門番が反応した。

「貴方は？」

「うん？ああ。この館に用があるんだけど、通してくれるかな？」

「無理ですね。私は紅美鈴！この紅魔館の門番！そう安安と許可なく門を通過させるわけには行きませんっ!!」

紅美鈴が拳を構える。

名乗られたなら武を修める者としては名乗り返すのが礼儀だ。

僕も拳を構える。

ああ、友との旅路を思い出す。

「……。いい気迫だ。僕は出雲黒、しがない神様モドキさ。後は拳で語るのみってね！」

「はあっ!!」

紅美鈴が目の前に現れる。

この動きは、太極拳に近い。

——僕は太極拳を学んで無いから対処がわからん。

よし、友の流派を借りるか。

——アレは流派というより指針に近いけどね。

確か、『芯を捉えて往なし、芯を捉えて弾き、芯を捉えて打つ。芯を穿てば崩せぬもの無し。』だったっけ。

そう考えながら美鈴の拳の芯を弾く。

すかさず彼女は距離を取った。

うーん。

芯を捉えづらい。

達人ってやつかな。

まあ、芯が隠せないなら僕のほうが強い。

「今度は僕から行かせてもらおう!」

「つつ!!」

地面の芯をバネにして踏み込み、最高速度で美鈴の前に辿り着く。

美鈴の拳を往なし、彼女の芯を——打つ!

美鈴が崩れる。

「がはっ。」

「死なない程度に加減はしたから。うん。またやろう。」

妖怪っぽいし、骨折や内蔵破裂位は数時間で治るだろう。

でも、僕もまだまだだなあ。

——友なら初めの一撃で芯を捉えて相手の拳を砕いて無力化出来るのに。

自身の未熟を思い知りながら門を通り、館の中へ進む。

中まで行く、?!

飛んできたものを指で摘む。

「・・・ナイフ？」

「ええ、そうよ。こんにちはは、侵入者。」

「心配がしなかった。君は？」

僕は突然現れた声の方へ身体を向ける。

ん？

覚えがある銀髪にメイド服。

彼女が僕に声をかける。

「私は、え。先生?!」

「あれ？ 咲夜？」

「なんで先生が幻想郷に?!」

僕を先生と呼ぶのは数年前に拾った咲夜しか居ない。

うん。

こんなに立派になって。

少し説明することにした。

あの後日本に渡ったこと、日本で古い友人と再開し幻想郷に来たこと、言うかは迷ったが金髪の吸血鬼によつてここにいる人達が殺される未来が見えたため対処にきたこと。

咲夜は最初の方は訝しんでいたが金髪の吸血鬼の下りで一応納得してくれたみたいだ。

何かお嬢様とやらに金髪の吸血鬼——妹様と呼ばれているらしいに関して事前に言われていたらしい。

「僕の見たのは飽くまでも可能性が有るつてだけの話。最善は何も起きないこと。もし信じられないんだつたら僕を拘束してくれて構わないよ。」

「いいえ。お嬢様から黒髪の男は妹様のいい刺激になるだろうから通せと言付けられて

おります。」

「咲夜、別に敬語じゃなくてもいいよ。咲夜に敬語を使われるのは少しむず痒いんだ。」

「……。わかったわ先生。妹様のところまで案内するわ。」

そうして歩くと数分。

図書館のような所を通り、地下室に着いた。

道すがら咲夜から聞いた話によると妹様とやらは強い力で狂っているとされて50年近く幽閉されているらしい。

気に入らないなあ。

扉を咲夜が開ける。

「……先生。どうかお気をつけて。」

「うん。これが終わったら咲夜の主人を紹介してくれよ。」

「ええ。きつと先生もお嬢様を気に入ると思います。では。」

後ろで扉が閉まる。

前には大きなベッドとそこに腰掛ける金髪の少女。

普通の少女のように見える。

「貴方はだあれ？」

「やあ。僕は出雲黒。君は？」

「私はフランドール・スカーレット。黒、遊びましょ？」

「うん。何して遊ぼうか。」

「うーん。トランプ！」

フランドールはトランプを取り出した。

そうして僕はこの中に狂気を飼って居る少女と遊ぶことにした。

ポーカ―をしたり大富豪をしたり、チェスをしたり。

本を読んだり、旅のことを話したりもした。

それが終わる頃にはフランドールと仲良くなり、フラン（フランドールの愛称）の事もわかつてきた。

姉がいること、何でも壊せること、その能力が制御が出来ないこと。

——フランの中にある狂気は何とかしてあげたいなあ。

「黒、次はオセロやろう！」

「うん、そうしよう。」

その後はオセロをして、僕が将棋を出して教えたり、フランのお姉さんの話を聞いた
りした。

不味いなこれは。

どうにかしないと無いと危うい。

フランの精神力のお陰で今は保っているが何時爆発してもおかしくない。

理屈はここまで。

正直、フランのことを気に入った。

気に入ったから助けて、世界を見せてあげたい。

こういうのを自己満足っていうんだらうけど。

僕は人類の守護者だけど、目の前の少女を吸血鬼だからと見捨てる気にはならない。

あー。

フランの中の狂気が膨らんでる。

これは、外からの干渉?!

「う、うあああつ!!」

「フランー!」

「く、ろ。逃げて。くろを壊したく、ないっ!」

「っ!フラン!僕がその狂気をどうにかしてやる!ちょっと待ってる!!」

「ぐううああアアア!!!」

フランの周りのものが崩れて、壊れていく。

フランの体から炎が迸る。

これは不味い。

この破壊、防御方法が殆どないぞ。

——なるほど、存在の芯を壊してるのか。

僕は存在自体が曖昧だから簡単に壊せないってところかな。

うん。

フランの狂気が表に出てくる。

「アハハハは！黒、遊びましょ!!」

フランは僕に向かって炎を放った。

こうして僕とフランの狂気との戦いが始まった。

8 「金の狂気と黒の正義」

「アハハハは!!」「レーヴァテイン」!!」

フランが棒状の炎の剣? (名称的に) を振りかぶる。

剣士等で考えるとすぎだらけだが、周囲は燃え盛り焦熱地獄のよう。結界術で防御するも、勢いを殺し切れず後方に吹っ飛ぶ。

「いてて。【応急手当】。」

【応急手当】は傷を曖昧にして一時的に無かったことにする術。

これで少しは持つだろう。

フランが原型を留めていない部屋から出てくる。

「アハはっ!! 黒って頑丈だね!! どうしたら壊れるの?」

「うん？フランオマの狂エ気が晴れたら。」

「うんうん。じゃあ無理だね!!ワタシ狂は黒を壊して私フランが壊れるまで止まらないっ!!【カゴメカゴメ】!!」

フランが無数の魔力弾を展開する。

もしかして狂気自体に人格があるのか？

狭いところじゃ避けられないっ！

僕は地下から飛び出る。

フランは無数の魔力弾を連れて追ってくる。

「つう・・・【二拍全祓】っ!!」

「スゴイスゴイ!!【カゴメカゴメ】を全部かき消すなんて!!じゃあ、これはどう?!【スターボウブレイク】!!」

【二拍全祓】で【カゴメカゴメ】をかき消したのに次は速い直線攻撃かよつ。
えつと、防衛！

【風壁】!!からの【風縛陣】!!」

「アハハハは!!キュツとしてドカーン!!」

「はい?!」

無傷で拘束しようとしたら術が自壊した?!

ああ、フランの能力か!

うん?

したの方の本棚から悲鳴が?

「こあ、レミリアにこのことを伝えて来なさいっ!!」

「はい、パチュリー様!」

「魔理沙、今は一旦休戦よ!!」

「おう、本棚を守るぜ!!」

・・・何かすまん。

「ねえ、黒。死んで!」【フォーオブアカインド】!!」

「三三【レーヴァテイン】!!!!」
「三三」

フランが四人に増え、それぞれが僕に向かってくる。

・・・。

飛んで躲していく。

それぞれのフランが魔法を使ったりしてくるため大変戦いづらい。

本棚をあの二人が守っていると書いても限度がある。

外に行くしかない。

そう思い、フラン達が追ってこられる最高速度で所々穴の空いている天井を突っ切る。

「フランっ！僕を捕まえてみる！」

「「「あはっ。まてまてえっ!!」」」

攻撃は単純だが威力と量が桁違いだ！

僕は戦闘に向いてないんだよ!!

——でも外に出れば誰も巻き込まない！

「【空綴じ】!!」

周辺に被害が出ないように空間を綴る！

「なにこれ?! まあいいや! 【カゴメカゴメ】!」

「結界だ! 壊そう! 【レーヴァテイン】!」

「不思議な結界!! 面白いね! 【スターボウブレイク】!」

「あはっ黒、死んで! 【ブラッディカタストロフ】!」

「だああ!!【二拍全祓】!!」

「むう、また消された!!なら近くで!!【レーヴァテイン】!!私!援護して!」

「【りようかい!】【カゴメカゴメ】!!【二】

フランの一人が【レーヴァテイン】を構えて突っ込んでくる。

うーん。

炎の剣には、水と言いたいけど僕はそんなの使えないし。

自身の力を均等に変換、妖力と霊力という相反するちからを神力で刀のカタチに織り上げる!

これなら【レーヴァテイン】だろうとたたっ切れる!

「【アメノムラクモ】ツツ!!だあああ!!」

「わっ!【レーヴァテイン】が!!」

「【ブラッディカタストロフ】!!【二】

飛んでくる魔力弾、魔法を一切合切叩き落とす。
するとフランがブレて一人に戻った。

「こうなったら、『レーヴアテイン×2』!! やああ!!」

どうしたらフランの狂気を無くせるかを考えながらフランと打ち合う。

くそつたれ! 解決策は何か無いのか?!

——ふと、母さんの言葉を思い出した。

——「いいですか? 貴方は何時か壁にぶつかるでしょう。そのときは、諦めてはいけません。願ってはいけません。下がってはいけません。ただひたすらに貴方の正しいと思う道、正義を貫きなさい!」

ああ、そうか。

取り敢えず、全力を出し切る!

「フランっ今助ける!!」

「アハハハは!! 黒に私は救えない!! ワタシは黒を殺す!! アハハハは!! 【カゴメカゴメ】!!」

「出来るできないじゃない!! 助けが必要な女の子を助けられなくて!! 何が神様だ!! 【吠え立てよ我が正義】!!!」

【吠え立てよ我が正義】で身体能力を極限まで引き上げる。

フランの【カゴメカゴメ】を躲し、切り、相殺しながら駆け抜ける。

——1つ思いついた。

僕はフランのためにフランの狂気を少しばかり残して喰らう。

そうすればフランの感情は失われず、少しの狂気ならフランの糧となるだろうから。そのためには狂気を引き出すためにフランに触れる必要がある。

【スターボウブレイク】!! 【ブラッディカタストロフ】!!」

【二拍全祓】っ! あと少し!!」

「アハハハは!! 「レーヴァテイン」!!」

「【アメノムラクモ】 オ!!」

フランと打ち合う。

今だ!

【アメノムラクモ】で【レーヴァテイン】を強引に叩き切り、存在を曖昧にした左腕でフランの中の狂気を引っ張り出す。

【空喰い】で無理矢理僕の中に狂気を押し込む。

中でフランの狂気が暴れているのがわかる。

——アアアアアアツツ!!

煩い!

——ムウ・・・。

フランは狂気が消え、気を失った。

重力に従って落ちていくフランを抱き止める。

「これにて一件落着いてか。あー疲れた。帰って諏訪子と酒盛りしたい・・・。」

9 「解決と宴」

その後、館に降り立つと青っぽい髪のフラン（姉だった）と霊夢と魔理沙に問い詰められ、全てをゲロった。

フランと仲良くなったこと、フランの狂気が暴走したこと、それを僕がどうにかしたこと。

そうしたらフランの姉、レミリアに涙を流しながら感謝された。

何時でも来ていいってさ。

じゃあ今度咲夜とフランに会いに来るよ。

『鳥』には劳いの声をかけ、3日の休養を言い渡した。

とそんな話をしていたら異変解決の宴会をするから博麗神社に来いと霊夢に言われた。

一旦守矢神社に戻って諏訪子達を誘うか。

そう思い僕は紅魔館（レミリアから聞いた）から飛び立った。



守矢神社に着くと諏訪子が出迎えてくれた。

「お帰り、黒。」

「諏訪子、ただいま。」

地面に立つと諏訪子が抱き着いてきた。

うん。

お腹減ってるのかあ。

「黒、いただきます。」

かぶつと首筋に噛み付かれる。

そういえばフランとレミリアって吸血鬼だったよなあ。

諏訪子の方が吸血鬼っぽいのはこれいかに？

そんな事を考えながら諏訪子を抱えて神社の中に向って歩き出す。

諏訪子は来るだろうし、神奈子と早苗も宴に誘おう。

「神奈子、早苗。博麗神社で異変解決の宴をするらしいから顔見せも兼ねて行こう！」

「それはいいですね！噂に聞く博麗の巫女さんにも会ってみたいです！」

「たまには外で酒を飲むのも良いかもねえ。」

「諏訪子も行くでしょ？」

「んん（うん）。」（噛み付いたまま）

そうして皆で博麗神社に向けて飛び立った。

あ、何か持って行った方がいいかなあ。

・
・
・

まあ、僕の背囊に入っている酒でいいかな。



「やあ、霊夢。来たよ。」

「師匠、いらっしやい。宴会はもう始まってるわよ。」

霊夢に言われて神社の境内を見渡すと人や妖怪が思い思いに酒を飲んだり料理を食べたりしている。

早苗は神奈子についていったみたいだ。

あれ？

早苗って二十歳未満だよな？と思ったが霊夢も飲んだくれてるので大丈夫・・・なのか？

「師匠も飲みましょ！」

「黒、飲もう！」

霊夢と諏訪子が酒をすすめてくる。

「うん、そうしよう。．．．あ、霊夢。これはお土産ね。」

「お酒？」

「うん。千年位前の酒。飲めるかは知らないけど。」

「黒、注いで！」

「はいはい。」

「師匠、私にも！」

諏訪子と霊夢に酒を注ぐ。

あれ？

僕が酒をすすめられてたはずなのに何故に僕が酒を注いでるんだろうか。

ん？

向こうで神奈子が天狗達と酒を飲んでるみたいだ。

早苗は・・・潰れて寝てるな。

やっぱり酒弱かったんだ。

そうやって諏訪子を膝に乗せて霊夢と酒を飲んでると向こうから吸血鬼姉妹がやって来た。

「黒、いい夜ね。」

「先生、こんばんは。」

「黒、こんばんは！」

「レミリア、咲夜、フラン。こんばんは。」

レミリア達と挨拶を交わす。

異変の黒幕たる彼女達がこの宴に居るのは、この宴が彼女達との仲直りや顔見せのよ
うな役割を持つからだ。

まあ、数代前の博麗の巫女が創った風習のようなものらしい。

共に酒を飲んで騒げば仲直り！って言うのが口癖だったらしい。

へへエ、オモシロイニンゲンモイルンダ。く

・・・。

未だにフランの狂気は消化出来てない。

僕の中で喋るだけで実害はない。

まあ、無害ならいいかと放置している。

フランは狂気が取れ、僕との戦闘もあり能力を制御出来るようになったそうだ。

フランは外に出れるのが嬉しいのかはしゃいでるみたいだ。

「フランったらはしゃいじゃって・・・。」

「お嬢様、妹様がご心配なら追いかけたらどうですか？」

「そうね。咲夜、行くわよ。ついていらっしやい。」

「はい、お嬢様。先生、では。」

「うん。また今度。」

そう言つてレミリアと咲夜はフランを追いかけていった。

咲夜は立派にメイドをしているみたいでほつとする。

霊夢はいつの間にか魔理沙のところに行つたみたいだな。

その後、諏訪子と博麗神社の屋根の上に座り月見酒をした。

ん？

視線と気配を感じる。

紫か。

背囊からもう一つ徳利を取り出しながら紫を呼ぶ。

「紫、スキマから出てきたら？」

「あら。バレてしまいましたわ。」

「酒、飲む？」

「ええ、頂くわ。」

スキマから出てきた紫に徳利を渡し、酒を注ぐ。

諏訪子はいつの間にか僕に寄り掛かって寝ている。

「黒、今回はありがとう。お陰で霊夢達が死ななくてすんだわ。」

「んー。別に今回は僕が勝手にフランを助けようとしただけだよ。」

「・・・そう。それでも感謝してるわ。私だって貴方に助けられたクチだしね。」

「そういえばそうだったね。」

「ええ。懐かしいわ。あの日々は今でも直ぐに思い出せる。」

「そうだ。紫、君がどうやって幻想郷を創ったかを聞いてみたかったんだ。」

「ええ、私もクロがどんな旅をしたのか気になるわ。久し振りにゆっくり話しましょう。夜は未だこれからですから。」

そうして僕は紫に旅のことを話し、紫は幻想郷を創る迄の物語を僕に話す。
へえ。

そんなことがあったんだと感心したり、時には大変だったんだと労ったり。

——こうして異変の後の夜は更けていく。

主な登場人物紹介（第三章）

名前：出雲 黒（イズモ クロ）

種族：神様モドキ（何者でもないバケモノ）

容姿：黒髪、水色の瞳、長身の美青年（紅が肉体のベースなため中性的）

能力：「ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力」「柏手を打つことでありとあらゆるものを祓う程度の能力」

概要：我らが主人公。射命丸文あらため『烏』を式にした。咲夜と再会を果たす。フレンドールに誰かの影が重なって見えた。フレンドールを助けるためにフランの狂気を喰らう。喰らったフランの狂気は黒の中に居座っている。

名前：洩矢 諏訪子（モリヤ スワコ）

種族：土着神

容姿：金髪ロング、水色と金色のオッドアイ、やや長身の美女♀美少女

能力：「坤を創造する程度の能力」

概要：我らがヒロイン。次の章ではもっと出番が増える予定。吸血鬼よりも（黒にの

み）吸血鬼してる。浮気は許さない。黒への愛は……。

名前：フランドール・スカレット

種族：吸血鬼

容姿：金髪サイドテール、紅い瞳、美少（幼）女

能力：【ありとあらゆるものを破壊する程度の能力】

概要：今章のお姫様。中に巨大な狂気を飼っていた。魔法も使えて能力も強力。黒を苦戦させた。黒により狂気は取り除かれ能力の制御が出来るようになった。

名前：『鳥』（射命丸 文（シヤメイマル アヤ）

種族：神使（烏天狗）

容姿：セミロングの黒髪、赤い瞳、美女

能力：【風を操る程度の能力】【速度を誤魔化す程度の能力】（黒の神使としての能力）

概要：黒に叩きのめされて黒に気に入られ、黒の式（種族的に神使）に大出世。なお日々の修行は地獄。黒のことを主と認める。（黒からは家臣というかペット扱い）

名前：博麗 霊夢（ハクレイ レイム）

種族：人間（巫女）

容姿：黒髪ロング、黒い瞳、美少女

能力：【空を飛ぶ程度の能力】【靈氣を操る程度の能力】（巫女としての能力）

概要：楽園の素敵な巫女。黒の弟子。『烏』とともに日々黒の修行に励んでいる（靈夢への修行は『烏』程地獄ではない）。レミリアを『烏』と共に倒す。

名前：八雲 紫（ヤクモ ユカリ）

種族：スキマ妖怪

容姿：金髪ロング、紫水晶の様な瞳、長身の美少女（自称）

能力：【境界を操る程度の能力】

概要：我らがゆかりん。黒の一番弟子。靈夢のことは個人として娘の様に思っている。幻想郷の管理者として個人の感情とは別に様々な事をしている模様。

名前：十六夜 咲夜（イザヨイ サクヤ）

種族：人間

容姿：ポブカットの銀髪、黒い瞳、背が高めの美少女

能力：【時を操る程度の能力】

概要：黒が殺人事件の現場で保護した少女。今は紅魔館のメイド。黒のことを先生と呼ぶ。黒は咲夜に様々な事を教えた模様。その正体は……。

名前：レミリア・スカーレット

種族：吸血鬼

容姿：青紫の髪、紅い瞳、美少（幼）女。

能力：【運命を操る程度の能力】

概要：未だカリスマブレイクされてないお嬢様。出番がない。霊夢と『烏』の二人がかりでフルボッコにされた可哀想な吸血鬼。黒にはとても感謝している。

名前：紅 美鈴

概要：紅魔館の門番。出番がプロットよりも大幅カット。霊夢に【夢想封印】された模様。咲夜とは友人。

名前：パチュリー・ノーレッジ&小悪魔

概要：黒とフランの戦闘に巻き込まれ、やむなく魔理沙と一時休戦し本を守った。魔理沙と友情が芽生えた。

名前：霧雨 魔理沙

概要：黒に可愛がられている。パチュリーと友情が芽生え、本を貸し借りしたり実験を手伝って居るようだ。

名前：東風谷 早苗 & 八坂 神奈子

概要：守矢神社で過ごしていたら異変がいつの間にか解決していた。異変解決の宴で天狗と人間の信者をゲット。

【吠え立てよ我が肉体】

最初は【限界突破】だったのだが作者の友人により今の名称へ。性能的には身体強化（極大）＋リジエネ＋限界突破。黒の母親を追い付けない最強足らしめた究極の身体強化術。なお黒の母親はこの術を創る前の時点で最強だった模様。

『芯を捉えて往なし、芯を捉えて弾き、芯を捉えて打つ。芯を穿てば崩せぬもの無し。』
黒のかつて聖人だった友に教えてもらった武術モドキ。友が盗賊や怪物を殺さずに

無力化（拳）する為に編み出した武術モドキ。弟子たちにも教えていた模様。聖人って
武闘派（拳）だったんだね・・・。

第四章 「異変と幻想郷」

1 「束の間の平穏」

僕が作った山伏衣装を着た『鳥』と空中で向かい合う。

「『鳥』！腕を上げたみたいだね！」

「ええ！それはっもちろんですっ！」

『鳥』の放ってくる弾幕を避けながら此方も弾幕をばら撒く。

彼女は弾幕を避け、迎撃していく。

半年でここまで成長するとはね。

すると、『鳥』がスペルカードを取り出した。

「主様っ！これが私の半年の成果ですっ！」

「見せてみる！」

「行きます！風符「四影封印」!!」

すると『鳥』がぶれて4人になり、凄まじい速度で其々が連携して弾幕を張る。

これはフランの禁忌「フォーオブアカインド」に着想を得て、能力で速度を誤魔化して四人に見えているのだろう。

うん。

燃えてきた。

僕はすぐ消えるが密度の高い弾幕で弾幕を相殺しながらスペルカードを取り出す。

『鳥』、強くなったね！こっちも使わせてもらう！」

「そのスペルカードは！」

「拍符「二拍全祓」！」

このスペルカードは僕の「二拍全祓」をスペルカードルールに落とし込み、二重弾幕で効果を擬似的に再現したものだ。

それにより『烏』の弾幕が少し途切れる。

その隙間を縫って接近、密度を下げて速度を上げた弾幕を放つ。

「まだまだあ！風符「追い神風」！」

『烏』が弾幕を勢いよく後方に出し、加速する。

彼女は僕の知っている中で一番速い。

その彼女がさらに加速したら？

追いきれないっ！

「くっ。神刀「アメノムラクモ」。」

神力で創った刀のカタチをした弾幕を周りに展開する。

飛んでくる弾幕を片っ端から刀型の弾幕で斬って迎撃する。

最近、神力だけだと苦戦するようになってきたなあ。

そんな事を考えながら刀型の弾幕を引き連れて『鳥』を追いかける。彼女は速い。

当然飛行速度では追いつくことは出来ない。

ので、刀型の弾幕を足場にして踏み込む。

瞬間速度なら僕の踏み込みの方が速い。

『鳥』の真後ろに追いつく。

刀型弾幕を振りかぶり――

「速っ！え、それはちよつと――」

「――切り捨て御免。」

「きゃあー！！」

見事直撃を食らった『鳥』は吹っ飛んで行った。

どうにか勝ったようだ。

そろそろ神力だけじゃ負けるかも・・・。

霊夢の奮闘（？）により、スペルカードルールはいまや幻想郷の中では主流の決闘法となっている。

霊夢と『鳥』には戦闘技術も教えているが、最近では修行の半分がスペルカードルールによる弾幕ごっここの練習とか試合になっている。

まあ、弾幕ごっこは弾幕の威力を上げれば普通に戦闘にも転用できるのであまり悪いことではない。

・・・戦闘に転用する必要が無いといいなあ。（フラグ）



そうして霊夢とも弾幕ごっこをした。

その後僕は『鳥』と霊夢と縁側で話していた。

「はあ、疲れたわ・・・。」

「ええ。主様、あれでまだ半分以下なんですよ？」

「うっそでしょ。師匠に敵う奴っているの？」

「いや、身体能力とかは全力だから総合的には6割位だよ。」

「能力無しですよね……。結局のところまだまだって事じゃないですか。」

「そうね……。師匠を超えるのは何時になるのやら。」

「まあ、霊夢は弾幕ごっこでいえばトップクラスの腕だし『鳥』も大妖怪位は相手にできると思うよ。」

そんな事を話して今日の修行はおしまいだ。

いやあ、半年で随分成長したな。

霊夢は多分エクソシストの時に戦った中位悪魔位は瞬殺できると思うし、『鳥』に至っては高位悪魔も倒せると思う。

うん。

才能が凄い……。

成長率的に半年前の2、3倍とか意味わかんない。

僕はここまで強くなるのに数千年かかっているんだが？

能力封印の6割でもう負けそう……。

能力込みで3割位かなあ。

僕の千年の努力は天才とかの半年ってか。

まあ自分負ける気はないけどね。

その後、博麗神社に來た魔理沙の相手をしたり、紫に今状報告をして帰路に着いた。



神社の階段を登ると、掃除をしていた早苗を見つけた。

「早苗、ただいま。」

「柏手様、お帰りなさい。」

早苗に挨拶をした後、神社の中に向う。

神奈子は神社の広間で胡座をかいて寝ていた。

諏訪子はどこだろう？

——大切な片割の存在を探す。

屋根の上か。

一旦外に出て屋根の上まで跳び、音を立てないように着地する。
すると屋根の上に寝転がっていた諏訪子が僕に気付いた。

「黒、お帰り。」

「ただいま。屋根の上で何してたの？」

「ん、お昼寝だよ。そうだ！黒も一緒にお昼寝しよう。ほら。」

諏訪子が自身の隣を叩く。

それを見て僕は諏訪子の隣に腰を降ろした。

「いい天気だね。お昼寝にはピッタリだよ。でもなあー。うん。そうだ！」

「ん？どうしたの諏訪子。」

「黒！膝かして、膝！膝枕！」

「はいはい。おいで。」

寄つてきた諏訪子を膝の上ののせる。
すると諏訪子は此方を見上げてきた。

「ねえ、黒。」

「ん？」

「・・・大好き。」

「うん。僕もだ。」

「ねえ黒。紅の遺言と私。今は黒の中でどっちが重い？」

「今はもう諏訪子の方が大切だよ。」

「・・・そっか。それは嬉しいな。」

そんな諏訪子の頭を僕はゆっくりと優しく撫でる。

ああ、可愛いなあ。(重症)

「・・・黒。」

「あれ？頭撫でるの嫌だった？」

「もつと撫でて。」

「はいはい。わかったよ。」

僕の手を引つ張る諏訪子に思わず笑顔になる。

可愛い可愛い。(重症)

諏訪子は幸せそうだ。

天使みたいだなあ・・・あ、神様だった。

諏訪子とのこんな他愛のない日常に幸せを感じる。

——嗚呼、幸せだ。

母さん、僕は今とてもとても幸せです。

side 目撃者：早苗&神奈子+a

「.....」

「どうしたんだい？早苗。」

「.....まるで砂糖を食べてるみたいです。」

「……早苗、慣れたほうがいいわよ。柏手と諏訪子は昔もあんな感じだったから。」
「あれで付き合つてないんですか？」

「うーん。彼奴らは、何というかねえ……。」

「もつと悍ましいモノ、と言いたいのかしら？」

「っ！」

「何か気持ち悪い空間からひとが！……あれ？柏手様の一番弟子様？」

「ええそうよ。守矢の巫女。」

「妖怪の賢者か。何故わかった？」

「私が師匠に感じていた違和感ね……。」

「違和感？悍ましいモノ？何でですか？」

「……柏手は諏訪子。諏訪子は柏手。互いに互いを求める。」

「ええ。何故ならそれがあたり前だから。どうして師匠がそう成つたのかは知らないわ。でもね、師匠はそれ以前にあの神を大切にしているわ。貴方も解っているのではないわ。く……。」

「ああ。そうだ。確かに悍ましいモノノロイの類だが諏訪子が柏手を大切に、いや愛してるのは確かだ。」

「……それなんでくっつかないんですか?!」

「さあ？」



—— 黒を感じる。

—— とてもとても幸せだ。

—— 離れたくない。

—— 放したくない。

—— 周りのものはいらない。

—— だけどそれは叶えられない。

—— 黒が悲しむから。

—— 黒と私は繋がっている。

—— それで我慢しよう。

—— せめて、今はこのままで・・・。

2 「明けない冬」

うーん。

去年の夏に起きた紅魔館の異変、紅霧異変が解決してから7ヶ月が経った。

冬の間は霊夢達には冬休みということで修行はつけていない。

ちよつとおかしいな。

今は4月なはず。

——要するに曆的に今は春だ。

そして僕は諏訪子と並んでしんしんと降っている季節外れの雪を見上げている。

「・・・明けないね、冬。」

「うん。おかしいな。」

「異変かなあー。」

「多分ね。このままだと人里にも被害が出そうだし、異変解決に行くかなあ。」

「あーうー。久し振りに運動したいから私も異変解決に行こうかな。冬が明けないと黒と花見出来ないし。」

「じゃあ、取り敢えず情報を集めに行こう。」

「異変といえば博麗神社だね！・・・へくつち！」

「諏訪子?! ほら、ちょっとおいで。」

そうやって僕は諏訪子の首元に取り出したストールを巻いてあげる。

そうした後、僕達は博麗神社に向けて飛び立った。

side 異変解決者達

「おい！ 霊夢！ この冬は異変だ！ なんで解決に向かわないんだよ！」

「……。そうね、そろそろ行かなきゃ師匠にどやされるわね。魔理沙、いきましよう。」

「おい、霊夢。言つてたら来たぞ。」

「誰が？」

「お前の師匠だよ。」

「師匠が?!」

「……しかもヤバそうな女連れてる。」

「……師匠、一体ナニ連れて来たのよ。」



博麗神社に着いた。

神社には霊夢の他に魔理沙も居て今から異変解決に向かうところだったらしい。

すると霊夢が諏訪子について聞いてくる。

「師匠、隣のヤバそうな奴はだれ？」

「ああ。守矢神社の祀神の諏訪子だよ。今回の異変解決の助っ人に来てくれたんだ。」

「やあ、博麗の巫女と人間の魔法使い。黒から紹介された通り、私は洩矢 諏訪子。守矢神社の神だよ。よろしくね！」

「ああ、私は霧雨 魔理沙。よろしく頼むぜ！」

「ええ、よろしく。(コイツが師匠の逆鱗ね・・・)」

そうして自己紹介が終わったところで霊夢達と情報交換をする。

僕は霊夢達に紫が頼れないことを教えた。

紫は冬の間は冬眠している。

紫の式の藍とは面識がないし、連絡方法もない。

一応『鳥』に紫への伝言を託しておいた。

藍に伝われば紫を叩き起こしてくれるだろう。

異変に関する情報はあまり無かったので手分けして調べる事にした。

霊夢と魔理沙は紅魔館や人里等を僕と諏訪子は天狗等の妖怪達を中心に聞き込みをすることになった。

さて、行くかな。

「じゃあ、霊夢と魔理沙はまた後で。諏訪子、行こう！」

「うん！」

僕と諏訪子は先ずは天狗達に聞くために山の方へ進路をとった。

side：霊夢と魔理沙

「よし、霊夢行こうぜ！」

「ええ。先ずは紅魔館の連中からかしら？」

「おう！パチュリーなら何か知ってるかもしれないねえ。」

「師匠も行ったようだし急ぎましょう。」

「おう！……でも黒ってなんで守矢神社の奴らと知り合いなんだ？」（飛行中）

「師匠は守矢神社に祀られている神の一本よ。」

「え？黒って人間じゃ無かったのか?！」

「そうよ。確か、柏手様とか呼ばれてたわね。」

「な?!柏手様だって!!」

「・・・どうしたのよいきなり。」

「知らないのか霊夢!柏手様って言えば超有名な神様だぜ?!妖怪や人間問わずありとあらゆるものを気紛れに助けるって言われている神様だ!パチュリーと調べた感じだと霊夢が使ってる結界術や私の使ってる魔法とかの祖らしいぜ?!」

「へー。だから私の結界術の足りない部分を的確に見抜けたのね。」

「ってことは私は魔法の祖と知り合いつてことだ!パチュリーに自慢してやろう!!行くぜ霊夢!!」

「はあ・・・。(あら?ってことは師匠は神力と霊術に加えて魔法も使えるってことかしら。・・・師匠強過ぎじゃないかしら?)」



「天魔、何か知らない？」

「うむ。知らんな。だが、春告妖精なら何か知っておるかもしれん。（いきなり何事かと思つた・・・。心臓に悪い輩だ。）」

「なるほど、参考になつたよ。お礼は今度『鳥』に届けさせるよ。」

天魔の助言を聞いた僕達は春告妖精を探すことにした。

諏訪子によると春告妖精はその名の通り春を告げる妖精らしい。

基本的には春が来る季節になると幻想郷をぐるりと周るように飛んでいるらしい。

僕と諏訪子は幻想郷をぐるりと周るように飛ぶ。

暫くすると諏訪子が春告妖精を見つけたようで声をかけてきた。

「黒、あれが春告妖精だよ。」

諏訪子が右斜上を指差す。

その方向を向くと白いワンピースを着た金髪の妖精が飛んでいた。

「春ですよ〜！へ、へくしよん！・・・寒いですう。春のはずなのに・・・。」

「（・・・なあ、諏訪子。ワンピースで寒いですって滅茶苦茶残念な感じがするんだが？）
（小声）」

「（妖精は大体あんな感じだよ。妖精は概念が動いてるようなものだからバ・・・無邪気なのさ。）」

「（・・・手掛りになるのそれ？）」

「（多分？・・・あ、あと柏手様として名乗った方が話がスムーズに進むと思うよ。）」

「（分かった。）」

相談を終え、取り敢えず話し掛けてみることにした。

「おーい！春告妖精！僕は柏手、君は？」

「え?!柏手様?!(御本人?!)えっと、私はリリーホワイトです。どういった御用ですか？」

「(僕ってそんなに有名か?)・・・春の事について聞きに来たんだが、この季節外れの冬の原因を知ってる？」

「それが柏手様、コレが足りないみたいなんです・・・。」

そう言ってリリーホワイトが取り出したのは桜色をした光の玉?みたいなモノだった。

「これは?。」

「これは春に成るために必要なエネルギーみたいなモノなんです。」

「それが無くなってるってこと？」

「・・・それが、ごっそりと無くなってて。」

「盗まれたってこと？」

「そうです。何となく冥界冥界の方に強い春の気配を感じます。」

「うーん。リリーホワイト、君はこれ以上春が取られないように見回るんだ。僕達は大
本から春を取り返してくるよ。」

「柏手様、ありがとうございます!!リリーホワイト頑張ります!!」

そう言ってリリーホワイトはすっ飛んで行った。

あれ？

柏手様ってそんなビツクネームだっけ？

まあ、あとでわかるだろう。

今は霊夢達にこのことを伝えて冥界に向かわなきや。

「諏訪子、行こう！」

「うん！」

そうして僕と諏訪子は霊夢達を探しに再び移動を始めた。
今は紅魔館かな？

side：紅魔館

「パチュリー、何か分かったか？」

「魔理沙、少し待ちなさい。私が信じられないの？」

「いや、信頼してるぜ！」

「……。（照れてますねパチュリー様）」

「……。（黙りなさい、こあ）分かったわ。この異変は春のエネルギーが無くなったのが原因よ。」

「春のエネルギーって何なんだぜ？」

「季節が春になるためのエネルギーよ。少し魔法で調べてみたらその春のエネルギーが凄く少ないわ。．．．済まないけど私にはここまでしかわからないわ。」

「いや、十分だぜ！ありがとうパチュリー！」

「え、ええ。友人の助けになれたなら良かったわ。」

「．．．．（咲夜さん、いつの間にも?!）」

「．．．．（何かいい雰囲気だったから音を立てないようにきたのよ。あれは?）」

「．．．．（パチュリー様と魔理沙さんのラブコメです）」

「．．．．（．．．．そう。）」

「あら、メイド。どうしたのかしら？」

「霊夢、お嬢様から私も異変解決に行つてこいと。お嬢様は寒いのが苦手なの。」

「なるほどね。いけ好かないけど助かるわ。」

「あら、先生が来たみたいよ。」

「師匠が？」

「．．．．霊夢。先生の連れてるヤバそうなの？」

「あー。守矢神社の神よ。」

「なるほど。（先生が昔話していた友人ね。どちらかという大切な人のように話して

た
わ
ね
・
・
・
°
☺
┌

3 「冥界と嫌な予感」

暫くして紅魔館に着いた。

中に通してもらおうと見覚えのある小柄な吸血鬼が鳩尾に突撃してきた。

「クロく!!」(無邪気な笑顔&加速)

「ぐえっ。」(鳩尾にクリティカル)

「黒?!」

「クロ、遊びましょ!!」(天使の様な笑顔)

「……。」(痛みで喋れない)

その後痛み二悶絶していた僕を諏訪子が擦ってくれたり、フランに引っ張られたりし

ていたら咲夜と一緒に来たレミリアがフランを回収してくれた。

ごめんフラン、異変解決したらまた遊びに来るよ。

咲夜と少し待っていると霊夢達がやって来た。

すると魔理沙とパチュリーが目をキラキラさせながら話しかけてきた。

「黒！黒って柏手様だったんだな!!」

「?そう呼ばれてるけど?」

「柏手様って魔法の開祖なんだろ!すごいぜ!!」

「貴方が魔法の開祖、手を叩く者Claper・・・!!」

「手を叩く者Claperかあ、懐かしい呼び名だなあ・・・。」

思い出したので魔理沙とパチュリーに少し昔話をしてあげよう。

——昔のことだ。有るところに僕のことを魔法使いと呼んだ金髪の人形の様な少女

がいた。

彼女は「摩訶不思議の法則を使うから、魔法使いじゃないの?」と言った。

僕は彼女の頭脳に興味を持った。彼女の持っていた力（今は魔力と呼ばれてるけど）に合った術を教えた。

彼女は控えめに言って天才だった。

彼女は数年でその術、魔力を用いる法則を魔法として体系化した。

彼女は僕をC手lをa叩p者e者rと呼んでいた。

それが魔法使いの始まりの物語。

彼女は魔法後天的的に魔法魔力的に成得る種族に成る魔法を創った。

副作用として成長が止まる、要す不老になっちゃったけどね。

僕はそれを見届けたあと、彼女に「姓をつけて欲しい」と言われたので三日悩み『マーガトロイド』という姓を贈った。

僕はその後、また旅に出た。

それだけの話。

魔理沙、パチュリー、どうだった?

「しよ、衝撃だぜ……。」

「ええ……。」

「どうした？」

「知り合いに居るのよ。」

「何が？」

「マーガトロイドがよ／＼だぜ。」

おう。

それはそれは。

彼女本人？

それとも子供？

弟子？

……異変解決したら会ってみたいなあ。

ってそうだ。

異変!!

「そういえば、異変に関してわかったことは？」

「春のエネルギーが無くなった事が原因みたいだぜ。」

「なるほど。じゃあ、犯人は冥界に居るな。」

「師匠、どういうこと？」

「ん？ああ。春告妖精に聞いてみたら春のエネルギーの気配が冥界からするんだとさ。冥界には春は無い。だから無くなった春は冥界にあるってわけだよ。」

「なるほどね。じゃあ師匠、さっそく行きましょう！」

「でもどうやって冥界に行くんだぜ？」

「ん？空を上ってけば行けるけど寒さで普通の人間は死んじやうし、時間が掛かるから空間を歪めていくけど？」

「・・・なんでそんな事知ってるんだぜ？」

「・・・若かりし頃の過ちってやつだよ。」

エクソシストだった時
あの時にちよつとやらかしたことを思い出す。

諏訪子よジト目で見ないでくれ、しようがないだろ。

だって、サタンが冥界に逃げるとか思ってたなかつたし。

・・・そんな事は置いておいて。

行く準備を整える。

冥界に行くメンバーは霊夢、魔理沙、咲夜、僕、諏訪子だ。

ふと、勘が囁く。

それと同時に今は僕の狂気の狂気が囁く。

へアハハ!!キレイな桜!〜

——桜?・・・嫌な予感がする。

頭を少し振り嫌な予感を考えないことにする。

「よし、行こう!」

「うん!早く冬を終わらせて花見をしよう!」

「おう!異変解決したら魔法を教えてください!」

「ええ。さっさと行きましょう師匠。」

「はい、行きましょう先生。」

「黒、また遊びましょう!!」

「魔理沙、気を付けなさい。」

フランやパチュリー達の見送りの中、柏手を打つ。
空間が歪み、冥界に繋がる。

そうして僕達は冥界へ踏み出した。



「カカカツ。コレが妖怪の賢者が封印した冥界の妖怪桜か。」

冥界にある花が咲かない桜の前で黒い人影が嗤う。

その影は桜に手を刺した。

「ふむ。コレが封印か。．．．む？既に解けかけている？」

暫くすると影は狂った様に笑い出した。

「クカ、クカカカッ!!此の妖怪桜を目覚めさせようなどという大馬鹿者もいたものよ!!・・・まあいい。妖怪桜、少しお前に力をやろう。」

すると影から桜へ黒い魔力が注がれる。

「西行妖よ、アノ憎きエクソシストと巫女を殺せ。クククツクカカカッ!!」

影は人知れず、高らかに嗤いながら見えなくなつた。



此処が幻想郷の冥界か。

欧米の冥界は焦土みたいだったのにここは霊を休ませる建物がある。

管理者の違いだろうか？

ん？

・・・見覚えのある髪色と体質だ。

少し先に立ち塞がる様に銀髪の半霊^{ハニ}体質の少女がいた。彼女は此方に刀を構えて言った。

「生者よ、速く帰れ。此処は貴方達の来る場所ではない。」

僕は彼女に声をかけた。

「僕は柏手。ここに春を返してもらいにきたよ。君は？」

「私は魂魄 妖夢。ここにある白玉楼の庭師^テ件剣術指南役です。此処は通しません。」

「魂魄？・・・ねえ、もしかして君は妖忌の娘だったりする？」

「えっ？お祖父様の知り合いですか?!」

「えーっと。剣の師匠ってどこかな？」

「……ま、まさか貴方はお祖父様が話していた柏手様?！」

「うん。」

「……。お、お祖父様の師匠であろうと此処は通せませんっ!!」

「霊夢達は先に行つて。僕は「私も」……僕と諏訪子はこの子の相手してるから。」

「わかつたわ。」

霊夢達は飛んでいった。

それを阻止しようと妖夢が斬りかかる。

僕は「アメモムラクモ」でそれを受ける。

懐かしい太刀筋だ。

諏訪子は後ろで僕と妖夢の剣戟を見守っている。

完全に観戦モードだなあ。

冥界に剣戟の音が響く。

彼女の、妖忌の剣は時に速く、時に苛烈に、常に鋭く。

僕はその剣を無駄を省いた剣——妖忌曰く”機能美の剣”——で対応する。

「くっ。コレがお祖父様が言っていた”機能美の剣”っ！……悔しいですが私より強い！！」

「まあ、ね。流石に数千年修行した剣でそう安安と負けれる程じゃないと自負しているつもりさっ！！」

「くうっ！！」

妖夢を追い込む。

既に妖夢は切り傷が全身に有る。

ちよつと済まないが無傷で圧倒できるほど彼女は弱くない。

妖忌、良い孫を持ったみたいだな。

この子のもつと強くなる。

妖忌にも見せたし、最後に奥義位は魅せてあげよう。

満身創痕の妖夢に声をかける。

「妖忌の孫、妖夢。君に敬意を称して劍の頂を少し見せてあげよう。」

「っ?!」

僕は空間を斬る要領で数秒間の空間を斬り伏せる。

妖夢の背後で「アメノムラクモ」を仕舞う。

彼女は肩に一筋の切り傷が出来ている。

妖夢は血が足りなくなつて地面に膝を着いた。

「はあ、はあ。い、今のは?」

「時間を斬つた。妖忌みたいに言うのなら、この劍に斬れないモノの中に時間は無かつたのつてただだよ。」

「……コレが、劍の頂。幽々子様、すみません。」

妖夢は氣を失った。

僕は彼女の傷を簡単に手当して、道の端に寝かせる。すると諏訪子が駆け寄ってきた。

「黒、凄く格好良かったけど時間を斬るなんてデタラメだよ。」

「まあ、旅の間はずっと劍を振ってたからなあ。」

「・・・そんな黒も好きだけどね。」

諏訪子が微笑み、そう言った。

僕は左手を腰に回し、そつと抱き寄せる。

ああ、とつても可愛いつす。(重症)

へねえ、黒。^{ワタシ}イチャイチャしてないで霊夢達を追いかけないの？桜が咲くの見逃しちゃうよ？

フラン？僕？の狂気が囁く。

それを聴いて少し調べてみたら霊夢達より強そうな妖怪？が向こうで目覚めそうさ。

「・・・ずつとこうしてたいけど、霊夢達の方が不味そうさ。諏訪子、行こう。」

「うん！」

僕が手を握ると諏訪子は僕の手を握り返してくる。

僕と諏訪子は霊夢達に追いつくために飛翔した。

4 「西行妖」

side : 霊夢

「あらあら。ヒトつて思ったよりも弱いよね。」

「くっ。」

今、立っているのは二人。

満身創痍の私と無傷の女。

女は扇子で口元を隠しながら、桜を咲かしたいだけだといった。

私の勘はその桜を咲かしたら不味いといったので阻止しようとしたが、魔理沙は気絶。

咲夜は血反吐を吐いて倒れ、私は満身創痍。

奴——西行 幽々子——は強かった。

師匠に修行をつけてもらう前の私なら既に3回死んでいたと思う。

すると、奴が話しかけてきた。

「ねえ、博麗の巫女。もう少しで咲くわ。貴方も見るといいわ。」

奴の後ろにある桜を見ると略満開といったところだ。

——嫌な予感がする。

「え？」

奴の腹から枝が生えた。

いや、奴が桜に腹を刺された。

不味い。

私は（奥の手は出して無いが）奴に敵わない。

その奴が簡単に殺られるってどんな化け物よ！

私は急いで魔理沙と咲夜の元に向かい、結界を張る。

直ぐにピシリと音がする。

妖気だけで結界が破られ、凄まじい速度で枝が伸びて来る。

不味い、二人を庇いながらでは避けられな——



遠目に見て桜はもうすでに略満開だ。
急がなきや。

「諏訪子、飛ばすよ!!捕まって!!」

「うん！」

飛ぶ速度を一気に上げる。

〈アハッ〉

嫌な予感しかしない。

間に合ってくれよ……。

暫くしてぼろぼろな霊夢達の姿が見えてきた。
その前に佇んでいる女の腹を桜の枝が貫いた。

「え？」

その瞬間、霊夢は魔理沙と咲夜を結界で覆った。

不味い、凄く不味い。

妖怪桜
アレは有っちゃいけない。

柏手様
守護者としての部分が云う、『アレは生きとし生ける物の天敵だ』と。

っ?!

標的は霊夢か!!

間に合えっ!!

急いで霊夢と妖怪桜の間に割り込む。

「【二拍全祓】!!」

妖怪桜の枝を退ける。

後ろの霊夢がぼろぼろの状態で何時もからは考えられないか細い声を出す。

「し、しょう?」

「霊夢、大丈夫か?」

「何とかね……。」

「うん。良く頑張ったね。少し休んでな。」

僕は霊夢の頭に手を置いたあと、霊夢達を結界で守る。

諏訪子は僕の手を握ってきた。

「黒、私も手伝うよ。他人事じゃないしね。」

「ありがとう、諏訪子。……取り敢えずは消し飛ばすと春が消えちゃうから、封印し直さないと。」

「わかった。黒は私を守って。私が本体を抑えるよ。よろしくね？」
私の騎士様
 黒「？」

「うん。承った。諏訪子には一ミリも触れさせない。」

僕は諏訪子の前に出る。

「【アメノムラクモ】!!」

「アハハッ！しょうがないから少し手伝って上げる！」

妖怪桜の攻撃が僕達目掛けて飛んでくる。

僕の中からフランと僕を足して二で割ったような容姿の少女が現れた。

彼女——僕フランの狂気は魔法で妖怪桜を攻撃する。

僕は妖怪桜を斬って、斬って、祓って、祓ってひたすらに諏訪子の為に時間を稼ぐ。
 後ろで諏訪子が大規模な術を組んでいるのが解る。

「黒、後十分稼いで。」

「了解！」

妖怪桜の攻撃には何か黒い魔力みたいなのが乗っている。
当たったら不味そうだ。

ん？

スキマ？

『烏』は間に合ったみたいだな。

「クロ！西行妖は?!って危ないっ!!」（仰け反り）

「今時間稼ぎ中!!紫も手伝って！」

「主様、私も手伝っちゃいますよー！」

「助かる！」

「時間稼ぐのはいいんだけど、そのヤバい娘誰よ?!」

〈アハハハはっ!!〉

紫と『烏』の参戦によって妖怪桜——紫曰く昔封印した西行妖という妖怪らしい——
に対して優勢を保っている。

そろそろ、十分。

「黒!!出来たよ!!」

「よし!紫、『烏』一旦戻ってきてくれ!!」

「行くよ!【八方封殺】!!」

諏訪子の掛け声の後、妖怪桜の周りに八本の石柱が現れ、妖怪桜に突き刺さった。
妖怪桜の攻撃が止んだ。

効いてるみたいだ。

「紫、再封印できる?」

「ええ、準備してきたから直ぐにできるわ。」

「頼む。」

そうして紫によって石柱が突き刺さった西行妖は封印された。



とある神社で影はとある存在と話していた。

「ちっ。約立たずめ。忌々しい。．．．まあいい。次の策はある。高位神二柱も味方につ

けたことだしな。」

「おい、サタン。本当にヤツを殺せるのか？」

「モチロンだとも！アマテラスにツクヨミ。君達の力と私の悪魔の力が合わされば例え、エクスリストだろうと始まりの妖怪だろうと殺せるだろよ！」

影——サタンは内心で細く笑む。

黒を殺す計画をアマテラス達と進めながら。



「あー愉しかった。ワタシは戻るね！」

そう言って何も説明せず僕の狂気は僕の中に戻っていった。

すると後ろにいる諏訪子から引つ張られる。
悪寒。

「黒。あの娘、ナニ？」

「え、えーつと・・・。」

「クロ、私も気になるわ。この幻想郷にあんな存在は入って来てないわ。どういうことかしら？」

「えー僕にも解らないと言いますか、正体は解るんだけどなんであんなことを出来るのか僕も知りたいと言いますか・・・。」

「黒？」

「クロ？」

「そういえば。あの娘、妹様と先生を足して二で割った様な見たためでしたね。」

「ん？つてことはクロの娘つてこと？」

「いや、違うだろ。」

「黒？」

おーつと不味い。

諏訪子から殺気みたいなの出てるんだが。

ん？

諏訪子、横腹が痛いです。

つてか咲夜起きてたのかよ。

これは早急に説明しないと僕が社会的ロリコンに死んでしまう。

僕は諏訪子達に説明した。

アレは元々はフランの狂気だったこと、僕がその狂気を喰らったこと、何か自意識を持つていること。

咲夜は滅茶苦茶驚いていたが、諏訪子の殺気は止んだ。

「……つてかき、それどうするの？」

僕は地面に正座させられている女を指差す。

すると紫が言った。

「幽々子はもう少し反省させときなさい。」

「紫く。酷いじゃない。私、お腹に穴が空いてるのよ？」

「亡霊だから大丈夫でしょう？」

「えー。」

「えーじゃ無いわよ！危うく大変なことになる所だったっていか大変なことになってるわ。」

うん。

そりゃあね。

重症者3名に明けない冬による作物への被害とか諸々。

結局、信仰してくれるなら諏訪子と僕が作物への被害とかはどうかすることになった。

大変だー。

その後は僕が霊夢達を手当して解散になった。



そうして守矢神社についた。

諏訪子に引つ張られて居間に行く。

「じゃあ、黒。アレに関して詳しく話してくれるよね？」

「はご。」

諏訪子に詳しいことを話した。

そうして説明していると諏訪子が狂気を出してといたので出てきてもらおうと自分から話しかける。

〈おーい。〉

〈あはつ。黒^{ワタシ}から話しかけてくるなんて珍しいね!〉

〈さつきみたい僕の外に出てくることって出来る?〉

〈うーん。あの時は結構ヤバそうだったから出てこれたけど、今は名前もないから外には出れないよ?〉

〈。。。〉

〈どうしたの?〉

〈よし、君に名前を付けよう。〉

〈は?〉

〈だって、今の君はフランの狂気な訳ではないし害もない。さっきは手伝ってくれた。なら名前が無いのは可哀想だろう?〉

〈あはつ。ワタシ黒ってバカなの?〉

〈?〉

〈ワタシはね、フランを外敵から守るための防衛機構ワタシ自身の感情。今は黒ワタシの元々持っていた狂気と混ざって別の物に成ってるの。要するに黒はワタシに名前を付けようとしてるの。笑
いものね!アハハハは!〉

〈なるほど、フランの狂気にはそんな意味があったのか。でもさ、別に良くないか？〉

〈なんで？〉

〈君はもう一人の僕ってことだろ？呼ぶ時に名前がなかったら可哀想だろ？〉

〈・・・。じゃあ、付けて。ワタシだけの名前。〉

〈うん。〉

さて、彼女にはどんな名前がいいだろう？

核になっているのはフランの狂気。

外側は僕の狂気ときた。

苗字は同じでいいとして、名前か。

・・・ん？

ってことは彼女の内面の殆どはフランってことでは？

よし、フランから名前を借りよう。
フランドールとクロだから……。

〈出雲 クランドール。どうかかな?〉

〈……安直だね。〉

〈うっ。〉

〈うん。でも気に入った。ワタシは今から出雲 クランドール!!よろしくね!お兄ちゃ
ん!!〉

〈はい?〉

拜啓、天国の母さんへ。

妹ができました。

どうゆうこと?!

あ、もう一人の僕だから双子と考えたら兄弟姉妹か。
そうして僕の狂気は僕の妹、出雲 クランドールに成った。

5 「明日はきっと騒がしい日になる（胃痛）」

あの後、諏訪子の前に出てクランドールはこう言った。

「ワタシは出雲 クランドール!!よろしくね、お姉ちゃん!!」

諏訪子は固まった。

その後色々あつて守矢神社（と諏訪子の住処）で暮らすことになった。

早苗は克蘭を妹の様に可愛がり、神奈子は克蘭にビビった。

諏訪子はというと克蘭を娘の様に可愛がっている。

何故に娘？

その後、紫経由でレミアアから明日紅魔館に来いという有り難くないお手紙が来た。

手紙から殺気がするってどういうこと?!

紫に何したの？と聞かれたが何もしてないと言えない。

ちなみに紫はクランドールを見て、神奈子みたいにビビった。

何故だ？

僕の妹、可愛いと思うんだけどなあ。

「お兄ちゃん、遊ぼうー！」

紫、克蘭が呼んでるからまたね。

え？シスコン？それが何か？

因みに克蘭はフランの髪色と瞳の色と胸部装甲しか違いが無い。

どっちが大きい？えつとですね・・・僕の年齢が反映されたので、克蘭ドールのほうが・・・。

種族は僕と同じ”何者でもないバケモノ”だった。

・・・僕より強いのでは？

兄の威厳は保ってます。（負けなし）

「克蘭、何して遊ぼうか？」

「うーん。トランプ！」

あ、デジャブ。（3章7話）

その後は諏訪子や早苗も誘ってカードゲームをした。

あー明日になってほしく無い。（胃痛）

僕、レミリアに何かしたっけ？

でもフランにはクランドールを紹介しなきゃなあ。

うん。

会わせちゃいけない気がする。（胃痛）

紫、ごめん。

君の胃痛の種増やすことになりそう。



今僕はクランと諏訪子と一緒に博麗神社に来ている。

霊夢達にクランの紹介をするためだ。

新参者？は博麗の巫女に紹介しておかないといけないみたいだし。

境内を歩いていると魔理沙を見つけた。

金髪の女性とパチュリーと話している。

パチュリーが居るのは珍しいな。

声をかけよう。

「やあ、魔理沙、パチュリー。彼女は？」

「お！噂をすれば何とやらってやつだ。黒、コイツは前言ったマーガトロイドだぜ。」

「こんにちは、柏手様。私はアリス、アリス・マーガトロイドです。」

「似てる。(いや、髪色以外が似すぎてる)君の家系にシンシア・マーガトロイドって居る？」

「は、はい。シンシア・マーガトロイドは母です。」

「そう。僕はシンシアの師匠ってところかな。柏手でも黒でも好きな様に呼んでくれて構

わないよ。よろしく、アリス。」

「ええ、よろしく。」

「で、パチュリーがここに居るのは珍しいね。どうしたの？」

「柏手様に聞きたい事があったのよ。」

「聞きたい事？」

「一体レミリアに何したのよ？」

「何もしてない。」

「本当かしら。レミリアがピリピリしてたわ。確かフランをくとか言ってたわね。」

「あ。」

「なあ。それって黒の後ろに居る奴が関係してるんじゃないか？」

魔理沙は僕の後にいるクランを指差す。

ああ、明日よ来ないでくれ……。 (胃痛)

「クラン、自己紹介して。」

「うん！……はじめまして！ワタシは出雲 クランドール！お兄ちゃんの妹です！」

「なあ、パチュリー。フランにめっちゃ似てないか？」

「ええ、似てるわね。それも凄く。しかも目の色と髪の色は柏手様のものね。」

「黒、フランとの娘か？」

「いや、違うよ?!」

かくかくしかじか・・・。

魔理沙達に克蘭は僕と同じ種族で姿が無いからフランの姿をベースにしたというカバーストーリーを話した。

魔理沙、それって黒とフランの娘ってことじゃないのか？とか言うんじゃないか？

「あ、因みに僕と同じ位強いよ？」

「しよ、衝撃だぜ・・・。」

「魔理沙、弾幕ごっこしましよ！」

「くっ。いいぜ！やってやるぜ!!」（ヤケクソ）

結果は魔理沙の惨敗だった。

いや、まあ僕のスペックの魔法使いだと言えればわかると思う。

魔法の節約？なにそれおいしいの？みたいな感じでマスパいっばいうってくる。（言語野にダメージ）

まあ、そんな事は置いておいて霊夢にクランの紹介をしに行った。

「霊夢、昨日できた妹を紹介するよ。」

「師匠、頭大丈夫？」

「至って正常だからこそ頭と胃が痛い……。」

「……何かごめんなさい。」

「はじめまして！ワタシはお兄ちゃんの妹の出雲 クランドール！博麗の巫女、よろしくね！」

「はあ。私は博麗霊夢。貴方の兄の弟子よ。よろしく。」

side紫

「藍、胃薬持ってきて。」

「はい。胃薬です。ですがどうしたのですか？」

「師匠に妹が出来たの。」

「はい？義妹ということですか？」

「いいえ。実妹が昨日出来たのよ。」

「・・・。」（理解不能によるフリーズ）

「しかも師匠と同じ位強いのよ！一体どう成ってんのよ！」



あの後、遊び疲れたのかクランは僕の中に戻って行った。

聞いたところによるとクランは扱いたくはない僕に創った分身体をジャックしているらしく、常に僕の中に居るらしい。

要するに外で活動しているのは遠隔操作の子機つてとこだ。

結界術とかで繋がりを遮断されると分身体は霧になって消滅するみたい。

だから、この戻るといふのは分身体のエネルギを僕に返却しているってことらしい。

〈お兄ちゃん^{ワタシ}は難しいことを考えてるねー。〉

何か悪いか？

〈ぜんぜん？〉

何故に疑問形？

〈そんな事はいいからさっさと帰ってお姉ちゃんとイチヤイチヤしてきなよー。ワタシ

は寝てるから。じゃー！〉

クランの声がしなくなった。

もう略夜だし本人が言うように寝たのだろう。

さて、守矢神社に帰りますかー。

そうして僕は月を見ながら守矢神社に向かって飛び立った。

暫く飛んでいると守矢神社の大きな鳥居が見えてくる。

鳥居の上には『烏』が腰掛けていた。

『烏』は守矢神社か博麗神社に泊まってるらしい。

自宅は……前の騒動の時に解体されてしまったそうなの。

「主様、お帰りなさい。」

「ただいま。そういえば今も根無し草だつて？家ぐらい建てたら？」

「えーつと。実は個人的に今の根無し草の方が合ってるんですよ。だから当分はいいかなーって思ってます。」

「へえ。うーん。じゃあこれあげる。」

僕は『鳥』にあらかじめ彼女の為に造っておいた巾着を投げ渡す。

中は僕の能力が付与してあつて筆筒二つ分の物が入るようにしてある。

「これは？」

「筆筒二つ分の物が入るようにした巾着。根無し草でも私物位入れられたほうが便利だ

ろ?」

「ありがとうございます。」

「じゃあ僕は帰るよ。」

僕は『烏』と別れ、境内を歩く。

明日の事は考えたくないから諏訪子と酒でも飲んで寝よう。

さて、諏訪子はどこだろう?

うーん。

当て勘で屋根の上かな?

そう考えて僕は屋根の上にかかる。

「黒、お帰り。」

「諏訪子、ただいま。」

「黒、久し振りに月見酒でもしよう。」

「うん。僕もおんなじ事を考えて酒を持って来たよ。」

「私は黒がお酒を持ってくると思ってたツマミを用意していたよ。」

「以心伝心ってやつだね。」

「うん。さあ飲もう。乾杯。」

「乾杯。」

月に照らされた諏訪子はとても魅力的だった。

夏目漱石は「I love you」を「月が綺麗ですね」と訳しただけど、「月より貴方が綺麗ですね」はなんて訳せば良いのだろうか？

「I need you」でいいんじゃない？ さっさとくっつきなよー。くっ寝たんじゃなかったの？

へ黒が吸血される予感がして面白そうだから起きたのー。〜

え?!

僕は諏訪子の方を向く。

其処には捕食者の貌をした諏訪子が。

諏訪子は僕を抱き寄せて首筋を見て言った。

「黒、頂きまーす!」

「問答無用?!」

そうして夜は更けていく・・・。

6 「盛大な誤解 i n 紅魔館」

ああ、今日が来てしまった。

僕は今、レミリアからの（殺気の籠もった）手紙を持って紅魔館に向かっている。

「憂鬱だ……。」

〈アハハツ!!〉

「どうしたの？そんな上機嫌で。」

〈うーんとね。修羅場の予感!!アハハハはっ!!〉

「うげえ……。憂鬱だあ。」

暫くして紅魔館に着いた。

門番は此方に気付いたみたいだ。

瞬間、弾幕が飛んできた。

全部撃ち落とすが。

「おい、美鈴。どういうこと？」

「お嬢様から、貴方を歓迎して差し上げるようにとのことです。」

「はあ。【二拍全祓】。」

「えっ。」

ズドンッ

取り敢えず、全力で美鈴を吹き飛ばして壁の壁面にして門を通る。

前途多難だ……。

へあはっ☆人の不幸は蜜の味ってやつだね！〜

クラン、嬉しそうにしないの。

紅魔館の中に入る。

エントランスホールに咲夜が待機していた。

「おはようございます、先生。」

「おはよう、咲夜。なんで僕が招待されたのか知ってる？」

「……私からは何とも言えません。どうぞ此方に、お嬢様がお待ちです。」

咲夜に着いていくと大きな扉の前に着いた。

わあお。

凄い殺気だ。

何したかな……。

〈アハハハはっ!!お兄ちゃんファイトー☆〉

はあ、頑張ります……。

「お嬢様、咲夜です。先生をお連れしました。」

「……入りなさい。」

大きな広間に入ると其処には凄まじい殺気を纏ったレミリアが玉座のような椅子に座っていた。

「よく来たわね、黒。貴方には問い正したい事が有るわ。」

「……何かな？」（嫌な予感）

「貴方とフランの娘についてよ!!」

「はい？」

「取り敢えず、フランを傷物にした事を後悔させてあげるわ!!」

「いや、ちよつとま」問答無用よ!!こんなに月も紅いから本気で殺すわよつ!!」

レミリアが僕に向けて弾幕をばら撒く。

ん？

いつの間にか外が夜になってる?!

しかもスペルカードルールにある隙間が無いし。

〈完全に殺る気だねー〉

うへえ、誤解だつていうのに。

僕は「アメモムラクモ」でその弾幕を叩き斬る。

「コレぐらい凌いで貰わないとね！神罰「幼きデーモンロード」!!」

「つう。拍符「二拍全祓」！」

レミリアは殺す気で当たったら不味そうな弾幕を張る。

僕は自身のスペルカードで迎撃するも、神力だけじゃ敵いそうにない。

「すまんがレミリア。僕達の（誤解を解く）為にも負ける訳には行かない！」

「何ですって?! 貴方とフランの(娘の)為にですって?! ならフランの姉の私に勝って見なさい!! 神槍 「スピア・ザ・グングニル」!!」

「言われなくともお!! 妖符「黒の矢雨」!!」

「妖力?! 貴方、神じゃないの?!」

「僕は、何者でもないバケモノさ!! 「アメノムラクモ」!!」

「ちい! 「スピア・ザ・グングニル」!!」

僕は「アメノムラクモ」を構えて、レミリアは「スピア・ザ・グングニル」を構えてお互いに交差した。

相手に背を向けて着地する。

後ろからどさりと膝を付く音がする。

「黒、貴方強いのね．．．惚れたわ。」

「．．．はい？」

「でも貴方はフランの婿。認めてあげるわ、貴方とフランの関係を。」

「．．．え？」

「どうしたのかしら？」

「フランとの関係って何？」

「婿じゃないの？」

「何故に?!」

「だって子供がいるじゃ無い。」

「……。レミリア、年齢を考えてみなよ。クラン、出ておいで。」（胃痛）

「はい☆」

「……おかしいわね。」

「一応言っておくがクランドールはフランの娘じゃないぞ。」

「もしかして勘違いだったこと……?!」

「もしかしなくても誤解だよ!!」

「……（つて事は黒はフリーってことかしら?）。」

レミリアが僕を見て舌舐めずりをする。

うーん。

悪寒。

そんなことは置いておいて、レミリアにフランとクランの事を詳細に説明した。姉なので知る権利があるだろう。

クランはフランの狂気だったこと、僕の妹であること、フランとの娘ではないこと（此処超重要）。

「黒、勘違いしてごめんなさいね。」

「いや、誤解が解けたのなら良かったよ。」

「黒、貴方優しいのね。（ますます気に入ったわ。）私のことはレミィで良いわよ。」

「うん。あらためてよろしく、レミィ。」

「あはっ。よろしくね、レミリアさん！（あーあ。お兄ちゃん、修羅場確定だね☆）」

「ええ、よろしくねクラン。フランとも仲良くしてくれると嬉しいわ。」

その後、僕とクランはフランに会いに行った。
フランの部屋の前に着く。

「フラン、遊びに来たよ。」

「あ、黒!!・・・隣の子はだあれ?」

「初めまして、フラン。ワタシは出雲クランドール。お兄ちゃんの妹です!よろしくね、フラン!」

「わあ。よろしくね、クラン!遊びましょ!」

「うん!」

フランとクランが並んでいると双子に見える。

「何して遊ぶ？」

「弾幕ごっこ！」

「よし、お庭に案内してあげる！クラン、着いてきて！」

「うん！」

二人は元気よく飛び出していった。

やべっ美鈴巻き込まれないかなあ……。

「アハハハはっ!!」

「私の作った花壇があー!!」

……僕は何も聞かなかった。

うん。

そうしよう。

「先生、お嬢様がお茶でもとお呼びです。」

「レミイが？うん。ご相伴に預かろうかな。」

その後、レミイと咲夜の淹れてくれた紅茶を飲んでクランと神社に帰った。
なお、紅魔館の庭の更地大とクレーター惨は見なかつた事事にした。

7 「お兄ちゃん、修羅場だね☆」

「黒を狙う奴は崇つて殺るう!!」ミシヤクジ「赤口!!」

「受けて立つわ!!」「スカーレットシユート」!!

僕の前で、諏訪子とレミイが殺し合いをしている。

どうして、こうなったんだっけ?

〈アハハッ。お兄ちゃん、修羅場だね☆〉

・・・胃が痛い。

止めに入らなきや。

〈・・・お兄ちゃん。女の戦いに割って入ったら、(多分胃が)死ぬよ?〉

うん。

もう胃が痛いよ。

まあ諏訪子やレミイが死ぬよりマシだし、僕は目の前で起きている二次被害を見逃せるほど悪人じゃない。

諏訪子とレミイの戦いは熾烈を極め、二次被害で妖怪の山をぐちやぐちやにしていった。

大地は抉れ、即死級の瘴気や祟りが漂う。

死者が出てないのが奇跡だ。(胃痛)

友よ、僕が何をしたって言うんだ……。

僕は覚悟を決めて「アメノムラクモ」を創って握る。

へ……お兄ちゃん、逝くの？

うん。

僕は諏訪子とレミイに向けて飛び立った。



——時は朝へと戻る

うーん。

胃が痛いけどいい朝だ。

皆より早く起きた僕は守矢神社の境内で朝日を浴びる。

「……おはようお兄ちゃん。」

おはようクラン。

「どうしたの？」

いやあ、物凄く嫌な予感がして胃が痛い。

つてか最近勘がよく当たるんだけど霊夢もこんな気分なんだろうか？

「あー。それはね、ワタシが原因だと思うよ。」

クラン、どうゆうこと？

「えーつとね、ワタシはフランの防御機構だったのは話したよね？」

うん。

「正確にはちよつと違ってね、フランの能力の本能見たいなモノだったの。だからお兄ちゃんもフランの能力が使えるの。」

あれ？

フランの能力は「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」でしょ？

勘とは関係がないように思えるけど？

「フランは知らないけどレミリアさんの「運命を操る程度の能力」が遺伝してるの。」

ゑ？

・・・それ使えるように成つたらはフラン強過ぎでは？

〈そうだねー。でもそれは無いと思うよ。遺伝と言つてもほんの少し、精々少し自分の運命が見れる位だからね。〉

なるほど、その能力が僕の勘に影響してゐることか。

〈そういうこと。〉

・・・つて事はこのあと僕に善からぬ事が起きるつてことでは？

〈あはっ。〉

憂鬱だ・・・。(胃痛)

暫くして早苗が呼びに来た。

「柏手様、朝御飯が出来ましたよ。」

「ああ。今行くよ。クラン、出ておいで。」

「うん！早苗さん、行こう！」

「ええ、行きましようクランちゃん。」

そうして神社の居間で食卓を囲む。

「「「いただきます。」」」

食べ終わった後の片付けは僕と早苗でやった。

クランが手伝ってくれたので早苗がクランを撫でていたのにほっこりした。

ん？

レミイの気配が向かってくる。

あ、諏訪子が外に行った。

クランもついて行ったようだ。

・・・嫌な予感しかない。

へお兄ちゃん、ヤバいね！

クラン、いつの間に念話モドキが出来るようになったの？

っていうかヤバいとは？

へ諏訪子お姉ちゃんとレミリアさんが何か話してるんだけど、殺気増々く。へ
ドゴン!!

凄まじい轟音が鳴り響いた。

ヤバそうだなあ。

「僕は諏訪子を見てくるから、早苗は神奈子と神社に居て。」

「はい。わかりました!」

早苗の中に居るように言い付け、僕は急ぎ足で外に向かった。



side : 諏訪子

私は今、向こうから飛んできた吸血鬼と相對している。

その傘を持った吸血鬼が口を開いた。

「此処が守矢神社で合っているかしら？」

「うん。合ってるよ。私はこの神社の神、洩矢 諏訪子。君は此処に何の用できたの？」

「あら、貴方が諏訪子？・・・（コイツが黒の・・・）私はレミリア・スカーレット。黒に逢いに來たわ。」

「黒に？」

「ええ。求婚しに來たわ！」

「は？」

目の前のレミリアとか言う吸血鬼が言った事を聞いて一瞬思考が停止する。

・・・黒に求婚？

ナニヲイツテルンダロウカコノ吸血鬼ハ？

——自分の中からマグマの様な感情が上って来るのがわかる。
要するに、私から黒を奪おうって事だね？

「レミリア・スカーレット、君は私から黒を奪おうって言うんだね？」

「あら、私はレミリア・スカーレット!! 欲しい物は人なのであろうと手に入れて見せるわ
!!」

「・・・なら、オマエは敵だ!!」

今、此処でコイツは殺さなきゃいけない。

私は奴を殺す気で崇る。

「黒を狙う奴は崇って殺るう!!」
【赤口^{ミシヤグシ}】!!」

「受けて立つわ!!」「スカーレットシュート!!」



——そして現在

僕は術やら弾幕やら崇りやらを打ち合っている中へ突っ込んで行く。

へ……。しょうがないお兄ちゃんだね。露払い位は手伝ってあげるよ!〜

僕の中からクランが出てくる。

「いっくよー!」「フォーオブアカインド!!」

「二からのく」「ノワールストライク!!」「二」

四人になったクランが黒い弾幕で周りの弾幕や崇り等を撃ち落とす。

「ありがとう、クラン！」

「お兄ちゃん、アドバイスだけどね！二人ともお嫁さんにしちやいなよ!!」
「そうそう、それで円満！」

「オールオツケー！」

「修羅場かもしれないけどどうにかなるよ☆」

「はい？」

「」「ほら、さっさと行く!!」「」「」

side：レミリア

むう。

思ったよりも強いわね。

どうしようかしら。

〈レミリアさん。〉

あら？

念話かしら、どうしたのクラン？

〈お兄ちゃんはヘタレだし、諏訪子お姉ちゃんと協力してお兄ちゃんを落とすほうがいいと思うよ！〉

それは・・・いい案ね！

一夫二妻もいいと思うわ！

でも向こうが了承するかしら？

〈うーん。説得してみる！〉

済まないけど、頼むわねクラン。

〈任せて！・・・最悪の場合はお兄ちゃんの血を吸って。〉

どういうこと？

〈戻ってこれるかにはわかんないけど、バットエンドよりマシ!!〉

わ、わかったわ！

side：諏訪子

くっ。

思ったよりも厄介だ。

祟りは躲すし、吸血鬼としてのスペックが高い。

ふと、少し冷静になる。

恋や愛のために戦うレミリア・スカーレットを見て少し良いなと思った。

・・・黒を狙ってなかったら友達になれたかもね。

〈じゃあ、なればいいじゃん!〉

クラン?!

でも、アイツは黒を狙ってるし・・・。

〈お姉ちゃん、レミリアさんは強いよ。お姉ちゃんとおんなじ位。〉

・・・。

〈レミリアさんは死ぬのも厭わないよ。それぐらいの覚悟をしてるみたい。いくらお姉ちゃんの不滅でも何時かは折れなきやいけないよ。〉

・・・。

〈お兄ちゃんを独占したいのはわかるよ。〉

・・・。

へお姉ちゃん、逆に考えなよ。レミリアさんには何時か終わりが来る。でもそれはお姉ちゃんやお兄ちゃんの終わりよりずっとずっと早く来る。そうしたらレミリアさんの死で傷ついたお兄ちゃんはお姉ちゃんのモノだよ。〓

へたまにはお姉ちゃんも打算抜きに友達や仲間を作ったら？そうすればお兄ちゃんは二人のモノだよ？他の人に奪エわれるよりマシだと思わない？

．．．うん。

そうだね。

レミリアの事は少しは認めた。

友達になれたかもと思った。

知らない誰かに黒を奪われるよりはレミリアと協力して黒を独占したほうがいい。

しかも世界が終わった後ずつとあとには黒は本当に私一人のモノになる。

うん。

しようがないなあ。

へお兄ちゃんに責任取ってもらえないね☆

うん、そうしよう。

「レミリア、私から提案があるんだ。」

「奇遇ね、私もよ。」

「取り敢えず友達になろう／＼なりましょう。」



あれえ？

頑張って二人のもとに辿り着いたら二人が仲良くなってた。

今は防音？結界を張って話し込んでいる。

意味わかんない。

後処理のことを思うと胃も痛い。

〈女の友情ってやつだねー☆（共通目的お兄ちゃんのお嫁さんの団結を持った同士ってやつだね！）〉

ん？

〈何でも無いよ〜☆〉

すると話が一段落したのか結界が解かれた。

「黒。」

諏訪子とレミイが二人揃って詰め寄ってくる。

〈お兄ちゃんを人生の墓場へご案内〜☆〉

あ？

どういうこと？

「結婚しよう／しましよ。」

「あ？？」

何故にいきなり？

〈お兄ちゃん。二人の人生を狂わせた責任位は取りなよ〜☆レミリアさんにだって惹かれてはいるんでしょ？〉

うぐつ。

僕は諏訪子が……。

〈お姉ちゃんレミリアさんと協力してお兄ちゃんを落とすつもりだね！ほら、さっさとくつつきなよー☆〉

えーつと。

はい。

こういう時ってなんて言えばいいんだ？

〈不束者ですがよろしくお願ひしますってやつでしょ？〉
それ違う。

「えーつと、諏訪子とレミイはそれでいいの？」

「うん。レミイなら。」

「ええ。諏訪子なら。」

「……。」

するとクランが出て来た。

「ほら、お兄ちゃん。観念しなよ？えーっと、汝？出雲 黒。貴方は洩矢諏訪子とレミリア・スカーレットを愛することを誓いますかつてね？」

「……。」

「黒？」

「……少し前から考えてたんだ。」

「僕は何者でもないバケモノだ。」

「でも、それを抜きにして僕個人として誓おう。」

「柏^神手でもなく、何者でもないバケモノでもない出雲^僕黒個人として洩矢諏訪子とレミリア・スカーレットを愛する事を誓います。諏訪子とレミイ、これからもよろしく。」

「ほら、お姉ちゃん達。(ふつつかなヨメですがって!)」

「不束者ですがよろしくお願いします!」

「此方こそよろしくお願いします。」

そうして幻想郷に一組(一夫二妻)の夫婦が生まれた。

妖怪の賢者の胃に衝撃を与えたこの夫婦は何処へ向かうのだろう・・・。

8 「日常回なはず！」

あの後、僕は紫と協力して振り撒かれた祟りや瘴気を洗淨した。

その時に紫から「結婚おめでと〜」と祝の言葉を貰った。

紫に結婚式はどうするべきかと聞いてみたところ、幻想郷では結婚式はあまりしないらしい。

というか、種族や個人により感性から文化までばらばら、長命種は気が長い、等の理由で滅多にしないそう。

場合によっては博麗神社の宴会で結婚を報告とかざらにあるらしい。

僕はその後、諏訪子とレミリアと一緒に湖の住処で過ごしていた。

随分と諏訪子とレミリアは仲良くなつたなあ。

そうだ、諏訪子とレミリアに聞いてみよう。

「ねえ、諏訪子、レミィ。結婚式とかつてどうしたい？」

「うーん。呼ぶ人もあんまり居ないし、私は黒と契を交わしてるからやらなくてもいい

かな？」

「私は黒が居れば良いわ。それよりもこの姿の事をどうにかしないとイケないわ……。」

諏訪子、契つてなに？

・・・まあそれは置いておいて、僕は成長したレミリアを見る。色々あつてレミリアは成長した。

原因は僕の血を吸ったことだ。

何か吸血鬼としての格が上がった影響で身体が成長したみたい。

諏訪子はスレンダーな美女だが、成長したレミリアは傾国の美女って感じだ。身長も伸びたし・・・何処がとは言わないがとても大きくなった。

問題は、この成長が何の予兆もなく起きてしまったことだ。

正直言つて一目ではレミリアと判らない程の成長だ。

〈小学生がいきなり高校生に成った位の変化だもんね。〉

うん。

咲夜とかフランになんて説明したのか。

〈何か（胸が）大きくなりました！って言えばいいんじゃない？〉

いや、だめでしょ。

あーでも咲夜とフランなら気付くか。

まあ、取り敢えず紅魔館に行こうかな。

「諏訪子、レミイ。紅魔館に行こう。取り敢えずレミイのことだけでも説明しとかなきゃ。」

「ええ、そうしましょ。」

「だぶるでーとってやつだねー！」

・・・ダブルデートはちよつと意味が違うのでは？
そうして僕達は紅魔館に向けて飛び立った。



紅魔館に着くと門の前には咲夜が待機していた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。」

「あら、咲夜。わかるの？」

「咲夜、レミイのことがよく判ったね。」

「ええ。お嬢様のメイドですから。」

・・・。

咲夜つてさ不思議なことが沢山あるよね。

人間なはずなのにメイドになったときの姿のまま成長してないし、そういえばなんで
事故現場にいたんだろ？

へお兄ちゃん、女の子のヒミツは考えないほうが身のためだよ☆

うん。

その後僕達はレミイの成長を美鈴やフランに説明した。

美鈴は吃驚し、フランははしゃいで「お姉様、弾幕ごっこしよ！」とレミアアを連れて行った。

暫く咲夜と諏訪子とお茶をしているとしょんぼりとしたレミアアとフランが戻ってきた。

「黒、ヤバいわ。」

「どうしたのレミイ？」

「・・・力の制御が出来ないわ。」

「へっ？」

「強くなり過ぎてるのよ。フランの攻撃でも無傷よ。」

「・・・わお。」

「黒、諏訪子。少しパチュリーに会いに行きましょう。」

そうしてパチュリーの居る大図書へ向かった。

パチュリーにそのことを話し、レミリアを調べてもらった。
するとパチュリーは押し黙った。

「……。」

「パチュリー、どうしたのかしら？」

「レミイ、貴方ヤバいわ。」

「ど、どうしたの?!」

「格が上がったってレベルの話じゃ無いわよ。レミイ、貴方は吸血鬼じゃなく成ったわ。」

「「え？」」

僕とレミリアの驚愕の声が重なる。

レミリアが吸血鬼じゃ無くなった?!

「パチュリー、どういうこと？」

「柏手様、貴方が原因よ。多分、吸血鬼の格が上がったのは間違い無いわ。でもその格を上げる材料が神の血だったのが問題よ。それによってレミイは吸血鬼だけど魔の天敵^神っていう謎掛けみたいな存在になってるのよ。」

・・・何か僕と似てるなあ。(現実逃避)

僕は気になったことをパチュリーに聞く。

「一応聞くけどレミイに害は無いの？」

「多分無いわ。精々吸血鬼の弱点が効かなくなるくらいね。そう考えると弱点が無くなつた吸血鬼つて悪夢ね。」

「レミイに害が無いなら良かった。」

「ああ、そうそう。言い忘れてたけど、結婚おめでとう。」

その後、僕達は紅魔館で昼食を取った後に湖の住処へ向かった。

レミリアは今も紅魔館に住んでいるが諏訪子と僕が住んでいる湖の住処（元神社）に泊まりに来るそうだ。

咲夜達からは「旦那様とごゆっくり」と言われたそう。

別に先生のままで良いのに。

両手に花つてこんな感じなんだろうか。

今僕は湖の住処の縁側で二人とのんびりしている。

右腕には諏訪子が、左腕にはレミリアが抱き着いている。

すると諏訪子が僕の名前を呼ぶ。

「黒。」

「ん？どうしたの諏訪子。」

「呼んだだけだよ。ちよつと言つてみたかったんだ。」

諏訪子が可愛い過ぎる……！

〈お兄ちゃん、重症だね。〉

そうしているとレミリアがポツリと言う。

「……ねえ、黒、諏訪子。私は今、幸せよ。」

「うん。レミイ、僕もだ。」

「私も幸せだよ。黒が居るしね。」

「ええ……今はハンターが来ることも無いし、フランも外に出れるように成ったわ。且

那樣もできたしね。でもね、ふと思つてしまうの。コレが私の能力が生み出した都合の良い夢なんじゃないかって。」

レミリアが僕の腕を強く抱き締める。

微かに震えているみたいだ。

「私は、怖い。この幸せが壊れるのが。私は運良く黒と諏訪子と出逢えたわ。でも、成長したお陰か視えてしまったの。黒と出逢えなかつた私が。」

「……。」

諏訪子が気を利かせて腕を離してくれた。

僕は震えているレミリアを膝の上に載せて抱き締める。

「レミィ、大丈夫。此処に僕は居るよ。」

「レミリア、私も居るよ。」

「黒、諏訪子……。」

僕は諏訪子も抱き寄せる。

……少し僕も怖くなつたみたいだ。

「諏訪子、レミリア。愛してる。」

「うん。私もずっと前から愛してる。」

「……ええ。愛してる、愛してるわ。もう、放さない。」

強く抱き締め合う。

——嗚呼、この二人をととも愛おしく感じる。

放さない。

紅の時の力及ばずはもうごめん。

二人を守れる位は強くなろう。

へワタシ、完全に空気だね……。お兄ちゃんの中に居るせいかな甘ったるさで砂糖吐ききそう。く

9 「修行!修行!!」

さて、諏訪子とレミリアと結婚してから数日が経った。

今僕は強くなるために古い友人にアドバイスを貰おうと思っている。

彼は格としてはアマテラス達より低いが信仰の力ではトップクラスだ。

しかも、僕の格闘の基礎の師でもある。

だが彼は幻想郷にいるわけではなく、現代の新界という場所に居るので会うことが出来ない。

なら、召喚すればいいのではと思い、僕は今人気のない草原に来ている。

「(ト)こらへんで良いかな。」

「お兄ちゃん、何してるの?」

「ああ、少し古い友人に会おうと思ってね。」

そうしてクランと話しながら準備をしていると僕の横にスキマが開いた。

「こんにちは、クロ。．．．一体何をしようとしてるのかしら?」

「やあ、紫。友人に会おうと思ってね。少し遠いから召喚しようとしてるんだ。紫も会ってみる?」

「．．．え、ええ。相席させていただこうかしら。(古い友人?嫌な予感がするわね．．．)」

「よし、準備完了!」

僕は準備した陣の中心で香霖堂で買った聖書を開く。

〈あれ?詠唱とかはしないの?〉

ああ、どちらかというところと召喚というより呼び鈴と扉を創る為の陣だからね。

そうしていると陣が輝き出す。

「紫、来るよ。」

「この気配は?!」

すると僕の前に懐かしい男が現れた。

「何者でもない友よ、久しいですね。」

「うん。久し振り、かつて聖人だった友よ。」

僕は友と挨拶を交わす。

その後、あまり時間がないので手短かに要件を話す。

「なるほど。強く、ですか・・・。」

「うん。何か助言とかしてくれると嬉しいかな。」

「ふむ、取り敢えずは神力を使えるようにしたほうが良いでしょう。」

「神力を？」

「ええ。友よ、貴方は未だ神としての力を使いこなせていない。神力は理に干渉する力です。天を統べる神が使えば天の理を操り、地を統べる神が使えば地の理を操る。貴方は神としての在り方は歪ですが立派な神性を持っています。それを使い熟せば他の3つの力とも合わせて使えるでしょう。」

「判った。参考にさせてもらおうよ。」

紫はさつきから驚愕の表情を浮かべたまま黙っている。

そうして話していると友の身体が透け始めた。

「む、そろそろ時間ですね。友よ、ご結婚おめでとう。近い将来、貴方の前には困難が立ちただかるでしょう。ですが、貴方の伴侶達と協力すれば乗り切れるでしょう。友よ、また合うのを楽しみにしています。悪魔に気を付けなさい。では、また。」

「うん。また今度。」

そうしてかつて聖人だった友は帰って行った。

友が帰った後、片付けをしていると紫が話しかけてきた。

「・・・クロ、今のは？」

「僕の古い友人。今は、現代で神様やってるよ。」

「なんてもの呼び出してるのよ?! っていうか師匠、まだ強くなるつもりなの?!」

「うん。諏訪子とレミィを守る位は強くなるうと思ってるね。あ、紫も久し振りに一緒に修行する?」

「え、ええ。まあ有事のためにも力が有って困ることは無いわ。師匠、よろしく願いますわ。」

「うん。一緒に頑張ろう！」

そうして数千年振りに妖怪の賢者と何者でもないバケモノの師弟関係が復活した。

「よし、ついでに霊夢と『烏』も鍛え直そう。」

「ワタシも修行するー!!」

「うん。クランも頑張ろう！」



友からアドバイスをもらってから、1年が過ぎた。

その1年僕は、紫達と修行をしたり、諏訪子とレミリアと過ごしたり、息抜きで皆で小さな宴会をしたりして過ごした。

1年の間にレミリアは自身の力を完全に使い熟し、紫と同じ位強くなった。

諏訪子は僕の神力の修行のときに一緒に妖力の使い方を修行した。

諏訪子は僕の影響で妖力が使えるようになっていたので、正直言つてスペック的には僕の上位互換みたいなバグキャラと化している。

ちなみに僕の家族の強さは僕 \ll クラン \cong 諏訪子 $>$ レミリアつて感じだ。

諏訪子と戦うと2 \sim 3回に1回は負ける。

今は経験とか剣の腕とかで勝っているが、諏訪子は僕よりスペック高いからそろそろ負けそう・・・。

へお兄ちゃん、諏訪子お姉ちゃんのお尻に敷かれそうだね☆

うん。

諏訪子とレミリア守りたいのもっと頑張ろう。

霊夢と『烏』と魔理沙と早苗は良きライバルになって切磋琢磨してる。

以外だったのは早苗が強くなりたいと言ってきたことだ。

どうやら霊夢の活躍を聞いて中立にはなれないが人の役に立ちたいと思つたらしい。

早苗は翡翠の子孫なので才能はあった。

まだまだ荒削りだが持っていた【奇跡を起こす程度の能力】も相まって結構強くなっている。

今僕は、博麗神社で早苗と霊夢の訓練を見ている。

「はあっ！秘法「九字刺し」！」

「甘いわね、早苗！「夢想封印」！」

「え？ヤバっ——」

ドカンッ!!

「——きゆう。」

霊夢の放った「夢想封印」によって早苗が吹っ飛んだ。
いつ見ても霊夢の「夢想封印」って封印っていうより封殺って感じだよね。
少しして霊夢が降りてくる。

「師匠、どうだった？」

「うん。前よりも技の速度が上がってるね。」

「よしっ!」

「ぐえ。」

吹っ飛んだ早苗が落ちてきた。

が、少し不味い姿勢でピタンッと大きな音を立てた。

「……。」

「取り敢えず早苗の手当をしようか。」

「ええ……。」

その日は早苗を僕が神社に連れ帰ることでお開きになった。

まあ『鳥』に運んでもらったんだけどね。



「お帰り、黒。」

「ただいま。」

早苗を神奈子に預けた後、僕は湖の家に帰宅した。

最近レミリアもちよくちよく此方に泊まりに来ている。

今日はレミリアは用事があつて来ていない。

どうやら湖の畔に僕達が一緒に住めるような屋敷を造る準備に奔走しているらしい。

・・・言ってくれれば手伝ったのに。

へお兄ちゃんは乙女心がわかってないなあ。・・・まあお兄ちゃんだしね☆

クラン、酷くない？

〈あはっ☆〉

そんな事を考えながら夕飯の準備をする。

諏訪子とレミリアと結婚したことで、守矢神社ではなく基本的に湖の家で暮らす様になった。

諏訪子に神社の神様としてどうなのかと聞いてみたが幻想郷で新たに信仰を集める時に表向きの神の立場を神奈子に譲つたらしい。

信仰が消えたら消滅しないのかと焦ったが諏訪子によると僕の影響で柏手様への信仰（柏手様は魔道、霊術の祖となので魔法使いと霊術使いからの無意識の信仰が入っている）と僕という楔が有るため不滅なのだとか。

・・・もう僕より強いのでは？（汗）

そうしていると夕飯が出来上がった。

最近紅魔館で咲夜に料理を教えたりもしているので僕自身の料理の腕も上がっている。

結構料理は好きだ。

諏訪子やレミリアの美味しそうに食べる顔が見れるしね。

へ・・・ワタシは？

もちろんクランも入ってるよ？家族だしね。

「クラン、出ておいで。ご飯にしよう。」

「うん！今日はどんなの？」

「あ、私も気になる！」

「最近はずかしくなってきたからお鍋だよ。」

「やったー！お鍋だ！」

「ほら、座って。」

「うん。」

「はい。」

皆で手を合わせる。

「「いただきます。」」

皆で鍋をつつく。

うん。

今日も美味しくできてる。

魔理沙から貰った茸（8割は食用では無かった）もいい味だ。

・・・後で頑張っているレミア達に差し入れでも持つて行こう。

そうして時間は過ぎていく・・・。



克蘭が僕の中に戻ったあと、僕と諏訪子は湖の家の縁側で酒を飲んでいた。

「こうしていると昔を思い出すね。」

「うん。そういえば翡翠に言われてお祭りに行ったこともあったつけ。」

「あー。あの時の諏訪子も綺麗だったなあ。」

「あーうー。恥ずかしいよ。．．．そういう黒だつて格好良かったよ。」

「そう？（照れる諏訪子も可愛いな。）」

「うん。黒は今も格好良いよ。．．．あれ？」

「どうしたの？」

「昔で思い出したんだけど、そういえば黒に私の分霊を渡したけどどうなったんだろう？」

諏訪子に言われて存在を思い出した。

・・・諏訪子が居るし、色々ありすぎて存在を忘れてた。

僕は自身の中から諏訪子の分霊を取り出す。

出てきたのは、太陰太極図のような黒と白の玉だった。

霊夢が使う陰陽玉に似てるな。

「……………」

「諏訪子、貰ったときって蛇だったよね？」

「……………うん。何か凄い力を感じるね。」

「うん?もしかしてこれ、僕の魂が混ざってる?」

よく見ると白い部分に諏訪子の、黒い部分に僕の力を感じる。

・・・何となく諏訪子に持っておいて貰った方が良い気がする。

久し振りに勘、というか能力が発動したな。

よし、諏訪子に持つておいて貰おう。

「諏訪子、これは諏訪子が持つておいて。」

「?わかった。」

諏訪子は陰陽玉モドキを何時も首から下げている懸守りに仕舞った。

よし、これでこの話はお仕舞い。

諏訪子と飲み直そう。

「よし、気を取り直して乾杯しよう！」

「うん！」

「乾杯！」

〜

「愛してるよ、黒。」（抱き締め合いながら）

「諏訪子、愛してる。でもさ、こういう時ぐらい噛むの止めませんか？」（もう既に噛まれた）

「やだ。」（噛みつく）

「……しようがないなあ。（諏訪子可愛い過ぎかよっ!!）」（重症）

10 「酒と鬼と宴」

冬が明けた。

冬が長引いたり、紅い霧が立ち込めたりはせず何事もなく春になった。

最近の趣味は散歩だ。

今日は朝から妖怪の山を散策している。

〈お兄ちゃん、なんで今日は何時も歩いてる妖怪の山なの？〉

うーんとね何か良い出会いがあるって勘で。

〈お兄ちゃんは白い悪魔を駆る天パの同類・・・？〉

いや、背中に目なんて着いてないし脳波コントロール兵器なんて持ってないし。

〈でもお兄ちゃんや霊夢さんはおんなじ様なことできるよね？〉

・・・。

〈お兄ちゃんは即席の式で、霊夢さんは陰陽玉でフア●ネルみたいなことできるよね。

しかも二人共勘が鋭い。ほら、ニュータ●プじゃん。〉

一応聞くけどその知識は何処から？

〈お兄ちゃんの記憶！〉

はあ。

・・・もしかしてクランの二丁拳銃のガンカタのモデルって。

〈神殺しの魔王様だよ！〉

・・・

拜啓天国の母さんへ。

妹がマンガやアニメに影響されています。

どうしたらいいですか？

〈そっういえばお兄ちゃん、現実で神様と吸血鬼の嫁がいるってアニメみたいじゃない？〉



そうやってクランと雑談しながら散策をしていると、不思議な気配を感じた。

振り向くと、後ろにあった木の上に二本の大きな角を持った少女が腰掛けていた。

「おい、人間。こんなところに居たら妖怪に襲われるよ。」

「うん。心配してるれてありがとう。まあこれでも腕は立つから逃げるくらいはできるんだ。君は？」

「あつはつは！鬼の前で逃げるくらいはできるって?!しかも嘘が無いときた！あんた面白いね！私は伊吹萃香いぶきすいか。あんた、名前は？」

「あー。何個か呼び名は有ったけど今の僕は出雲 黒。それ以上でもそれ以下でもない只の黒さ。よろしく、萃香。」

彼女を見て、ふととある少女を思い出した。

萃香は鬼で彼女とは違う。

だけど、寂しそうな魂が重なって見えた。
うん。

只の自己満足だけど。

僕は着物の袖口から瓢箪を取り出して言った。

「萃香、一緒に酒を飲もう。」

「はい?」

「うん? お酒嫌い?」

「いや、好きだけどさ。なんで鬼の私と?」

「偶には人と飲みたいと思つてね。自分のはあるから一緒に飲まない?」

「……(嘘は無いね) 良いよ飲もう!」

僕は萃香の横に腰掛ける。

そうして酒を飲む。

それから墨は萃香の話聞いた。

真剣勝負が耐えかねた仲間が地底に去つたこと、何時もは人々の宴会を見ながら酒を飲んでいること、宴会が昔より少なく退屈していたこと。

萃香はそういった話を嘘が無く酒を飲もうと言った僕に気紛れに話す気になったらしい。

萃香の話が一段落したところで僕は言った。

「萃香、乾杯しよう！僕と萃香の出会いに！」

「お、いいね。私と黒の出会いに！」

「乾杯!!」

多分、5〜6時間は話していたと思う。

もう昼時は通り過ぎているが何か食べよう。

「萃香、つまみを用意しようと思うんだけど何か食べたいものとかある？」

「うーん。じゃあ、黒が普段つまんでるものを。」

「わかった。えーっと確かここらへんに……。」

僕は背囊を漁る。

確か前作ったビーフジャーキーモドキが残ってたはず。

あった。

僕は軽く包んであったビーフジャーキーモドキを取り出して萃香と僕の間には置いた。

「おお。これは見たことがないね。干し肉の類かい？」

「うん。僕が趣味で作ったんだ。どう？」

「美味しい！」

「それは良かった。」

まだまだ酒は残ってるし時間はある。

僕と萃香は夕日が沈むまで飲んで話した。

日が沈んだ後、そろそろ帰ろうかと立ち上がり僕は言った。

「そうだ、萃香。また来るよ。今度は萃香が宴を始めたらいいじゃん。その時は僕を呼んでくれ。君の飲み仲間、いや友達としてお邪魔するからさ。」

そう言うのと萃香は目を見開き驚いて、その後満面の笑みで言った。

「鬼にそんな事を言った奴は黒が初めてさ。気に入った！気に入ったよ黒！オマエは今から私の友達さ!!自分で始めるのも悪くはなさそうだ！次はとびっきりの酒を持って来るよ！」

「うん！じゃあ、また今度！」

「気を付けて帰れよ〜！」

そうして僕は湖の屋敷に帰った。



暫く飛んで守矢神社の反対側にある湖の屋敷に着いた。

この屋敷はレミリアが僕と諏訪子の要望を聞いて建てた僕と諏訪子とレミリアが住んでいる屋敷だ。

外見はどちらかという和風にして貰った。

本当は僕の実家を持ってきたかったのだが現世で探したら竹林とかを含めた土地がまるっと消えていたためこういう外観にして貰った。

中は普通の屋敷と同じ位の広さで使われてない部屋が結構ある。

レミリアは紅魔館やこの湖の屋敷を行き来しながら生活しているので咲夜が偶に掃除してくれている。

レミリアが行き来しやすいように屋敷の庭に紅魔館の庭と繋がっている門があるため、偶に紅魔館の住人が遊びに来ることもある。

風呂もあり、台所もあり、大きな居間があるのでとても生活しやすい屋敷だ。

レミリアには感謝と愛しかない。

諏訪子も気に入ってるようでレミリアに感謝していた。

因みに僕の部屋は諏訪子とレミリアの部屋も兼ねているため結構広い。クランは僕の中で寝ているので部屋は無い。

僕が私物とか置けた方が良いからと勧めたがどうやら僕の中は快適らしく能力でも仕舞えるので要らないとのことだ。

・・・僕の中は一体どうなってるんだろう？

そうして屋敷の庭に入ると諏訪子が飛びついてくる。

「黒ーお帰り！」

「ただいま、諏訪子。」

「あれ？黒、何かお酒臭いよ？」

「ああ、ちよつと友達と酒を飲んで来たんだ。」

「・・・（浮気ではなさそうだね。）そっか。後で私とも飲もう！」

「うん。取り敢えずご飯の後でね。」

「あ、今日は黒が遅かったから私が作っておいたよ。」

「そうなの？ありがとう。それは楽しみだ。」

そうして僕と諏訪子は手を繋いでレミリアの待っている屋敷の中に歩いて行った。

・・・その後、酒とワインで酔った諏訪子とレミリアによつて貧血になったのはご愛嬌だ。

くく

次の日の朝。

「お兄ちゃん、昨晩はお楽しみでしたねってやつだね！」

そのネタは何処から？

「フランに教えてもらった！」

フラン、クランに何を教えてるんだ?!

——そんな日常の一幕。

11 「宴だ宴！」

朝、湖の畔を散歩していると後ろから最近出来た友達——萃香の気配がした。

「おはよー。」

「ああ、萃香。おはよう。」

「・・・。」

「どうしたの？」

「ふつー驚くところじゃない？」

「いや、後ろから萃香の気配がしたからね。」

「黒、あんた私の気配が読めるのか？」

「うん。」

「それは凄い。少し黒の腕に興味が湧いたね・・・。」

あ、そういえば鬼ってバトルジャンキーだった。

・・・まあいいか。

「そうだ、黒。前言ってた宴会を開こうと思うんだけど何処がいいと思う？」

「うーん。無難に博麗神社とかかなあ。彼処なら最悪の場合顔が利くし人妖問わず集まれると思う。」

「よし、そうしよう！よいしょつと。」

「・・・えーつと萃香？なんで僕を担いでるの？」

「ん？今から行くからだけど？」

そう言うのと萃香は僕を担いだまま跳躍した。
うわあ・・・凄いで速度で景色が流れてくなあ。

「黒、あんた結構余裕だね？」

「うん。やろうと思えばこれくらいは出せるし。」

「・・・まあいいや。そろそろ着くよ。」

萃香は博麗神社の境内に着地した。

うーん。

向こうに箒が立て掛けてあるからまだ霊夢は寝てるな。

すると萃香はぴよんと跳び上がり神社の屋根の上に上がった。

ようやく降ろしてもらえたよ・・・。

「よし、始めよう！」

すると萃香は瓢箪から少し酒を口に含み、ふうと吹いた。

萃香の吹いた酒は霧になり、拡散していった。

暫くして神社に人や妖怪が集まり始めた。

「萃香、これは？」

「私の能力で萃めたのさ。そろそろ始まりそうだし私達も飲もう！」

「あらかじめ用意しといて良かったよ。えーっと、はい。」

僕は背囊から古い瓶を取り出して萃香に渡す。

「これは？」

「とっておきの秘蔵のお酒。確か二千年前の酒だったはず。ブルーウイッツユっていうんだけど友達が出来たら飲もうと思ってたんだ。」

萃香は瓶を開けて匂いを嗅ぐ。

「おお。こんな良いやつ開けて良かったの？」

「うん。これ以上保存しても腐らせるだけだし、萃香と飲もうと思つて背囊に入れていたんだ。」

「じゃあこれを開けたら私の持つてきた酒を飲もう！」

僕と萃香はそれぞれの盃に透き通つた薄い銀色の酒を注ぐ。

「そういえば黒。なんで透明なのに青いブルーウイッツユ願いつて言うんだい？」

「ああ。ちよつと盃を傾けてみて。」

「こうかな?・・・おお。」

少し盃を傾けると透き通った薄い銀に青空が映り込み、酒が青く見える。萃香はそれを見て目をキラキラさせている。

「これは僕がまだ旅をしていた時に貰ったお酒だね。どうか青空の下で飲みたいっていう願いを込めて造られた酒なんだ。まあ、これの由来を知ってるのはもう僕だけだと思うしブルーウィツシユもコレが現存する最後の一本だよ。」

「へえ。確かに今にピッタリだね。」

萃香は空を見上げて言う。

空は雲一つない青天だ。

下もどんどん賑やかになってくる。

すると萃香が此方に向けて少し盃を掲げる。

「よし、私達の友情と青い空に！」

「うん。僕達の友情と青い空に！」

「乾杯!!」

僕と萃香は盃を打ち合わせた。

それと同時に博麗神社での宴も始まった。

あ、諏訪子とレミリアに何も言わずに来てしまった。

ヤバっ。

・・・まあ、いいか。



あの後、ブルーウィッシュを開けた僕達は萃香が持って来たどびつきりの酒（普通の

人間が飲んだら即死）を飲んだり、下でやっている宴会の料理を二人でつまんだりして楽しんで。

今は屋根の上に腰掛けて萃香と下らない事を話したりしている。

萃香が一番驚いたのは嫁が崇り神と吸血鬼なことだった。

萃香曰く「びつくりだよ！」とのこと。

偶には宴会もいいよね。

因みに『烏』を呼んで諏訪子達に博麗神社での宴会に居るといふ伝言を頼んでおいた。

いやあ、安否不在は不味いでしょ。

クランは今下で料理を食べている。

『烏』によるとそろそろ諏訪子達も来るらしい。

噂をすれば。

「黒お〜!!」

空から諏訪子が降ってきた。

僕は諏訪子を優しく抱き締める。

「心配したんだよ？何か言うことは？」

「・・・すいません。」

「よろしい。」

「黒、尻に敷かれてるねえ。」

その後、レミリアも突撃してきて大変だった。

萃香と諏訪子達はあつという間に仲良くなっていた。

類は友を呼ぶってやつかね。（諏訪子は^{大酒飲}ウワバミ）

そうして僕と萃香に加えて諏訪子とレミリアで屋根の上で酒を飲む。
暫くすると霊夢が現れた。

「あんたがこの異変の黒幕ね！って師匠?!」

「黒って博麗の巫女の師匠だったの？」

「うん。ちよつとした知り合い経由でね・・・。」

「・・・おい、師匠酔っ私と其処共の鬼。説明位しなさいよお!!」

その後、無視されてちよつと涙目になった霊夢にお祓い棒（僕謹製）で叩かれて屋根の上に正座する羽目になった。

そうして後に春宴異変と呼ばれる異変？（死傷者0名、二日酔い多数、後片付けで霊夢がダウン）は博麗の巫女により無事に解決された。

因みに諏訪子とレミリアはいつの間にか下に避難していた。
解せぬ。

1 2 「明けない夜に」

あの萃香との宴（春宴異変と呼ばれているらしい）から少しが経ち、秋が来た。因みに萃香は湖の屋敷に住み着いている。

どうしてかというところが家がないといったので余ってる部屋あるし来る？みたいな感じ
で僕が提案したからだ。

何か諏訪子達からは門番みたいな扱いだけど堀の上で酔っ払ってるだけでは？

まあ、困ることもないし賑やかだからいいか。

そんな事を考えながら縁側に座っていると空の真ん中にずっとある月を見て萃香が
言った。

「黒、何か変じゃないか？」

「どうしたの萃香？」

「月に違和感があるんだよ。」

「ああ、確かに。感覚的には朝だしね、今。」

そうなのだ。

今は現実で言う8〜10時付近。

今は日が昇っていないとおかしい時間帯だ。

まあ諏訪子とレミリアは寝ているが。

うーん。

「ねえ、萃香。あの月ってどう見ても偽物だよね。」

「だろうねえ。」

「しかも満月だ。不味くない？」

「不味いね。私達クラスなら少しの不快感で済むけど中級妖怪なら暴走してもおかしくない。」

「うん。異変だよねコレ。」

「うん。黒はどうするんだい？」

「うーん。このままだと色んなところに被害とか出そうだし、何より人里で中級妖怪が暴れたら大変だ。一応人類の守護者として動かなきゃなあ。」

「・・・黒って人類の守護者だったのかい。あんたますます謎が深まるね。」

「あ、人類の守護者と言っても見守る寄りなんだけどね。この幻想郷には人里にしか人類が居ないから動かざるを得ないんだ。」

「結構大変なんだね、人類の守護者って。」

「うん。返上したい。」

「あつはつは！そんなんで守護者してていいのかい?!」

「僕はどこぞの弓兵みたいに望んで成ったわけじゃないからね。」

守護者とは人類の滅亡を防ぐ抑止力のような存在だ。

細かいところは省くがアニメの台詞を借りると人類の滅亡の要因を排除する掃除屋ってとこだ。

この幻想郷は現世と結びつきはあるが独立した世界だ。

なので人里への被害は人類滅亡の要因になる為守護者が動かざるを得ない訳だ。

「よし、萃香。僕は少し行って解決してくるよ。萃香は屋敷を頼める?」

「おー行ったら。私は月見酒でもしながら解決を待つてるよー。」

そうして僕は萃香に屋敷を任せて白黒の着物のまま飛び立った。

うーん。

取り敢えず霊夢と合流しよう。

きつと紫も動いてる筈だ。

僕は霊術で紫と霊夢を探す。

——二人共博麗神社に居るな。

神力を使い、柏手を打つ。

空間を歪めて博麗神社の境内に繋げる。

賽銭箱の前で二人が話しているのが見えた。

「やあ、霊夢に紫。状況は把握してる?」

「ええ、把握してるわ。やっと来たのねクロ。・・・いえ、今は人類の守護者と呼んだ方が良いかしら?」

「うーん。未だ異変解決を手伝いに来た柏手様ってどこかな。」

「なるほどね、未だ明確には成ってないってことね。」

「どういこと?」

話について行けない霊夢が聞いてくる。

「霊夢、簡単に言うとお守護者は確定した滅びの要因を消す存在よ。クロが未だ柏手様として来ているのなら未だ猶予はあるということよ。」

「へえ。妖怪が偶に言ってた守護者ってそういうモノだったのね。しかもそれが師匠だったとはびっくりね。」

「それで紫、犯人の目星は？」

「ええ、奴らは迷いの竹林に居るわ。」

「迷いの竹林？（もしかして・・・）」

「紫、それって人里の外れの方にあるやつかしら？」

「ええ、そうよ。取り敢えず向かいましょう。」

紫は大きめのスキマを開く。

うへえ、何度見てもスキマの中の多数の目には慣れない。

霊夢と一緒にスキマを通り抜けると覚えのある結界が張り巡らされている竹林の前に出た。

「紫。」

「どうしたのかしら？」

「この竹林って随分前から幻想郷にある？」

「ええ、そうだけど？」

「どうしたの師匠？」

「あー。この迷いの竹林って大昔に僕が作ったんだ。」

「「え？」」

「僕の屋敷を守る為に結構頑丈な結界術を使ったのに無くなったのかと思ってたら幻想郷にあるとはね。」

「・・・クロ、ごめんなさい。この竹林には永遠亭の奴らが住んでいるわ。クロのだとは知らなくて。」

「あ、別に大丈夫だよ。屋敷が無事なら儲けものみたいなものだから。誰が住んでいようとか関係無いよ。」

「そう。ならいいわ。」

「そうだ紫。犯人ってこの竹林の真ん中の方に居る？」

「・・・?ええ。」

「よし、それなら直ぐだ。着いてきて。」

僕は竹林の結界術に組んでおいた中心部への近道を進む。

そうして歩いていると大きめな建物が見えてきた。

ん?

落とし穴がある。

・・・仕掛け人は其処か。

僕は軽くそちらの方に拘束用の札を投げる。

「うわ!なんだよこれえ?!」

そこには小学生位のウサギ少女が居た。

ウサギ少女はジタバタと抜け出そうとしている。

「君がこの落とし穴を?」

「そうだけど、はーなーせー!!」

「君はなんでここに？」

「はんっお師匠様のところには行かせないもんねー!!鈴仙!!」

そうウサギ少女が言うと物陰から赤い目をした高校生位のウサギ少女が出てきた。

「言われなくとも!!【赤眼催眠】!!」

「効かん。」

「え？」

「寝てろ。」

僕は拍手を打ち、ウサギ少女の意識を刈り取る。

それにしても、今の【赤眼催眠】とか言うのは僕が相手じゃなければ十分脅威になりそうだ。

「紫、霊夢。無事？」

「ええ。」

「師匠こそ無事なの？」

「まあ、僕に催眠とかは効かないからね。取り敢えずあの建物にお邪魔しよう。」

僕達はその建物——永遠亭に入っていった。

「紫、犯人の素性は？」

「なんで異変を起こしたかは知らないけど月の賢者よ。」

「月の賢者がなんで幻想郷に？」

「昔に色々あつて隠居してるのよ。」

暫く永遠亭の廊下を歩いていると違和感を感じ始めた。

おかしい。

うーん。

これ、位相をずらしたスキマの中みたいになつてる。

・・・月の賢者の名は伊達じゃないってことかな。

何か覚えのある気がする気配に近づいて行つてる。

「紫、霊夢。そろそろご対面かな。」

「ええ。霊夢、準備はしておきなさい。」

「言われなくとも終わらせてあるわ。」

すると廊下が崩れ去った。

周りは宇宙だ。

〈あはっ綺麗だね!〉

綺麗だけど本物じゃない。

あくまで宇宙を模した異空間ってところかな。

僕は空間?を飛んで紫達を見る。

紫達は無事みたいだ。

前を向くと其処には偽りの月を背に見覚えのある赤青の服をきた××——永琳が立っていた。

「此処は私がすり替えた偽りの月との狭間。永遠亭を見つけられてしまった以上、只では返しません。」

「貴方が月をすり替えた犯人ね!私は博麗の巫女!大人しくお縄に付きなさい!」

あれえ?

僕って空気？

永琳さんや、もしかしくとも気付いてない？

〈お兄ちゃんもゆかりんも空気だね！〉

・・・泣くよ？

〈道士服着てないからわかりずらいんじゃない？〉

確かに。

そんな事を考えている間に戦いは始まってしまったようだ。

霊夢が押されてる。

流石に僕の知り合いの中で一番の年長の相手は重いなあ。

紫に知り合いなので止めてくると伝えて霊夢の元へ向かう。

「くっ「夢想封印」!!」

「甘いですね、落ちなさい！」

永琳が大量の弾幕を霊夢に向けて放つ。

はあ、撃ち落とそう。

僕は神力を使って柏手を打ち、弾幕をかき消す。

「はい、そこまで！」

「師匠?!」

「誰だ?!」

「・・・永琳。久し振りだね。」

僕はまだ僕のことかわかってない永琳に声をかける。

「まさか、黒?!無事だったの?!」

「うん。クレーターの中で数百年程寝る羽目になったけどね。」

「師匠、知り合いなの？」

「うん。永琳、取り敢えず落ち着いて話をしよう。異変を起こした理由があるっぽいし、聞きたいこともあるしね。」

「・・・いいわ。」

その後僕達は永琳の案内で永遠亭の居間に通された。

何ていうか似てるなあ。

永琳を待っている間に霊夢と紫が聞いてきた。

「師匠、あいつとはどんな関係?」

「黒、クレーターってどういうこと?」

「えーつとね永琳は大昔に妖怪に襲われてたのを助けたんだ。その後永琳の所で家政婦して、月の民を守るために妖怪と戦ってたら爆殺されかけた。」

「……。」

「師匠、ツツコミどころが多すぎて何処から突っ込んだらいいかわかってない。しかも紫なんて絶句してるわよ。」

「まさか黒が月の民が言ってた今は亡き大英雄だったのね。」

「はい？」

「そうよ。」

話していると永琳がお盆を持ったウサギ少女を連れて現れた。

「永琳、今は亡き大英雄ってなに？」

「黒のことよ。ツクヨミ様が黒のことを伝えた結果生まれた言葉ね。黒の慰霊碑立ってるわよ……。」

「……一つ聞いていい？もしかしてあの爆発って月の民は知らないの？」

「……ええ。犯人はツクヨミ様よ。」

「は？どういうこと？」

僕は驚き、紫と霊夢は完全に観戦モードだ。

「黒を恐れて殺せる内に殺そうとしたそうよ。この事実を知っているのは私とツクヨミ様以外はいないわ。」

「……。」

「月の民に代わって貴方に感謝と謝罪を。」

「永琳、ツクヨミがやったことだ。月の民には関係ないから謝罪は要らない。感謝だけ

で十分だよ。」

「・・・そう。」

「で、永琳。なんで月をすり替えたの？」

「姫様のためよ。」

「姫様？」

「ええ。姫様を月に連れ戻されないように月をすり替えて道を塞ぐ必要があったの。」

それから永琳から月をすり替えた理由を詳しく聞いた。

要約すると地上を好きになったかぐや姫が月に連れ戻されそうだったので阻止したということらしい。

紫によると幻想郷を形作る博麗大結界は月の民でも通り抜けられないらしい。

あらら、永琳の取越苦勞つてことか。

その後、永琳に月を戻してもらい話をした。

永琳も好きで隠居していた訳では無いらしく診療所を開くとか。それから少し経って竹林の中に診療所が開くことになったとさ。

13 「墓参り」

あの永琳が起こした異変が解決してから一月程が経った。

その一ヶ月の間に稗田阿求の取材を受けたり、永琳に会いに行ったり、紫と修行したりして過ごした。

今日は紅とアカコの命日（月の満ち欠けと季節から換算）だ。

我ながらよく憶えていたなと思う。

今日は最近見つかった屋敷に諏訪子とレミリアと一緒に墓参りに行くことになっている。

「黒、準備出来た？」

「うん。出来たよ諏訪子。」

「ぎゃっ」

「レミイ?!」

向こうから着物に着替えていたレミリアの悲鳴が聞こえたので着替え終わった諏訪子とレミリアの元へ向かった。

すると其処には帯を踏んで転んだと思わしき状態のレミリアが涙目でうつ伏せになつていた。

「うう・・・黒お。」

「レミイ、無理して一人でやらなくても良かったのに。ほら。」

僕はレミリアの着物を着付ける。

何故諏訪子とレミリアが着物を着ているのかというと「結婚報告もしたいから黒みたいに着物で行こうかな」と諏訪子が言ったのにレミリアが乗つかったからだ。

諏訪子は紫色、レミリアは赤色の着物を着ている。

因みに僕は最近の普段着である白黒の着物に道士服の前掛けだけを掛けた服装だ。

「諏訪子もレミイも綺麗だね。」

「ええ、そうでしょう！」（涙目）

「黒も格好良いよ。」

「ありがとう。よし、行こうか。」

「うん。」

「ええ。」

湖の屋敷から出ると萃香が話しかけてきた。

「あれ、どこ行くんだい？」

「ちよつと母と姉の墓参りにね。萃香も来る？」

「うーん。私は今度でいいや。今回は愛する嫁2人と行ってきなよ。」

「うん。じゃあ家を頼むよ。」

「あいあいさ〜。」

萃香が飲み始めたのを視界の端に僕達は出発した。

因みに『鳥』は今は守矢神社に住んでいるらしい。

・・・手伝いで早苗とお揃いの服着てたのを見た時はクランと笑った。



そうして僕が張った迷いの結界を通り、懐かしい屋敷に着いた。

結界のお陰か屋敷は古びているが原型を留めている。

あー結界で時間まで曖昧になってたのか。

僕は屋敷を見上げている諏訪子達に声をかける。

「諏訪子、レミイ。此処が僕の実家だよ。母さんと姉さんの墓は庭にあるんだ。入ろう。」

「お邪魔します。」

「お邪魔するわ。」

門を通り抜け、庭の端に向かう。

其処には名前が刻まれた三つの墓石があつた。

諏訪子が三つの墓石を見て尋ねてくる。

「ねえ、黒。この人たちを紹介してくれないかな？」

「うん。右端が姉の紅、真ん中が母のアカコ、左端が会ったことのない父のトウマさんの

墓だよ。紅は何というか活発な美少女って感じで僕の名付け親だ。」

名付け親の部分でレミリアが疑問を呈した。

「黒、名付け親ということは黒は血の繋がった家族では無かったのね？」

「うん。諏訪子には軽く話したことがあるかもしれないけどレミイには話したことがなかったね。僕は寂しかったんだ。」

「寂しい?..」

「...少し昔話をしようか。僕はずっとずっとずっと気の遠くなるような昔に生まれた。今ならわかるけどその時の僕は名前が無い上に「ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力」が原因で誰にも認識されることが無かった。

殆ど憶えてないけどそれから僕は僕を認識できる存在を探して彷徨った。まあ軽く数万年以上経った頃位にアカコ——母さんに会った。

母さんは人間と駆け落ちした当時最強の妖怪だったんだ。母さんは僕に娘の家族に

なつて欲しいって言つてね。僕は寂しさがどうにかなるなら良いかと30年待った。

そうして紅に「出雲 黒」っていう名前を貰つて彼女の弟に成つた。

それからは母さんに料理や術を習つたり、紅と遊んだりして充実した幸せな時間だった。そうしてある日——60年が経つた頃に母さんが亡くなつた。

まあ、墓を作つてお別れも済ませた。

でも、それから丁度一年後に紅が不治の病で死んでしまつた。」

諏訪子とレミリアの息を呑む音が聞こえた。

「その時に僕は紅の全部を貰つた。肉体も、能力も、経験も、そして願いも。その後僕は100年修行してその願いを叶える為に僕は旅に出たんだ。でも紅の願いは本人の意思とは関係無く呪いに成つた。」

「黒……。」

「まあ、諏訪子とレミリアに逢えたからちよつぴり呪いには感謝してるよ。」

「私も黒と出逢えて良かったよ。愛してる。」

「私もよ、黒。愛してるわ。」

「僕も愛してる。」

少しイチャイチャ？した後、僕達は墓に向き合つて姿勢を正した。

「母さん、紅、僕は今幸せだ。愛する人たちが出来て結婚もしたんだ。色々あるけど楽しく過ごしてる。だからどうか安らかにお眠りください。」

すると諏訪子とレミリアが墓に向かって話し始めた。

「えーつと。義母さん？と義姉さん？黒と結婚した洩矢諏訪子です。黒を育ててくれてありがとうございます。黒は私達が幸せにします。どうか安らかにお眠りください。」

「私は黒の伴侶になったレミリア・スカーレット。旦那様は私達が幸せにします。黒の

家族の皆さん、どうか安らかにお眠りください。」（流石に敬語モドキ）

——ええ。私の息子を頼みます。

「「!」」

ふと母さんの声が聞こえた気がした。

諏訪子とレミアもなのか僕達は無言で墓に頭を下げた。

その後僕は背囊に仕舞ってあった花を墓前に供えた。

そうして僕達の墓参りは終わった。



side : ■の■者&■の狂■

「僕が過去に飛ばされてからどれくらいが経ったかな。ねえ□□□、今はいつだと思う？」

「うーん。ワタシの気配を感じるから少なくとも春雪異変は終わって諏訪子お姉ちゃん
とレミリアお姉ちゃんが結婚したぐらいじゃない？」

「そっか。．．．やつとここまで戻って来たんだ。」

「お兄ちゃん．．．。」

「ああ、そういうえば友が言ってた悪魔に気を付けろってこのことを示唆してたのか。
まったく友には頭が下がるね。」

「約束の時はそろそろだね。」

「うん。そのために博麗大結界に細工をしなきゃなあ。」

へもしかしてあの時ゆかりんが言ってた大結界の違和感ってワタシ達の細工じゃない？
↓

「おお！つてことはシンシアが言っていた事にも信憑性が出てくる。・・・じゃあ、もう少ししたら逢えるのかなあ。」

へうん！きつと逢えるよ！！彼奴等にぎやふんつて言わせてやろうよ！
↓

「うん。もうひと踏ん張りだ！」

今章の設定？

名前：出雲 黒（イズモ クロ）

種族：何者でもないバケモノ（詳細不明）

容姿：黒髪短髪、水色の瞳、中性的な好青年

能力：【ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力】

説明：主人公。クランドールを中で飼っている影響でクランドールの能力が使用可能。永い時を生きているバケモノ。気紛れに人助けをしていた為に『柏手様』としての神性を獲得した。霊術と魔法の祖（創設者の師匠）。理由は不明だが不滅。諏訪子とレミアと結婚した。弟子は沢山居るが友人は少ない（黒の友人：かつて聖人だった友、永琳、萃香）。

名前：洩矢 諏訪子（モリヤ スワコ）

種族：土着神（白蛇）

容姿：金髪ロング、水色と金色のオツドアイ、スレンダーな美女

能力：【坤を創造する程度の能力】

説明：ヒロイン。作中で一番（性格的に）ヤバい。黒と結婚するときに黒を独占する方法を考えていた。レミリアにより微妙に丸くなった。黒と少し混ざっている為、黒の能力が使える。黒が存在する限り消滅することは無い。最近、黒と互角に戦えるようになった。紫の胃痛の種。黒にはべた惚れのチョロイン（+微ヤンデレ）。

名前：レミリア・スカーレット

種族：吸血鬼モドキ（真祖？）

容姿：青っぽい長髪、紅い瞳、傾国の美女

能力：〔運命を操る程度の能力〕

説明：作者友人の「現実には結構ハードだから創作の中はハッピーエンドの方が良い」という声によりヒロインへ昇格。地味に能力を完全に使えるようになった。諏訪子とは親友。黒曰く魂は高潔で無邪気。最近は諏訪子と協力して黒を吸血している。黒と結婚した後は紅魔館と湖の屋敷を行き来して生活している。

名前：出雲 クランドール（イズモ クランドール）

種族：何者でもないバケモノ（吸血鬼？）

容姿：黒髪サイドテール、水色の瞳、美少女

能力：〔ありとあらゆるものを曖昧にし破壊する程度の能力〕〔運命を読む程度の能力〕
 説明：主人公の妹。作中最狂。黒の狂気（数億年もの）＋フランの狂気（黒ですら手を焼く）とかいうヤバい存在。能力もヤバい。勘が鋭い者はクランドールのヤバさにすぐ気付く。飽くまでも黒の外に出ているのは分身体。正確にはクランドールは黒の多重人格の一つ。あることが起きると黒と共鳴して『終■を告げる妖■』に変化する。

名前：八雲 紫（ヤクモ ユカリ）

種族：スキマ妖怪

容姿：長い金髪、紫水晶の様な瞳、長身の美女

能力：〔境界を操る程度の能力〕

説明：黒の一番弟子。諏訪子とクランドールのヤバさに気付き日々胃を痛めている。黒のことは師匠というより父親の様に思っている。黒達に対抗出来る強さを持つ。幻想郷の管理者としての側面を持ち、常に損得を考えている自分に軽い自己嫌悪をしている。

名前：『鳥』（シヤメイマル アヤ）

種族：神使（元烏天狗）

容姿：セミロングの黒髪、赤い瞳、美女

能力：〔風を操る程度の能力〕〔誤魔化す程度の能力〕

説明：黒の式神（ペット扱い）。黒に暇つぶしの玩具として拉致られて鍛えられた。色々あつて黒を主と認め、主様と呼ぶようになる。最近では萃香と飲み友になり、よく酒を飲んでゐる。今の生活を気に入ってる。

名前：伊吹 萃香（イブキ スイカ）

種族：鬼

容姿：薄い茶色の長髪、紅い瞳、二本の捻れた大きな角を持った美少女

能力：〔密と疎を操る程度の能力〕

説明：黒の友達。湖の屋敷の住人。紫曰く存在自体がインチキと言わしめる程の強さを持つ。黒のことは結構気に入っている。最近では湖の屋敷の門番みたいな扱い。湖の屋敷の小間使いとは飲み友。酔っ払い。

名前：八意 永琳（ヤゴコロ エイリン）

種族：蓬莱人

容姿：長い銀髪、黒い瞳、美女

容姿：不明

能力：不明

説明：■の■者と共に行動している。■の■者の理解者で協力者。同一人物が存在する模様。

第五章 「表と裏、白と黒、始まりと終わり」

1 「平穩は唐突に」

諏訪子とレミリアと一緒に墓参りに行ってから半年が経ち、冬になった。

冬の間はあまりすることがないので僕達は湖の家で過ごしている。

先週は萃香と『烏』と酒を飲み、その次の日は諏訪子とレミリアと布団でごろごろしていた。

とても良い時間だった。

〈お兄ちゃん、そろそろ現実を見ようよ☆〉

はあ。

僕は眼の前の魔物モドキに「アメノムラクモ」を振るう。

今僕は幻想郷の各地に現れたファントムを片っ端から祓魔している最中だ。ファントムは悪魔の下僕。

放置していると人の魂をファントムに書き換えて増殖して悪魔を呼び寄せようとする。

その為、エクソシストは基本的にファントム狩りが仕事だ。

今の僕はエクソシストじゃないんだけどなあ。

へでもなんでいきなり幻想郷にファントムが出てきたんだろうね。＼

確かに。

ファントムの目的は悪魔召喚だから幻想郷に悪魔が来ようとしている訳だ。でも博麗大結界はファントムでも抜けられないはず。

霊夢と紫に聞いてみるか。

そうして、ここ一帯のファントムを祓魔し終えた僕は博麗神社に向かった。

空から見下ろすと、神社の縁側で話している紫と霊夢を見つけた。

「やあ。紫、霊夢。大結界に何か異常とか無い？」

「あ、師匠。さっき調べたけど大結界に異常は無いわ。・・・大結界について聞くつてことは師匠はあの亡霊モドキの事を知ってるの？」

「うん。アレはファントムっていう悪魔の下僕。放つて置くと増えて悪魔を呼び寄せるから駆除してるんだ。」

「なるほどね。悪魔？が幻想郷に来ようとしているってわけですよ。」

「・・・クロ、悪魔の強さは？」

紫が問いかけてくる。

「うーん。ピンキリかな。弱い悪魔は早苗でも倒せるし、強い悪魔は霊夢が苦戦するかも。多いと厄介極まりない。」

「うそでしょ?!」

「それは不味いわね・・・。」

そう言った後、紫の纏う雰囲気幻想郷の管理者としてのもに変わる。

「ええ、これを異変と見做します。霊夢、いえ16代目博麗の巫女。ファントムの駆除を。・・・数が多いわ。私も動きます。クロ、手伝って貰えるかしら？」

「うん、もちろん。．．．悪魔には少し因縁があるしね。」

「クロ、元凶に心当たりが？」

紫に聞かれて血に濡れた教会とあの悪魔を思い出す。

この規模のファントムを呼び出せる悪魔はヤツしか居ない。

「うん。この規模のサバトを起こせる悪魔は『バエル』しか居ない。」



霊夢と手分けしてファントムを駆除し始めて3日が経った。

紫はスキマでファントムの集団の近くへの僕達の送迎や情報収集、大結界の管理、幻想郷全域の警戒等をしてくれたのでとても助かった。

効率の為に靈夢に靈術とは違う退魔術エクソシズムを教えたりもした。

・・・・『教会』の相伝だけでしょうがない。

〈それ大丈夫なの？〉

まあ、その相伝の技術は僕と友が体系化したものだから大丈夫さ！

〈・・・お兄ちゃん疲れてるね。〉

うん。

だってブラック企業も真つ青な労働環境だもの。

紫達に合流する前から不眠不休で祓魔してるから・・・10日は不眠不休で肉体労働
&精神労働してる訳だな。

〈ブラック企業だって週一時間は寝れるもんね。〉

いや、もう少し寝れると思うよ？

何かネットでは平均睡眠時間は3時間弱とか言ってたし。

そんな事を考えながらファントムを片付けていく。

周囲一帯のファントムを片付け終わると隣にスキマが開いて紫が出てきた。

「ごめんなさいね、クロばかりに負担が行ってしまった。」

「あーしようがないよ。靈夢は強いけど人間だ。休みは必要だし、紫だつてぜんぜん休んでないでしょ？僕は不眠不休でも動き続けられるからさ、少し休んだら？もう少しでファントムも狩り終わるし、こういう時ぐらい自分の師匠を頼っていいんだよ。」

「……ええ。お言葉に甘えさせていただくわ。」

「うん。靈夢も一緒に休ませてあげて。じゃあ僕は最後の集団を駆除しに行くよ。」

「クロ、気を付けて。」

「了解！」

そう言った後、僕は最後のファントムの集団の居場所に向かって飛んだ。

〈暇だしワタシも暴れたい!!〉

良いよー。(疲労)

「やったー!! 殺る気増々で頑張る!!」「フォーオブアカインド!!」
「「アハハハはっ!!」「」」

フランが僕の中から出てきて四人が増えて、ファントムの集団に突っ込んで行った。
うん、応援してるー。

そうして最後のファントムの集団は壊滅（地形変化付き）した。
直すの僕と紫なんだけどなあー。

うん。

帰って寝よう。

へそして諏訪子とレミリアとイチヤイチャするんだ! でしょ? へ
そうとも言う。



s i d e :
???

「ふむ。順調に奴らの視線をサバトに釘付けにできているな。アマテラス、ツクヨミ。術の準備はどうだ？」

人影の問いかけに何らかの準備をしていたアマテラスとツクヨミが答える。

「ああ、順調に出来上がっているとも。この術が完成すれば例えあのバケモノであろうと戻って来るのは無理だろう。なにせ時空の彼方へ強制的に送るのだからな！」

「ああ！これならあのバケモノでも解けない！あと少しで完成だ！」

「そうか。あとは人質でも取って奴にそれを当てるだけだな。」

人影は作業を再開したアマテラスとツクヨミに背を向けて密かに嗤う。

「くつくつく。忌々しいエクソシストめ、束の間の平穩を楽しむといい。それがお前が過ごせる最後の時になるのだから!!」

崩壊への歯車は廻り始めた・・・



——最近、嫌な夢を見る。

——黒が離れて行って手が届かなくなる。

——何故？どうして？

——私は嘆き悲しんで世界を滅ぼす。

——そんな悪夢。

—
嫌だ。

—
黒を私から奪うやつは
■
■
■
■
を
■
って
■
してやる。

2 「予感」

ゆつくりと一寸先も見えない黒色に沈んでいく。

何かに包まれている様な感覚。

——ああ、この黒色は■■■か。

■■■は負のモノだが諏訪子私が僕黒に向けた■■■の裏返しだ。

確かに■■■ほど強い呪いは無いと思う。

諏訪子私が僕黒を■■■し、僕黒も諏訪子私を■■■している。

互いに■■■し合い■■■い合っている。

嗚呼、ずっとこのまま諏訪子黒と沈んで・・・。



「ううん。」

左側に寝てた諏訪子の寝言？の声で目が覚めた。

どうやら盛大に寝こけてしまった様だ。

諏訪子を起こさないように身体を起こして胡座をかく。

〈お兄ちゃん、おはよー。〉

おはよう、クラン。

僕ってどれぐらい寝てた？

〈うーんとね3日ぐらい？〉

3日かあ・・・ファントムの気配はしないしもう少しゆっくりしよう。

〈うん！あ、諏訪子お姉ちゃんが起きそうだからワタシは引つ込むね！〉

うん・・・？

〈どうぞごゆっくり☆〉

すると左側から声が出た。

「あーうう？・・・黒だあ。ぎゅーっ。」

にへらとした諏訪子が抱き着いてくる。

可愛いです。(重症)

あ、でもこの流れて……。

諏訪子が僕の胸に顔を埋める。

「すんすん。」

「えっと諏訪子？」

諏訪子が僕を押し倒した。

「黒、とつても美味しそう。」

諏訪子が僕の首筋に口を近づける。

——かぶっ

そういえばレミリアの吸血は牙で血を吸うけど諏訪子は歯を立てて傷をつけて出た血を飲んでるから傷が大きめなんだよなあー。

あ、そもそも諏訪子は吸血鬼じゃなかった。

〈お兄ちゃんを食べようとしてるんじゃない？ 諏訪子お姉ちゃんは蛇だし。〉

そーかもー。(貧血)



居間で諏訪子を膝に載せながら座っている。

暫くしてお盆を持ったレミリアが現れた。

「黒、おはよう。」

「レミィ、おはよう。あれ？手に持っているそれは？」

「黒のために作った朝餉よ。いるかしら、旦那様？」

「もらうよ。ありがとう、レミィ。」

レミリアからお盆を受け取り、ちやぶ台にのせる。
お盆には白米とお味噌汁、焼き鮭？がのつていた。

「いただきます。」

手を合わせて食べ始める。

レミリアも料理が上手になったなあと思いつつながらお味噌汁を飲む。

きつと咲夜に教えてもらったのだろう。

この焼き鮭？（黒くて苦い）も外側を気にしなければ美味しく食べられる。

「・・・少し火力を間違えちゃったわ。」

「うん。美味しいよ。」

「本当に？」

「レミイが僕の為に用意してくれたんだ。美味しくないわけ無いでしょ？」

「そう・・・。」

「ん。ご馳走さまでした。」

「はい。お粗末様でした・・・で合ってるかしら？」

「うん。」

そうしてレミリアと一緒に洗い物をする。

料理は上達しても片付け等はまだまだみたい。

〈ワタシも手伝うー！〉

おお、助かるよ。

「あら、クラン。手伝ってくれるのかしら？」

「うん！レミリアお姉ちゃんは危なっかしいからね☆」（言葉の矢）

「かはっ・・・た、助かるわ。」（グサツ）

あ、レミリアが克蘭の一言で崩れ落ちた。

・・・まあ、うん。

平和だ。



ある日、縁側で克蘭を膝にのせてお茶をしていた僕は嫌な予感を感じた。
なんだろうか。

諏訪子達と離れ離れになる。

そんな予感がする。

「克蘭。」

「お兄ちゃん・・・嫌な予感がすんるんでしょ？」

「うん。」

「ワタシも感じた。諏訪子お姉ちゃん達と離れ離れになる予感。」

「・・・頼みがある。」

「・・・お姉ちゃん達には黙っておいて欲しいってことでしょ？ワタシは出雲出雲クランドール黒なんだからわかるよ。このことはワタシとお兄ちゃんだけの秘密ね☆」

「克蘭、ありがとう。」

「どーいたしまして！」

僕は膝の上で足をばたつかせているクランドールの頭を撫でる。

「むふー。お兄ちゃん、もつと撫でて。」

・・・・何だこのカワイイ生き物妹は。

僕は無言でクランドールを撫で続ける。

ヤバイ。

癖になりそうだ。

クランドールから幸せオーラ？みたいなのが出ている気がする。

あー幸せ。

へ・・・（お兄ちゃん、何があってもワタシだけは側に居るよ）
ん？

「克蘭、何か言った？」

「うーんとね、幸せーって。」

「・・・僕も幸せだよ。」

「うん！」

クランドールの笑顔につられて僕も笑顔になる。

うん。

こういう時のことを幸せな時間と言うのだろう。

あ、諏訪子とレミリアもやってきた。

二人のお茶を淹れなきやね。

「克蘭も手伝ってくれるかな？」

「うん！お兄ちゃん！」

そうして僕とクランドールは諏訪子とレミリアのお茶を用意するために台所に向かった。



side ■の ■者

「お兄ちゃん、大結界の改竄を開始するよ！」

「うん。ルーミア、聞こえてる？」

僕は水晶の向こうにいるルーミアへ声をかける。

「聞こえてるのだ。予定通り今から”帳”を下ろすのだ！」

「おっけー。□□□、大結界は？」

「うーんとねもう少いで穴を開けられるよ。」

「よし。シンシア、頼む。」

「わかってるわ。」

?????????

．．．『開け』」

シンシアによつて大結界に穴が出来る。

□□□も準備を終え、僕の隣に立っている。

「シンシア、ありがとう。」

「師匠、礼は不要よ。世界を救いに行くんでしょう?」

「うん。じゃあ、行くよ。．．．また今度。」

「ええ、また今度。」

僕と□□□□は大結界の内部——幻想郷に向かって飛翔した。

3 「崩壊のキツカケ」

ある春の日。

幻想郷に”滅び”が現れた。

彼女の名前は洩矢諏訪子。

土着神の頂点、崇り神、柏手様の妻。

彼女が幻想郷、いや世界を滅ぼす理由は唯一つ。

——「黒が居ない世界なんて消えてしまえ」



今日僕は諏訪子とレミリア、クランドールと博麗神社に花見に来ていた。

霊夢にお裾分けを渡し、諏訪子は萃香と飲んだり、レミリアはクランドールとお茶をしたり、僕とクランドールは紫と話したり、諏訪子とレミリアとゆっくりしたりして過

ごした。

花見が始まって少し経ったときにふと嫌な予感がした。
不安になって諏訪子を探す。

——不味い。

諏訪子に向かって当たったら不味そうな銃弾？が飛んでいた。
弾くか？いや、間に合わない！

僕は周りなど気にせずに走り出していた。
地面が踏み込みで碎ける。

——間に合ええ!!

「諏訪子っ!!」

side：諏訪子

それはある春の日のことだった。

私は黒とレミリア、クランと一緒に博麗神社に花見に来ていた。

私は萃香と酒を飲んだり黒とイチヤイチャしたりして過ごしていた。

「諏訪子っ!!」

黒に突き飛ばされる。

——次の瞬間に黒が消えた。

「クカカカカカツ!!バカめまんまと喰らいおったわ。これでヤツは消えた!!」

「は?」

私には目の前にいる悪魔の言っていることが理解出来ない。

いや、理解したくない。

黒を探す。

——ああ、そっか。

世界が間違ってるんだ。

「不味い！ 霊夢、逃げなさい！！」

「紫、どういうことよ?！」

「彼女が世界を滅ぼす未来が見えたわ!!」

「は?！」

「——黒の居ない世界は間違ってる。こんな世界、消えてしまえ。」

もういい。

私は世界を滅ぼす。

世界を、全てを崇つて殺す。

始まりが有って、終わりが有る
私が居て、黒が居る。

終わりが無いなら、消してしまおう。



side : 霊夢

「大丈夫かい？」

眼の前のジーザスと書かれたTシャツをきた男が言う。

この男が洩矢諏訪子から私達を守ってくれたのだ。

・・・そのTシャツ、ふざけてんのかしら。

すると紫が口を開く。

「ええ、助かりましたわ。」

「それなら良かったとも。」

気になったのでその男に問いかける。

「貴方は？」

「ああ、自己紹介がまだだったね。私は……東京都立川市在住の只のおじさんさ。友の頼みで君達を助けに来た。」

「……もしかして師匠がいつも言ってた現世に染まった友達?！」

「そうだよ。ずっと神様してると肩がこるからねえ。」

紫は何か「コレが現世の神なの……?!」とか言いながら絶句している。

え?この人神様なの?

暫くして復活した紫が只のおじさん（自称）に話しかけた。

「現世の神、アレについて教えていただけますか？」

「いいとも。君達には知る権利がある。」

只のおじさん（自称）が張った結界のようなモノの外では洩矢諏訪子が師匠を消したとほざいていた悪魔達を殺し続けている。

悪魔は師匠を消した？後に仲間の悪魔をざっと1000位呼び出した。

悪魔が言うには手始めに幻想郷を支配するとか言っていたが洩矢諏訪子によって半数が羽虫のように空間ごと消し飛ばされた。

正直言つて勝てる気がしなかった。

この只のおじさん（自称）が来なかったら私達も巻き込まれていたと思う。

「アレは『終末を告げる妖精』だよ。」

「『終末を告げる妖精』？」

「彼女はソレに成った。・・・君達は黒の種族を知っているかい？」

「始まりの妖怪じゃないのかしら？」

「いや、彼は始まりの妖怪と言っていたけれど少し違う。彼ですら知らないことだが、彼は始まりの妖精だ。人、いや集合的無意識が『死』——いつか訪れる『終わり』を認識したときに生まれ落ちた『終わり』の妖精。私達の救世の旅で人類の守護者になったものの、彼女はその『終わり』の片割れ。彼女は十分に世界を滅ぼすことが出来る。」

妖精と言われて思い浮かべるのは湖に居るチルノ^⑨。

要するにその『終わり』版ってことね。

・・・不味いじゃない?!

「博麗の巫女。心配する必要はないとも。彼が戻ってくる。」

「師匠が?!」

「ああ。黒は彼女にまた逢う為に時も世界も踏破してやって来る。私は愛ほど重い呪いは無いけれど、愛ほど強い祝福は無いと思うんだ。」

只のおじさん（自称）は言った。

——そのTシャツが無ければ格好良かったのにと霊夢達は思った。

4 「ワールドドリフター」

風が吹く。

此処は砂漠。

この砂漠はどの世界だろうか？

最初に飛ばされたところで平行世界と異世界の違いについて気付いて良かった。

聞けてなかったら今は異世界ではなく平行世界を漂い、今使っているスペルカードは完成してないだろう。

——旅符「辿り着くべき希望の旅」

このスペルカードは様々な世界異世界移動を観測し【運命を操る程度の能力】で最終的に僕が元居た世界にたどり着くという運命を固定したカード。

時間は掛かるが必ず辿り着くことが出来る。

世界を幾つも飛び越えたり、世界が数千回始まって終わる位の時間を過ごした影響で僕とクランは成長？した。

僕は妖力、魔力、霊力が伸びて神力は据え置き、様々な武術から魔術等を習得したが、身体的な変化は無い。

一方クランは身長が伸びて僕より少し低いぐらになつた。

何というか黄金比と言ふのだろうか？完成された美みたいな感じ。

クランによると永い（それこそ世界数千個分の）時間によりクランの魂がカタチを最適化した結果だそう。

当然クランも妖力、魔力、霊力は伸びている。

最近解つたことは世界を移動するには世界の節目じゃないといけないみたいだ。始まりや終わりの節目に世界移動が起こる。

このおかげであんまり焦らなくて済む。

何せ元居た世界にたどり着いても世界の始まりだもの。

うん、まあ元居た世界が終わつても諏訪子レミアと一緒に居られるつてことが解つたことは良かったかな。

因みに今歩いている砂漠は僕が居た世界で言うところの北海道にあたる。

生物はもう居ないし、もうそろそろ世界が終わるかなといったところ。ガラガラと世界が崩れる音が聞こえる。

よし、次の世界に行こうか。



最近思うことがある。

暇だなあつて。

〈暇ー。〉

クラン、何かいい案ある？

〈うーんとね、夫婦ごっこ！〉

もうやった。

〈親子ごっこ！〉

もうやったし虚しい。

〈英雄ごっこ！〉

疲れる。

〈黒幕ごっこ！〉

やって・・・はないけど何の黒幕？

〈世界全ての悪事！〉

クラン、適当言ってるでしょ。

〈あはっバレた？〉

うん。

あーでも悪か。

・・・一回世界を滅ぼしてみるか？

〈・・・やってみる？〉

うーんやめとく。

良心の呵責が・・・。

〈お兄ちゃんにそんなの無いでしょ？〉

克蘭、酷くない？

〈だって前の世界では戦争を終わらせるために大陸を更地にしてたじゃん。〉

うっ。

あれはつい力加減をミスったといえますか・・・。

〈そのミスで良心が傷んだりは？〉

しない。

・・・あつ。

〈ほら。〉

克蘭が正しかったよ・・・。

〈あ、お兄ちゃん。見て！〉

うん？

克蘭の指した方を見ると世界が崩れていた。

この世界もようやく終わるみたいだね。

へうん。次は帰れるといいね。へ

それ毎回言ってるね。

へまあね。ほら、お兄ちゃん。行こう！へ

うん。

僕は克蘭と手を繋いで今居る世界から別の世界へ跳んだ。



今回も天地創造が始まった頃ぐらいの世界に跳んだ。

世界の始まり。

無からの創造。

何度見ても綺麗だと思う。

うーん、人類が発生するまで数億年だから少し寝るか。
地殻の底で寝よう。

〈お兄ちゃん、おやすみー。〉

うん、おやすみ。

◇◇◇◇

そうして永い時が経ち、大地の奥深くで黒は目を覚ました。

この世界は妖怪や神が存在する程度の世界。

黒はまだ気付かない。

後の世界で只のおじさんと名乗る友が神に成ってから1000年程が経っていた。

◇◇◇◇

「よし、克蘭。行こう！」

「うん！今回はどんな世界かなあ？」

「うーんと、普通に人類が発展してる世界かな？・・・何か身体に違和感を感じる気がする。」

「ワタシもー。でも偶に有った事だよね。」

「うん。僕達は異物だからね。適応まで時間がかかるんだと思うよ。」

「そうだ！今回はお兄ちゃんと学校に行きたい！」

「わかった。じゃあ日本に行こう！」

ということがあり、目が覚めた僕と克蘭は日本で学生を満喫していた。

そんなある日、懐かしい俗世に染まった友を見つけた。

「やあ、黒。久し振りだね。あ、カップラーメン食べる？」

「カップラーメンは頂くけどさ、イエス、なんでここにいるん?!」

「暇だったからさ！」

「もう駄目だコイツ・・・。」

という感動(???)の再会をした後。

僕とクランは東京都立川市にあるイエスのアパートで3人揃ってカップラーメンを食べていた。

「「」馳走さま。」

「で、イエス。今はいつ？」

「・・・なるほど。黒、君は未来から来たんだね。」

すると玄関の方から音がした。

「おーい。イエス、帰ったよーって誰?!

そこから現れたのはブツダだった。

「やあ、ブツダ。久し振り。」

「なんだ黒か・・・って君結婚したんじゃないの?!横の女の人は?!」

「こんにちは!ワタシは出雲クランドール、夢はお兄ちゃんのお嫁さんです!」

クランのその発言で場の空気が凍りつく。

ああ、懐かしいな。

高校生のときも克蘭がふざけて同じ様な事を自己紹介で言ってたっけ。

「黒、どういうことですか?」

「克蘭は妹だよ。」

「ほお・・・妻帯者なのにも関わらず妹と逢引していたと。」

「ちよつとまってブツダ?さん!お姉ちゃん達からは許可もらってるの!」
お兄ちゃんのお嫁さん二人

「はい?」(突然の事に理解不能の仏)

「うん?」(知らなかったバケモノ)

「え?!」(昼ドラにワクワクする神)



そうしてイエス達と話すこと数十分。

克蘭のお嫁さん発言は諏訪子とレミリアの許可あったらしい。

どういふこと？

というかいつ取ったの？

っていうか諏訪子、レミイ、僕の意志は?!

・・・一旦置いておいて。

イエスとブツダは地上にバカンスに来ているらしい。

はあ、まだ浪費癖治って無いのか・・・。

「そういえばどうして未来の黒がここに居るんだい？」

「ああ、何か知らないけど時空の彼方に飛ばされてね。戻ってくるために世界を旅してたのさ。」

それから暫く幾つもの世界を巡った話をイエスとブツダにした。

「なるほどね。うん。私が思うにこれは不味いかもしれないね。」

「イエス、どういうこと？」

「黒の様な存在を時空の彼方へ飛ばせるのが居るって事だよ。黒が帰ってこれたのは奇跡だ。本当だったら時空の彼方で永遠に彷徨っていただろうね。」

「それって幻想郷が危ないってこと？」

「うん。・・・うん?!」

「イエス、どうしたの？」

「黒、非常に不味い事になった。ブツダも感じたかい？」

「うん。不味そうだね。このままだと世界が滅ぶ。」

「なんだって?!」

ブツダとイエスによると幻想郷で近い将来、『終末を告げる妖精』が出現することが予測されたそうだ。

そして、その『終末』のトリガーになったのは僕の消滅。

告げられたのは諏訪子が『終末を告げる妖精』に成るって事だ。

・・・なるほど不味い。

「お兄ちゃん、どうする?」

「諏訪子を止めなきゃいけないし、僕を飛ばした犯人をどうにかしないと。」

「黒、今は2003年だ。まだ猶予がある。君がすべきことはどうにかして『約束の時』に幻想郷に行き、『終末を告げる妖精』を止める事だよ。私に考えがある。」

——黒と克蘭は思った。

そのTシャツ（無地に「月が変わってお仕置きよ！」）で凄く残念な感じだと。

くおまけく

「転校生を二人紹介します。二人共、入ってきて。」

「初めまして、僕は出雲黒といいます。よろしくお願いします。」

「初めまして、ワタシは出雲克蘭ドールっています！将来の夢はお兄ちゃんのお嫁さんです！」

「「「「「え?!」」」」」」

5 「作戦開始!!」

イエスが考えた作戦?はこうだ。

まず僕とクランが幻想郷に察知されずに潜伏、諏訪子が『終末を告げる妖精』に成る『約束の時』を待つ。

次に『約束の時』に起こる世界の崩壊をイエスが幻想郷の内部から、ブツダが幻想郷の外部から支える。

その間に僕とクランで諏訪子を止めて『終末を告げる妖精』を僕が吸収する。

イエスによると諏訪子の『終末を告げる妖精』は元々は僕の能力らしい。

アカシックレコード
世界の記録と云うものに記載があったとか。

因みに僕は『始まりの妖怪』ではなく『始まりの妖精』で『始まりの恐怖』という概念が元になっているらしい。

へー初めて知ったんだけど?!

まあそれは置いておいて、幻想郷に侵入する為には大結界に穴を開けなきゃいけない。

しかも紫と霊夢に気取られないように。

・・・シンシアに協力を煽ごう。

「つて訳でイエス、シンシアの居場所って知ってる？」

「・・・黒、そのシンシアというのは魔法使いの真祖かい？」

「うん。」

「あーなるほどね。彼女が黒の弟子だったとはね。」

イエスは世界の記録アカシックレコードから知識を引っ張って来れるみたいで凄く助かる。

「彼女は今、神綺と名乗って魔界の神をしているよ。」

「へー・・・え？魔界の神?!あのお転婆娘が?!」



というわけで今僕とクランは魔界に來ています。
何ていうか・・・殺風景だなあ。

「殺風景で悪かったですね、手を叩く者。^{C l a p e r}」

「あ、シンシア。久し振り。」

「ええ、お久しぶりです。此処に何用ですか？」

「ああ、少しシンシアの力を借りたくてね。」

「私の力ですか？」

シンシアに今の状況を説明する。

「幻想郷が?! 幻想郷にはアリスちゃん^Cが!! 手を叩く者^{I a p e r}!! 協力すれば幻想郷が滅んだりしないのですよね?!」

「う、うん。」

「なら協力します。これを。」

シンシアが水晶を創り出した。

彼女によると連絡が取れる魔導具らしい。

「いいですか? くれぐれも! くれぐれも!! アリスちゃんに迷惑を掛けないように!!」

「う、うん。」



魔界からの帰り道、闇を纏った金髪少女に会った。

「あ、王様なのだー。初めてあつたのだー。」

「王様? どういうこと?」

「王様は王様なのだー。」

「?・・・僕は出雲黒。君は?」

「私はルーミアって言うのだ。よろしくなのだー。」

へ・・・お兄ちゃん、この子お兄ちゃんの眷属だよ?」

「え？ルーミアって僕の眷属なの？」

「そーなのだー。」

暫くルーミアと話しているとわかったことがある。

まずルーミアは僕の眷属だということ、封印されて弱体化していること、大結界を抜けてきた幻想郷の住人だということ。

「なあ、ルーミア。もしかして能力で紫を誤魔化せたりする？」

「うーん。封印が解ければ妖怪の賢者位なら誤魔化せられるのだー。」

へお兄ちゃん、ルーミアちゃんつてもしかして強キャラ？

取り敢えずルーミアを連れてアパートに戻った。

「イエス、この封印って解けたりする？」

「余裕さ。ほいつ。」

「わはー!」

イエスにルーミアの封印を解いてもらうとルーミアが闇に包まれて成長?し始めた。成長が止まると其処には黒のセーラー服を着た金髪の美少女がいた。

「・・・ルーミア、何でセーラー服？」

「黒様が好きそうだったからです。」

「お兄ちゃん、セーラー服着てあげようか？」

「・・・。」

「で、黒様。私は何をすればいいのですか？」

ルーミアに現状を話す。

「なるほど。」

「ルーミア、協力してくれないか？」

「……黒様、私は貴方の下僕。私は貴方の命令が至上の喜び。そうできています。だからお願いではなく命令して欲しいのです。」

〈お兄ちゃん。〉

「……ルーミア、命令だ。僕を手伝ってくれ。」

「はい、我が王。一生仕えさせていただきます。」

「ん？」

〈セーラー服美少女の従者（意味深）ゲットだね☆〉

克蘭？何か従者の後に何か付けなかった？

つていうか一生?!

〈何も。まあ、修羅場は覚悟しておきなよ☆〉

・・・はい。



イエスの住んでいるアパートの隣の部屋を借りてで克蘭とルーミアと暮らし始めて数年が経った。

ルーミアは予め幻想郷内で待機してもらい僕達を誤魔化してもらう為に今は居ない。

うーん。

——黒様、黒様！

ルーミアの忠犬？感は少し重いけど居ないと寂しいな。

へ・・・お兄ちゃん、毒されてる。く

・・・。

「C l i a p p e r手を叩く者、準備が出来ましたよ。クランドール、大結界の改竄の準備をしますよ。」

「はいー！お兄ちゃん、ワタシも大結界の改竄の準備するね！」

クランが大結界の改竄の準備をするためにシンシアについていく。

今回はイエスの作戦に追加で突入時にクランとシンシアに幻想郷から外に黒幕が逃げないように、現代に余波が行かないように大結界に手を加えてもらう。

僕でも改竄は出来るのだがクランの方が得意だったので僕が周囲の警戒をすることになった。

警戒といっても予め周囲の悪霊や野良悪魔等は駆除したし、イエスに過保護な天使達が警戒をしているのでやることは殆どない。

「お兄ちゃん、準備出来たよ！」

「わかった、すぐ行く。」

地面には大きな魔法陣が描かれている。

「お兄ちゃん、大結界の改竄を開始するよ！」

「うん。ルーミア、聞こえてる？」

僕は水晶で幻想郷にいるルーミアへ声をかける。

「はい、黒様。予定通り今から”帳”を下ろします。こちらでお待ちしております。」

「うん。ありがとう。でもそんなに固くなくていいのに……。クラン、大結界は？」

「うーんとね改竄は終わったしもう穴を開けられるよ。」

「うん。シンシア、お願い。」

「わかってるわ。」

?????????

．．．『開け』」

シンシアの呪文により魔法陣が輝き、空間に穴が出来る。
クランは準備を終え、僕の隣に立っている。

「シンシア、ありがとう。」

「手を叩く者、礼は不要です。世界を救いに行くのでしょうか？」

「うん、結果的にはね。じゃあ、行くよ。．．．また今度。」

「シンシアさん、また今度！」

「ええ、また今度。」

僕とクランは大結界の内部——幻想郷に繋がっている穴に飛び込んだ。

くおまけく

ル「黒様、クラン様、朝ですよ。起きてください。」

黒「うーん。おはよう、ルーミア。」

ク「ルーミアちゃん、おはよー。」

ル「はい、おはようございます。朝食は黒様とクラン様の好物ですよ。」

黒「うん。今行くよ。」

ル「あ、黒様。寝癖がついてますよ。直しますね。」

ク「何か従者っていうよりも新妻みたいなの？」

6 「帰ってきてやらかした男」

「黒様、朝ですよ。」

「お兄ちゃん、朝だよー。」

ルーミアとクランの声で目が覚める。

「おはよう、ルーミア、クラン。」

「おはようございます。」

「おはよー!」

今僕達は竹林の屋敷で暮らしている。

何故竹林の屋敷に居るかというと結界の影響で屋敷の外に僕達の存在がバレず、紫で

さえ覗くことが出来ないからだ。

幻想郷に潜伏し始めて今日で数年位だろうか。

僕とクランはいずれ諏訪子が成る『終末を告げる妖精』に対抗するべく力を溜めていく。

そのため、僕は紫並の長時間睡眠者となっている。

まあ、ルーミアが朝御飯の準備とか掃除とかしてくるからあまり大変なことにはなっていない。

・・・ヤバい、ルーミアが手放せなくなりそう。

へお兄ちゃん、ルーミアちゃんに毒されてるね☆

ほんとその通りだよ。

人を駄目にするってやつだね。

「ルーちゃん、料理上手になったね。」

「ありがとうございます。練習しましたから。」

「ルーミア、今日の朝御飯も美味しいよ。」

「そんな、身に余る幸栄です！」

ルーミアはここ数年で家事能力が上がっている。

料理は美味しいし、掃除洗濯なんでもござれ。

ルーミア、君は一体何を目指してるんだい？

〈お兄ちゃんの下僕（意味深）でしょ？〉

そうだね……。

「黒様、そろそろお昼寝の時間ですね。お布団敷いておきました。」

「あ、ルーミア。ありがとう、助かるよ。」

「おやすみなさい、黒様。」

「うん。一眠りしてくるよ。」

僕はルーミアの敷いてくれた布団に潜り込む。
おやすみなさい。



side:ルーミア

——黒様。

ずっとずっと探していた私の王様。

愛しい愛しい私だけの王様。

私が王様の役に立っていると実感出来るのが至上の喜び。

早く命令して欲しい。

王様のためなら私は何だってする。

たとえ私を愛してくれなくとも。

私はそのために此処に居るのだから。

「ねえ、ルーちゃん。」

「なんででしょうか？クラン様。」

黒様の半身、妹であるクラン様が声をかけてきた。

「一緒に寝よ？」

「一緒にですか？」

「うん。今ならお兄ちゃんと一緒だよ？」

「な、黒様と・・・?!」

黒様と同じ布団に入れる?!

それはもう同衾と云うことでは?!

しかもクラン様公認?!

「ぜひー！」

「うーん、ルーちゃんならそう言うと思った。行こう！」

「はい！」

そうして私はクラン様の後についていった。



約束の時がきた。

ルーミアとクランとの隠居生活を始めてから5年位経ったころかな？

イエスから連絡がきた。

一週間後に約束の時が来ると。

そして今日がその当日。

ルーミアの闇の中で待機して強襲する簡単なお仕事だ。

まあ、頑張つて数年間力を溜めたから負けない・・・と思う。

「ルーミア、クラン、行こう！」

「はい！黒様！」
マスター

「うん！」

ルーミア、最近僕のことマスターって呼んでない？

まあ、いいか。

ルーミアの闇に包まれながら博麗神社に向かう。

時間的にはそろそろ僕が飛ばされる筈だ。

「黒様!!」

「っ!!」

神社から濃密な死の、『終わり』の気配がする。
急ごう。

ルーミアは、担ぐか。

「ルーミア、間に合わなそうだから担ぐよ!」

「へ?」

僕はルーミアを持ち上げて、俵のように——俗に言うお米様抱っこをする。

クランは僕の首にしがみついている。

妖力を全開にして飛ぶ。

神社が見えてくる。

神社では黒い靄を纏った諏訪子が悪魔を消し、周囲に『滅び』を撒き散らしていた。

・・・何かレミアアの時を思い出すなあ。

少し向こうを見ると：「ジーザス」のTシャツを着たイエスがレミリアや紫達を守っている。

・・・嘘だろおまえ、何故にそのTシャツできたの？

ブツダ、なんで止めなかったの？

まあ、後で聞こう。

僕は諏訪子とイエス達の間地点らへんに向かつて降下する。

「やあ、諏訪子。戻ってきたよ。」



side：紫

クロが時も世界も踏破して戻ってくる？

それってクロは時空の彼方へ飛ばされたってこと?!

それは戻って来れるのだろうか？

「大丈夫さ、彼はもう来てるよ。」

すると向こうから巨大な妖力を感知した。

この妖力は、クロ?!

なんて強さなの?!

その妖力の塊が私達と洩矢諏訪子の間而降り立つ。

「やあ、諏訪子。戻ってきたよ。」

.....

クロ、流石に美少女二人を連れて傷心? 中の自分の妻の前に登場とか頭大丈夫かしら?
?

「黒、君は一体何を目指してるんだい? 私にはわかりかねるよ.....」

流石に只のおじさん(自称)も予想外だったみたいね。



「・・・黒？」

「うん。」

「・・・本物？」

「うん。」

諏訪子が攻撃を止め僕の前に降りてくる。

諏訪子の瞳にさつきまで無かった理性の光が見える。

「黒？・・・黒だ!!」

諏訪子が飛びついてきた。

僕は諏訪子を受け止める。

凄く懐かしい。

〈あ、不味っ。〉

あ、何かとてもとても嫌な予感がする。

「すんすん。．．．ねえ、黒？ナンデシラナイオンナノニオイガスルノ？」

諏訪子から黒い霧が出てくる。

諏訪子の理性が消える。

濃密な死の気配。

うーんと、弁解の余地は無さそう。

〈かなり不味いね、お兄ちゃん。〉

どうしようか。

〈愛でも叫べばいいんじゃない？〉

そっかあ。

叫べればいいね。

7 「アイを叫ぶ」

目の前には『終末を告げる妖精』に成った諏訪子が浮遊している。

諏訪子が動き出した。

諏訪子は黒い靄——『崇り』と『終わり』の混合物を弾幕にしてばら撒く。

僕は空中を蹴って躲いていくが何個かは躲しきれない。

「『アメノムラクモ』!!」

そういう弾幕は刀で叩き斬り、『アメノムラクモ』で相殺する。

不味い。

四方八方から弾幕が飛んでくるため諏訪子に近づけ無い。

「.....」

諏訪子は業を煮やしたのか弾幕に加えて魔理沙のマスタースパークの様な光線をば

ら撒き始める。

広範囲絨毯爆撃かよっ?!

「クラン!」

「はいはい!呼ばれて飛び出て!想符『一億と二千年の翼』!!」

クランが一對の翼の様な弾幕で諏訪子の攻撃を相殺する。

クラン、ノリノリだね・・・。

諏訪子は弾幕の密度を上げた。

「・・・『滅びの矢雨』」

諏訪子が知らない技を使う。

諏訪子の纏う黒い靄が矢の形になり、降り注いだ。

「拍符『二拍全祓』!!」

「重符『グラビトンハンマー』!!」

僕が出来るだけ相殺し、クランが重力球で打ち漏らしを逸らす。

「かふっ……『終末を告げる鐘』」

諏訪子が自身の負荷を無視して背後に大きな鐘を生成する。

その鐘から黒い波動の様なもの広がっていく。

その黒い波動に触れた弾幕や物は塵になって行く。

「不味い!!」

「お兄ちゃん!!アレをやるから合わせて!!」

「……それしか無いけどさあ!でも、技名は変えて!!」

「やだ☆」

「あああーもうっヤケクソだあ!!」

クランの言うアレは強いしカウンターにもなるけどさあ!!
技名に問題大あり!!

「黒、まさかアレをやるのかい?! (精神が) 死んでしまうよ?!」

イエス、心配してくれてありがとう。

早く決着をつけないと負荷に諏訪子が保たないし、(僕の精神を) 殺るしか無いんだよ
!! (ヤケクソ)

僕はクランと手を合わせる。

「クラン!」

「お兄ちゃん!」

合わせた手を握る。

唯一の救いはこの技が問答無用で最強な事だ。

真面目に説明すると（現実逃避）僕が負のエネルギーを克蘭が正のエネルギーを出し合い、繋いだ手で相乗、膨れ上がったエネルギーを二人の握った手を中心に乗せて、放つ。

要するにアニメ機動武闘伝G ●ンダム最終話の『爆熱ゴツドフィンガー』せきはらぶらぶてんきょうけん石破ラブラブ天驚拳』を見て克蘭とイエスがノリノリで考えた必殺技だ。（しかも下手に強力だったので克蘭が採用した。）

「二人のこの手が！」（ノリノリ）

克蘭が予め決めていた台詞（克蘭が考えた）を高らかに叫ぶ。

こうなったら僕もやるしか無いでしょうと僕も覚えていた（覚えさせられた）台詞を叫ぶ。

因みにこの台詞に意味はあんまり無いが技を補完し安定させる効果がある。

「真っ赤に燃える！」（ヤケクソ）

クランの正のエネルギーと僕の負のエネルギーを相乗させる。

実は相性が悪いと相乗どころか相殺してしまうのであながちラブラブ！も間違いではない。

「（禁断の愛を）貫き通せと！」

「轟き叫ぶ！って何か余計なの聞こえた！」

「爆熱!!」（無視）

相乗され膨れ上がった混沌エネルギーを一つに束ねる。

今回は放つと諏訪子が消滅してしまうので束ねたエネルギーを纏う。

・・・クラン、後で覚えとけよ。

〈ワタシ何のことかわかんない☆〉

エネルギーの一部を推進力に変える。

はあ・・・行くよ、クラン！

へうん！

「愛符『ラブラブ！塞破天恐拳』!!」
せきはてんきょうけん

「・・・ッ!!」

——相乗したエネルギーが黒い波動を押しつけ、周囲の波動を掻き消す。

その勢いのまま二人は『終末を告げる妖精』へと流れ星の様に突撃していった。

黒い靄に阻まれ、流れ星の勢いが落ちる。

が、しかし。

「貫けえ!!」

流れ星は靄を吹き飛ばし、『終末を告げる妖精』へ届き——辺り一帯を極光が包み込んだ。



目を開くと湖の上に立っていた。

僕は湖の上をあても無く進んでいく。

暫くすると見慣れた古い神社が湖の上に建っていた。

何となく此処が諏訪子の中なのだと思信する。

ということはこの中に諏訪子が居るのだらうと思ひ、住処に近づいていく。

「ぐすつ……うう……」

住処の中から誰かの泣く声がした。

僕は住処の中に急いで入る。

すると其処には少し幼い姿の諏訪子が泣いていた。

「諏訪子！」

諏訪子に駆け寄る。

すると周りの風景が変わり始めた。

周りを様々な風景が凄まじい速度で切り替わって行く。

——寂しい

——誰も私僕に気付かない

——何も私僕は感じない

——本当に私僕は此処居に存在るしているのか？

これは、僕の記憶？

なんで諏訪子の中に？

・・・そうか、『終末を告げる妖精』は元々は僕の能力。

『終末を告げる妖精』に成るって事はオリジナル僕に近づくということ。

本来なら姿形等が寄っていくけれど諏訪子の中には僕が有って僕の中には諏訪子が有る。

だから諏訪子の中に有る僕から僕の記録が流れ込んでいるんだろう。

いや、混ざってる?!

不味い!!

「ぐすつ……誰か、私僕に気付いて……。私僕は此処僕に居るの?」

諏訪子は今、『終末を告げる妖精』に成った身体から切り離された状態だ。

僕の場合は現実に実体が有ったから消滅はしなかったが、精神だけの諏訪子はどうなるかわからない。

『終末を告げる妖精』に塗り潰されてしまうかもしれないし、精神だけ消えてしまうかもしれない。

……風景と諏訪子の眩いている言葉から推測すると自分を忘れかけている時か。

あの時の僕は人の温もりや自身の存在証明を求めていた。

今の諏訪子はおそらく自分が居るのかわからなくなっている。

自分が認識出来てないから、精神世界異物に有る僕にも気付けない。

揺すつても声をかけても届かない。

諏訪子が少し透けて見える。

消え始めてる?!

でも、どうすれば・・・

ふとクランの言葉を思い出した。

——愛でも叫べばいいんじゃない?

愛? アイ・・・私。

そうだ、僕の能力で諏訪子と僕を曖昧にして私を認識させればいいんだ。

・・・この諏訪子の精神世界に僕を引っ張り上げてくれる母さんの前掛けは無い。

戻ってこれないかも。

・・・でもやるしかない。

いや、諏訪子を助けない。

たとえ僕が消えようと。

細工をすれば、戻って来れなくても諏訪子の精神は守れる。

・・・頼む、母さん、姉さん。

僕に力を貸してくれ。

僕は泣いている諏訪子の顔を此方に向ける。

そつと諏訪子に口づけをする。

——混ぜる、混ぜる、混ぜっていく

——私僕は誰？

——僕私は黒。諏訪子僕、迎えに来たよ。

——諏訪子？

——君僕は諏訪子、洩矢諏訪子。僕私の愛する人。

——愛？

——うん。諏訪子、愛してる。君は此処に居る。僕の愛した洩矢諏訪子は此処に居るんだ。

——私僕は居る・・・。

——そう。私僕、そろそろ目を覚ます時間だよ。

——黒・・・？

諏訪子僕の意識が浮上していく。

しっかりと自分を思い出したみたいだね。

・・・ああ、不味いね。

戻れそうに無い。

まあ、私僕を救えたから良しとするかな？

——黒？黒!!

——諏訪子僕、元気で。愛してる。

——黒!!私も愛してる!!く——

諏訪子が少しずつ離れていく。

・ ・ ・ ああ、もつと諏訪子達と過ごしたかったなあ。

底？に座り込む。

うん、細工は成功したみたいだ。

これで諏訪子の精神は無事だ。

うーん。

ここ、なんにもないなあ。

・ ・ ・ 此処は諏訪子の底の底。

ここでゆっくりと消えるのかあ。

ふと聞こえないはずの声が聞こえた。

—— 諦めるとは感心しないわね、黒。

紅?!

—— あ、言っておくけど私は幻想とかじゃなくて本人よ。

どうして此処に？

—— あら、覚えてないの？言っただじゃない、私は貴方と共に有るってね。

でも、此処に居たら。

——馬鹿ね、私が無策で此処にいるとでも？

違うの？

——違うわよ!!

だって紅、計画性皆無だし。

——うっ。．．昔のことは置いておきなさい。私は貴方を助けに来たんだから。

お嫁さんを泣かせちや駄目よ？

うっ．．はい。

——さあ、帰るわよ。

紅によって上に引つ張り上げられる。

紅、いや姉さん。ありがとう。

——ふっ。姉が弟を助けるのは当たり前でしょ？



「黒!!」

「黒!!」

「黒様!!」

「お兄ちゃん!!」

「師匠!!」

「クロ!!」

色んな声が聞える。

右手に温もりを感じて右を向く。

其処には涙でぐしやぐしやになった諏訪子が居た。

「ぐすつ、黒お!!」

「ぐえっ。」

諏訪子が寝かせられている僕の腹に飛び込んでくる。
僕はボロボロの諏訪子の頭を撫でて言った。

「諏訪子、ただいま。」

「ぐすっ……黒、お帰り!!」

8 「真相と花火」

あの後、黒幕の悪魔を探したら諏訪子の『滅び』の余波で瀕死になっていた。
・・・少し憐れだなと思った。

僕は諏訪子に待っていてくれと言ひ奴に近づいた。
横たわっている悪魔が口を開く。

「クカカカ・・・我ながら滑稽だ。なあ、エクソシスト。」

「・・・何故、僕を消そうとした？」

「クツクツク。簡単なことよ。オマエが目障りだっただけの話だ。・・・兄よ。」

「どういうことだ?! 僕に弟は居ない筈だ!」

「・・・クハハ、ハハハハ! そうか! そういうことか!! 滑稽だ! 怖れていたことは起きる

わけもなく、我がから回っただけか!!なんと滑稽!!なんと馬鹿らしい!!・・・かふつ。」

バエルが赤い血を吐く。

悪魔に血は流れていない筈だ。

バエルから敵意が消える。

「・・・エクソシスト、少し、昔話を・・・してやろう。」

「僕にそれを聞く必要が有る?」

バエルに『アメノムラクモ』^刀を向ける。

「ふっ・・・少し付き合え。死にゆく者の戯言だ。・・・そうだな、話を聞けばこの件に関わった黒幕を教えてやろう。」

「・・・それなら少し付き合おうか。^{エクソシスト時代の宿敵}地味に長い付き合いだしな。」

「……気が遠くなる程昔の事だ。有るところに、親を亡くした兄弟が居た。兄は優しく強い人だった……。弟は自分の野望の為に兄を後ろから刺し殺した。そうして弟は野望を達成し、その後何故か永い時を経て悪魔に成った。ヤツは苦悩した本当にあの優しくかった兄さんを殺す必要があったのかと……。」

僕にはそう話すバエルが悪魔というより過去に後悔する一人の人間に見えた。

「……偶然だった。……我が兄の魂を見かけたのは。兄の魂は一部が変質していたが本質は兄のままだった。我は……。俺は恐れた。兄が俺を殺そうとしているのではないかと。その疑念は兄がエクソシストになったことで確信に変わった。……。だから俺は配下を使い、人を使い、ありとあらゆるものを使って兄を、エクソシストを殺そうとした。だがヤツは唐突に姿を眩ませた。俺は兄を殺す為にありとあらゆる手段を探した。……そして兄を怖れている神を見つけ、奴らの力を借りて時空の彼方へ飛ばす術を創り出した。」

「……ツクヨミか？」

「ふっ……そうだ。ツクヨミとアマテラス。奴らはお前の報復を怖れている。奴らは臆病なのさ……。まあ、それはいい……。俺は滑稽だ。あの誰にでも優しかった兄さんを殺す必要は無かった。兄さんは病弱で、邪魔だった。たったそれだけの理由だ。……かふっ。……もう時間が少ないな、エクソシスト。お前は兄さんではないかもしれない、俺の勘違いかもしれない。……これは兄さんを殺した俺の自己満足だ……お前は、幸せになれ。……宿敵よ、汝の生に幸があらんことを。」

「……言われなくても幸せになるさ。」

——じゃあな、かつて血を分けた弟よ。

バエルは目を見開き笑った。

「ク、クハハハ、はははは！……は、はは……」

バエルは笑いながら塵になって消えた。

バエル、君が野望を優先したから僕は諏訪子と出逢えた。

そこにだけは感謝している。

僕を刺したのはそれでチャラだ。

僕はバエルが居た場所に背を向けて歩き出した。

帰ろう。

やらなきやいけないことが山積みだ。

——後ろで風が吹いた気がした。



その後僕達は幻想郷の被害を確認して回った。

まあ、大きな被害は精々博麗神社の境内が滅茶苦茶になった位だったので後始末は簡単だった。

後始末が終わり、僕達は博麗神社の居間で事の内容を説明した。

今はツクヨミとアマテラスに関してどうするか話し合っている。

因みに議長（自称）はイエスだ。（議長というTシャツを着て座っているだけだが）

「クロ、あの神達には幻想郷を危機に陥れた代償は払わせなければならぬわ。」

「師匠、私も紫に賛成よ。何なら一発殴ってやりたいくらいよ。」

「そうですよ王様！ 奴らは処すべきです！」

話し合いといっても奴らを懲らしめるのは決定事項だ。

そうやって話しているとクランが手を挙げていった。

「はいはい！ イエスぎさん、ちよー提案があります！」

「はい。クランドール君、どうぞ。」

クランとイエスが現代でよくやっていたやり取りをする。

「ワタシとゆかりんで誘拐してお兄ちゃんとお姉ちゃんに花火にしてもらったら良いと思いまーす☆」

「あら、面白そうね。」（口元を扇子で隠しながら）

そうしてクラン&紫のタッグにより花火大会をする事になった。

内容は普通に幻想郷全体で大々的な花火大会を実施、花火の打ち上げに乗じて誘拐してきた神共を僕と諏訪子で汚い^爆花火[☆]に^殺するという感じだ。

因みに他の花火は紅魔館と河童達が協力して制作するらしい。

本番が楽しみだ。

〈最後の晩餐を楽しんでおけ!! っってやつだね!!〉

・・・なんか違う気がするような？



・ ・ ・ 本番が楽しみだとか言ってた僕を殴りたい。

なんとクランとイエスの提案で見栄え的にも見世物（笑）としてもということであつた。子とアレを打つ事になった。

練習は博麗神社でやって紫と霊夢に爆笑された。

恥ずか死にそう。

因みにレミリアとは花火大会の時に出来ないという理由で散々やらされた。

諏訪子とレミリアはノリノリだった。

そんなに楽しいかな、アレ。

『とうとう今日がやってまいりました!! 幻想郷花火大会、開幕です!!』

『鳥』のアナウンスがひびきわたる。

その後、幻想郷の各地に色とりどりの花火が咲いた。

『この花火は紅魔館と河童たちが協力して作り上げたものです、最後にはとびっきりの催し物もあるのでどうぞ最後までお楽しみ下さい!!』

諏訪子と手を繋ぎながら空を飛んで幻想郷を見下ろす。
今回諏訪子と僕は色とりどりの浴衣を着ている。

「黒、花火が綺麗だね。」

「うん。諏訪子も綺麗だよ。その簪も似合ってる。」

「ありがとう。黒も格好良いよ！」

そんなやり取りをしながら飛んでいると博麗神社の上空に着いた。

「お兄ちゃんー!!」

「クローー！」

「王様くー！」

クランや紫、ルーミアと合流する。

その横には簀巻きにされた神共がジタバタとしている。

「お兄ちゃん、準備できてるよ。仕上げ、頑張つてね☆」

「・・・うん。頑張るよ。」

『さー今回の大目玉！柏手様による大花火です!!』

「黒、行こう!!」

「うん！」

諏訪子と一緒に博麗神社の上で手を？ぎ、波長を合わせる。

クランが簀巻きにした神共をぶら下げて飛んでいく。

諏訪子がノリノリで台詞を言う。

しょうがない、乗っついていこう!! (開き直り)

「二人のこの手が!!」

「真っ赤に燃える!!」

「愛していると!!」

「轟き叫ぶ!!」

「必殺!!」

二人のエネルギーを束ねて遠くでクランがぶら下げている神共に狙いをつける。

「愛符『ラブラブ! 塞破せきはてんきようけん天恐拳!!』」

束ねたエネルギーを炸裂し易いように調節して放つ。

クランは紫のスキマで撒収し、エネルギーの奔流は神共へ命中し、大きく鮮やかな光の花を咲かせた。

——その後クランと紫により台詞が中継されていたのを聞き、僕は一日恥ずかしさで悶えた。

9 「廻る」

あの花火大会から数年が経った。

霊夢や早苗、魔理沙は少女から女性へと成長し、様々な異変を解決した。

花が咲き誇ったり、妖精達が暴れたり、天人が異常天候を起こしたり、温泉が湧いたり。

色々あったが今僕は湖の屋敷で諏訪子、レミリア、ルーミアと暮らしている。

クランは旅符『辿り着くべき希望の旅』の応用で別世界に遊びに行った。

クランが言うには「ゼルおじさんと魔法論議してくる！」とのこと。（ゼルおじさんって誰？って聞いたら「宝石おじさん」とよく分からない答えが返ってきた）

ルーミアは正式？に僕の従者になり、咲夜に従者としての技術を学んでいる。

咲夜が言うには筋は良いそう。

諏訪子は『終末を告げる妖精』に成った後遺症？で髪が白色に瞳が水色になり僕との繋がりが強くなった。

まあ精々お互いの居場所がわかるようになった位だ。

風のうわさによると霊夢に彼女が出来たとか。

家に酒を飲みに来た紫は「行き遅れ・・・」と落ち込んでいたので萃香に投げた。

その後話を聞いたクランが「お兄ちゃん、ゆかりんは肉食系だから頑張つてね☆」と不安になることを言った。

その次の日からルーミアと紫がよく弾幕ごっこやつてるのを見かける様になった。

「王様の貞操は私が護ります!!」とか「何でクロの部屋へのスキマが妨害されるのかしら？」とかは聞こえてない振りをした。

——その後、諏訪子を交えた黒の嫁&嫁希望者の会議が開かれる事になるのを黒はまだ知らない。

「先生、頑張つて下さい!!」

「え？ 咲夜いきなりどういうこと？」

「いえ、お嬢様が少し・・・あ、買い物はまだでした。ではまた。」

「気になるところで切らないで?！」



あの花火大会から10年が経過した。

博麗の巫女は代替わりをし、霊夢は幻想郷の抑止力としての責務は消えた。博麗の巫女は中立である為に役目を終えるまで何方にも属してはいけない。

でも今の霊夢は人人と結婚するに属する事が出来る。

今日は霊夢の結婚式だ。

まあ結婚式とはいってもお祝いも兼ねた大宴会だ。

乾杯の音頭は博麗神社の祀神である僕がすることになった。

・ ・ ・ 博麗神社って柏手様を祀ってたんだ。

僕、始めて知ったよ。

因みに博麗神社を建てたのは紫だ。

後で問い詰めよう。

それは置いておいて、今は祝の席だ。
高らかに音頭を取ろうじゃないか!!

「さて!!皆!!酒は注だか?!」

思いつきの応答が返ってくる。

「では、霊夢と魔理沙の結婚に祝して!!・・・乾杯!!」

「「「「「乾杯!!」」」」」

そうして宴会が始まった。

「霊夢さん、魔理沙さん、結婚おめでとー!!お兄ちゃん達つてばハラハラしながら霊夢さんのプロポーズを見守ってたんだよー☆」

「クラン!それは言わない約束じゃ・・・」

「へえ、師匠。・・・どういふことか洗いざらい話して貰おうかしら？」

「・・・紫の提案です。」

「ちよ、クロ?!嫁を売るとはどういふことかし「紫、正座。」・・・はい」

「旦那様、霊夢さん、魔理沙さん。お料理をお持ちしました!!」

霊夢と正座している僕と紫の元にルーミアが大皿を持って駆け寄ってくる。

紫もルーミアも左の薬指に僕が首に下げている指輪と同じデザインの指輪をしている。
る。

ええ、まあ色々ありましたてクラン、紫、ルーミアとも結婚しました。

ぶつちやけ気付いたらレミアと紫に一服盛られてなし崩し的にとイヤつだ。

まあ、悪くはない。

そうして時間は過ぎ、宴は盛り上がっていく。

「あの時の霊夢ったらちよーかわいいかったのよ!!」

「ちよ、紫何言ってるのよ?!」

酔った振りをして紫の霊夢^{親バカ}自慢が炸裂したり、

「そうだぜ! 霊夢はプロポーズのときはとつてもかわいかったぜ!! そりやあもう・・」
「まらっしやい!!」・わ! 逃げろ!!」

「待ちなさい!!」

「鬼さんこちら!! だぜ!!」

魔理沙が霊夢のプロポーズを暴露しようとして追いかけてこをしたり、

「ほら、霖之助。お祝い、言いに来たんだろ?」

「ああ、言ってくるよ。」

重い腰を上げて訪れた霖之助の背を押したり、

「もーやってらんねーです!!」

「白狼天狗も大変だねえ。」

「私はいまバカンス中だしなあ。あ、これ食べるかい？」

「頂きますよこんちきしよう!!」

萃香が白狼天狗とイエスと飲んだくれていたり、

「黒、久し振りにあれ飲ませて？」

「久し振りにって三日前にも飲んだよね?！」

「しーらないっ!!」

「ちよ、」

「いただきますーす!!」

諏訪子に血を吸われたり。

そうやって幻想郷の夜は更けていく。



皆が寝静まり、月が真上に来たころ。

僕は博麗神社の屋根の上で星を眺めていた。

「だーれだー！」

目が誰かの掌で覆い隠される。

僕は確信を持って掌の主の名前を口に出す。

「諏訪子。」

「正解だよ。」

諏訪子は僕の横に腰を下ろす。

「どうして此処に？」

「起きたら黒が居なくて探してたんだ。．．．黒は何をしてるの？」

「星を見てる。．．．諏訪子、ちよつと此方に寄つて。」

「うん。」

諏訪子を抱き寄せる。

「．．．少し、寂しくなつたんだ。僕は、僕とクランは幾つもの、それこそ星の数ほどの世界の終わりを見てきた。．．．僕はこの世界の終わりが解る。解かってしまう。」

「黒．．．。」

「さつきまで騒いでいた霊夢や魔理沙、紫達にも．．．レミリアにも終わりは来る。残念だとは思うけど悲しまない。僕は悲しめない。それが皆を大切に思えてない様でとて

もとても悲しくて寂しい。」

すると抱き寄せた諏訪子が僕を抱き締める。

「大丈夫だよ、黒。私はずっとずっと黒と居るし、悲しめないことを悲しむのは皆のことを大切に思っているってコトだよ。」

「諏訪子……。」

「私はね、皆のことを憶えておいてあげることが大切にするってことだと思う。」

「……そうだね。僕は、僕だけは憶えておくべきだ。この世界があつたと言う事を。此処で暮らしていた人々が妖怪達が神達が居たと言う事を。」

「うん！」

「そうだ、諏訪子。言いたいことがあるんだ。」

「そうだね。私もおんなじことを言おうと思ってる。」

「諏訪子、」

「黒、」

「愛してる。」

そうして二人の夜は更けていく。

——夜はまだ長い。



金髪の少年が駆けていく。

「霊夢お母さん、魔理沙お母さん、行ってきます!!」

「霊魔、気を付けて行くのよ。」

「霊魔、何かあったら私達を呼ぶんだぜ？」

「はーい!!」

金髪の少年——霊魔が寺子屋に行くのを見送った後、霊夢と魔理沙は縁側でお茶をす
る。

「なあ霊夢。霊魔も大きくなったな。」

「ええ。貴方が妊娠した時はどうなることかと思っただけど案外悪くないわ。」

「ああ。黒には感謝しかないぜ。黒が居なかったら霊魔は産まれてないからな。」

「……師匠は今何処に居るのかしら。」

「さあ? ……まあきつとどこかで嫁とイチャコラしてるだろ。」

「そうね。」

霊夢は5年前の出来事を思い出す。

——霊夢、魔理沙。僕と諏訪子はちよつと強くなりすぎた。だから旅に出ようと思ってるんだ。……最後に君達の願いを一つ位は叶えてあげられるけどどうする?

——じゃあ、霊夢と私の子供が欲しいぜ!!

——うん。わかった。柏手様として最後の仕事だ。……霊夢、魔理沙、抱き締め合つて。

——おう！ほら、霊夢も！！

——え、ええ。

——うん。君達に祝福を。・・・柏手の名に於いて奇跡を起こす。霊夢と魔理沙の子
よ有れ！

——なあ黒。何にも起こらないぜ？

——うん？起こったよ？今魔理沙のお腹は霊夢との子供を授かっているよ。

——え？

——やったぜ！！

——じゃあね、霊夢、魔理沙。君達の事は忘れないよ。

——おう！じゃあな、黒！！

——ええ、さようなら師匠！！ありがとう！！

霊夢は湯のみを置き空を見上げる。

「懐かしいわね。」

「そうだな。」

「あ、洗濯しなきゃ！」

「手伝うぜ！」

霊夢と魔理沙は立ち上がって歩き出した。

——そうしてまた今日が終わり、明日が始まる。

いつか来る遠い終わりに向けて人々は、妖怪は、神々は今を生きる。

黒色のバケモノと白色のバケモノは今日も世界を見守っている――

「諏訪子、愛してる。」

「私もだよ黒。愛してる。」

「ほら、お兄ちゃん達!!イチャついてないで仕事!!」

「わかったよ。」

「はーい。」

「今日の仕事は時計塔で起きるテロを防ぐ事だよ!!」

「・・・世界ってテロが世界の終わる要因に成るのか。最近こういうの多いし、ちよつと世界って終わりやす過ぎない?」

「・・・黒、頑張つて。」

「ほら、お兄ちゃん。行くよ!!レッツゴー!!」

「はいはい。」

——今日も世界は回る。

黒色のバケモノが世界を回す。

終わりはまだ来ない。

この世界は老衰で消えるだろう——

e x 「ごぼれ話」

本の虫「いやー読み返して笑ったわ。だって整合性？何それ美味しいの？みたいな感じだし、文きたねえし（自虐）、友人の無茶振りでストーリー変えまくりだし。」

克蘭「ご愁傷さまでした☆」

本の虫「まあそれは置いておいてだね、私の自己満足の為に色々と話していこう!!」
克蘭「わあ自己チューだあ」

《ストーリーについて》

克蘭「ねえ作者。そもそもこの小説モドキは何で出来たの？」

本の虫「それはね、何となく人間性を持ったバケモノを書きたかったから!!・・・でも私の力が及ばず只の主人公になってしまったんだ」

克蘭「憐れだね」

本の虫「かふっ（吐血）・・・ストーリーについて話すと、大雑把に三つの章？に分けるつもりだったんだ」

克蘭「三つの章って？」

本の虫「先ず一つ目は過去と始まり編。黒の誕生から諏訪子や永琳との出会いまで。細かい説明は、イエスさんよろ!!」

イエス「やあ、呼ばれて飛び出てってやつだね。作者に変わって説明すると過去と始まり編は黒の正体の匂わせ、伏線張り、黒の強化が目的だね。私が思うに未回収の伏線ってあると思うんだよね」

本の虫「ギクツ」

克蘭「ギクツって言う人始めてみたー。で、有るんだよね？」

本の虫「・・・はい。実は柏手様に関する伏線を張ったつもりなんですけど回収仕損ねた上に友人に分かり辛いつて言われまして・・・」

克蘭「未熟未熟う!!」

本の虫「おっしゃる通りです・・・」

イエス「作者が沈んでいるので私が続きを説明するよ。三つの章の2つ目は出会いの旅路編だ。」

克蘭「旅路？要するに旅の道の話ってこと？」

イエス「その通り！出会いの旅路編は黒の強化、紅との約束の清算、友人の無茶振りが詰まっているんだ」

本の虫「・・・そう、奴の無茶振りのせいで何度書き直したことか!!」

友人笑「呼んだ?」

本の虫「呼んでねえよ!!」

友人笑「口調崩れてるぞ」

克蘭「友人笑さん、無茶振りって?」

友人笑「うーん。色々とあるぞ?例えばヒロインを増やしたりとか、妖忌や咲夜とからませたりとか?」

本の虫「・・・実は紫やレミリア、ルーミアはヒロインでは無かった!!」

克蘭「ワタシは?」

本の虫「ヒロイン枠の妹」

克蘭「よしっ!!」

本の虫「・・・まあそんな感じで無茶振りが詰まっているんだ。本来はイエスとの旅をもうちつと書いて、レミリア（ガチの幼女）と絡ませるつもりだったんだが無茶振りでヒロインになった」

イエス「で、三つ目の章は幻想郷と悠久の旅路編。黒と諏訪子の再開とラブコメを詰める予定だった章だ。」

克蘭「だった?」

本の虫「そう。詰めるはずだったのにネタ、内容、時間等の色んな要因によりちよーカットした。リメイクするときはちゃんとするつもりだ！」

《キャラに関して》

本の虫「次はキャラに関して話していこうと思う。今回のゲストはゆかりんこと八雲紫さんと結婚した巫女こと霧雨霊夢さんです」

八雲紫「よろしくお願いするわ」

霧雨霊夢「ええ、よろしく。で、最初は師匠からでしょ？」

本の虫「それが実は本作のキャラには二種類あつてですね、まず作者の自己解釈での原作ベースのキャラ。これは霊夢さんや紫さんがあたります。二つ目はオリキャラです」

八雲紫「要するに黒やバエル、イエスとかのことね？」

本の虫「ええ、そうです。黒は作者がこんなキャラいたら良いなく位に考えて、創ったキャラなんですけども。居てもおかしくない妖精から妖怪に変化したバケモノにしたんです。諏訪子にいたってはほぼオリキャラと言ってもいいですね。」

霧雨霊夢「へえ。諏訪子さんって最終的に白いバケモノって表記されてるけどそれは

「？」

本の虫「黒との対になるものとして書きたかったし、私のミシャグジ様へのイメージとかから来た感じですね。」

八雲紫「さて、作者。アレについて話してもらいましょうか？」

霧霊夢「アレ？」

八雲紫「出雲クランドールについてよ。あのイレギュラーは何？」

本の虫「：：えーつとですね。私も気付いたら出来ていたと言いますか、クランドールの狂気の処理方法と言いますか。作者的には結構気に入ってるキャラです。クランは黒の魔法使いとしての部分なので、さしずめ大魔法使いとかですね。なんで妹がヒロインになったかというと……」

友人笑「俺だ!!」

本の虫「……と言うわけです。裏設定としてはクランドールの狂っていた部分のほぼ全てが核に成っているのでクランドールの狂気が最後に抱いた黒への狂愛、興味といったものがクランドールの根底に有ったって感じ」

フラン「へー。もしかして狂気をどうにか出来なかつたら私がヒロインになってたり？」

本の虫「うん、まあなつてたけど丸くなつてない諏訪子に祟り殺されて激昂したレミ

リアが無惨に死ぬバットエンドになってた可能性が高い。諏訪子が丸くなったのはもう一人の黒とも言えるクランドールが居たからだしね……っていうか何でここに居るんですか?!

フラン「あそこにあつた壁?をキュツとしてドカーン!つてしたら来れたよ?」

本の虫「彘?」

八雲紫「あら、この家はずいぶん風通しが良くなつたわね」

本の虫「私の家?!」

《世界観に関して》

本の虫「……はい、気を取り直して次は世界観に関して話していこうと思います。今回のゲストは紅魔館の女主人ことレミリアさんと常闇の妖怪ことルーミアさんです」

レミリア「こんにちは。で、何で私は此処にいるのかしら?」

本の虫「えーっと私の能力で拉致って来ました。」

レミリア「……死にたいようね?」

本の虫「黒のブロマイドあげるんで少し話に付き合つて下さい」

レミリア「……しょうがないわね」

本の虫「……チョロい」

ルーミ「あの、私はさつきまで藍さんと結界の修繕をしてたんですが帰つてもいいですか？」

本の虫「あ、ここ時の流れとか作品の壁とかあんまり無いんで大丈夫ですよ。あ、ルーミアさんも黒のプロマイドいりますか？」

ルーミ「……もらいます」

本の虫「さて、ゲスト二人が席に着いた所で話していこうと思います」

レミリ「そもそも此処に置いてある二冊の歴史書は何？」

ルーミ「ええと？『東方歴史(仮)』と『東方黒雲録』？」

本の虫「ああ、それは貴女達の世界とある世界の歴史です。主な違いは黒が居るかということですね」

ルーミ「え?!王様が居ない世界が有るんですか?!」

本の虫「ええ。その世界では洩矢諏訪子が白いバケモノに成ることもなく、ルーミアさんも唯の野良妖怪ですね」

レミリ「なるほどね。要するに黒の運命が存在しなかった世界ということかしら。やろうと思えば視るぐらいはできそうね」

本の虫「やめてください、私が死んでしまいます。これ以上要素を詰めると書ききれ

ないんです!!」

レミリ「え、ええ。わかったわ。」

本の虫「・・・話を戻すとこの世界は黒という不確定要素が動き回った結果出来上がった世界・・・と言いたいんですけど、実はとある夫婦が居なかったらこの世界は出来て無いです」

ルーミ&レミリ「夫婦?」

本の虫「ええ。まあ夫の方は作中で登場が極端に少ないですが彼らが駆け落ちしたからこそ紅が産まれ、黒の名付けが起こったんです」

アカコ「ええ、そうですね。本の虫、この女性達はどうしたのですか?」

本の虫「・・・トウマに頼んで拉致って来ました」

アカコ「元居た時間と場所に帰してきなさい。トウマもいいですね?」

トウマ「はい・・・」

ルーミ「あの、もしかして旦那様のご母堂さまですか?」

レミリ「え?!黒のお母様は亡くなってるんじゃない?」

アカコ「ええ、私はもう死んでますよ。ですが夫の能力で隠居している感じですね。・・・おや、二人共息子の嫁なのですか。ふむ、結婚祝を渡せませんでしたしこれをあげましょう」

レミリ「この剣は？」

アカコ「確か選定の「ちよつと待つて!!アカコ、それ渡しちやだめ!」・・・わかりました。ではこれを」

ルーミ「これは、着物ですか？」

アカコ「ええ。昔とある大蜘蛛を倒した時に手に入れた糸で作った着物です。息子の着ているものとお揃いですよ」

ルーミ「旦那様とお揃い?!ありがとうございますっ!!」

レミリ「アカコさん、ありがとうございます!!」

アカコ「さて、トウマ。彼女達を帰してきなさい」

トウマ「はい・・・」

《リメイクに関して》

トウマ「はー疲れた」

アカコ「自業自得でしょう。昔から貴方は気になった事に目が無い。何か気になったことがあったのでしょうか？」

トウマ「ああ。本の虫には悪いけど俺は読むだけじゃなくて彼女らの記憶から息子の

姿を見たかったんだ」

アカコ「ふむ、能力で行けば良かったのでは？」

トウマ「あ」

アカコ「はあ」

トウマ「まあ、結果オーライってことで」

本の虫「ええ。最後にべつの世界について話してはいかがでしょうか」

トウマ「べつの世界？」

本の虫「ええ。貴方達の息子の話のif、いえあの忌々しい友人笑の無茶振りや元の世界を綺麗に纏めた（つもり）世界です」

アカコ「ふむ、この世界との違いは？」

本の虫「先ずは黒の自我がヒト由来にならないことです。ゆつくりと時間をかけてバケモノとしての自我を形成していきます。ですが紅と出会い、人としての側面を獲得する・・・というつもりです」

トウマ「へえ。紅の頑張りに期待だな」

本の虫「後はヒロインが諏訪子とクランドールのみになります」

アカコ「何故、妹をヒロインにするのですか？」

本の虫「えーっとですね後半で黒のが人間性を失わないようにするためのストップパ

みたいな？あとクランドールが初めの方から登場することになるかも？」

トウマ「あれ？・・・ということはさつきまでいた二人とかはどうなるんだ？」

本の虫「レミリアは義妹!!」

トウマ&アカコ「はい？」

本の虫「ルーミアは従者!!ヒロインにするかも!!」

トウマ「おい」

アカコ「さつきと言っていることが違いますか？」

本の虫「だって私はルーミア結構気に入ってるんだもん☆」

トウマ「・・・良い年したやつが『だもん☆』とかキツイぞ？」

本の虫「だまらっしやい!!あと紫はちゃんと娘ルートに入るよ!!」

トウマ&アカコ「はあ」

本の虫「あと君達にも手伝って貰うよ!ハッピーエンドのためにね!!」

騎士王「・・・なんとなくマーリンと同じ匂いを感じます!!」

本の虫「そんなことはない!!・・・はず」

花魔術「やあ!!」

トウマ「なんとなく苛ついたから成敗!!」

騎士王「手伝います！」

花魔術 「え?!」

騎士王 「エクスカリバー!!」

トウマ 「アメノムラクモ（原典）!!」

花魔術 「ゑ?!」

——ドッカーン!!

騎士王 「悪は滅びた!さらば!シロウのご飯が私を待っている!!」

トウマ 「ふう」

本の虫 「では、取り敢えず完結?おめでとう!!」

トウマ 「ぐだぐだだなあ」

アカコ 「何時ものことでしょう」

トウマ 「確かに」

クラン 「次回は設定集だよ☆」

本の虫 「私の台詞!!」

設定・・・なはず

名前：出雲 黒（イズモ クロ）

種族：黒色のバケモノ

容姿：黒い煙、霧↓黒髪、水色の瞳、中性的な美青年

能力：〔ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力〕、〔終わりと始まりを司る程度の能力〕、〔ありとあらゆるものを祓う程度の能力〕

二つ名：黒いバケモノ、柏手様、世界の守護者

危険度：普通

友好度：高

本作の主人公。妖精としての『一回休み』、『終わりは決して消え無い』という概念により全くとっていいほど完全に殺す手段が無い。諏訪子と強い繋がりがあり互いの存在を距離遮蔽物関係無く認識出来る。諏訪子とレミアア結婚した後、嫁が3人増えた。今は世界を守護しながら諏訪子達と世界の狭間で暮らしている。

名前：洩矢 諏訪子〔モリヤ スワコ〕

種族：白いバケモノ

容姿：白髪ロング、水色の瞳、スレンダーな美女

能力：〔坤を創造する程度の能力〕、〔終わりを齎す程度の能力〕

二つ名：白いバケモノ、柏手様の妻、滅びを齎す者

危険度：極高

友好度：極低

本作のメインヒロイン。最終的に白いバケモノに成長し、作中最強に成ったラスボス系ヒロイン。存在しているだけで世界の寿命を削る。世界を滅ぼさないよう黒と世界の狭間に隠居。黒の仕事を手伝ったり黒とデートしたりと楽しんでいる模様。

名前：出雲 クランドール〔イズモ クランドール〕

種族：大魔法使い（自称）

容姿：黒髪サイドテール、水色の瞳、蠱惑的な美少女

能力：〔ありとあらゆるものを曖昧にし破壊する程度の能力〕、〔並行世界を司る程度の能力〕

二つ名：大魔法使い、黒き魔王、気紛れな天災

危険度：極高

友好度：気紛れ

黒の妹。どこぞの魔法使いと魔法論議をしたり異世界を巡ったりした結果、大魔法使いに成長した。黒から独立して行動出来るようになった。黒の性質を持ち、強力な魔法や魔術を使う。最近では気紛れに人や妖怪を助けたり気紛れに地形を変えたりしてる模様。

偽名：エディ・トルロックダウン〔E d i・T o r l o o k d o w n〕

種族：本の虫

容姿：変幻自在

能力：【全知全能】〔ありとあらゆる本を読む程度の能力〕

呼び名：本の虫、俯瞰する編集者、アカシックレコード

危険度：無し

友好度：無し

作者の様で作者じゃない。ありとあらゆる事を識っている存在。好きなものはハッピーエンドとバットエンド。ありとあらゆるところに居て居ない。花の魔術師より面倒くさい。だがロクデナシでは無い。作者のしたいことの為に動くときもある（web

ルーレット)。賽の目（webサイコロ）で行動を決め、物語を引つ掻き回す。正しくジョーカー。

名前：レミリア・スカーレット

二つ名：紅魔館の女主人、柏手様の妻、気高き紅

危険度：極高

友好度：普通

本作ヒロイン。紅魔館ごと黒に着いてきた（紅魔館の住人の許可は取つてあるが妖精メイドは解雇し屋敷を小さくした）。黒やクラン、諏訪子、紅魔館の住人と楽しく隠居している。・・・済まないがリメイク版ではヒロインにはならないんだ、済まない。

名前：ルーミア

二つ名：常闇の妖怪、柏手様の従者、八雲の協力者

危険度：高

友好度：低

黒の従者兼嫁。今は八雲の元で幻想郷の管理の手伝いをしながら修行中。黒の唯一の眷属。自身の主を求めて彷徨っていた過去がある。咲夜や黒、クラン等から様々な技

術を吸収して成長している。リメイク版でもヒロインとして出てくる可能性がある。

名前：八雲 紫〔ヤクモ ユカリ〕

二つ名：幻想郷の管理者、妖怪の賢者、幻想郷最強

危険度：高

友好度：普通

黒の娘枠から（友人笑の無茶振りにより）ヒロインに大出世。幻想郷の管理の為に黒について行かなかった。クランドールや本の虫が偶に遊びに来るのが楽しみ。最近はルーミアと藍のタッグのお陰で残業なしでとても助かっている。

名前：霧雨 霊夢〔キリサメ レイム〕

二つ名：先代博麗の巫女、人里の守護者

魔理沙と結婚し霧雨の姓を名乗る。今は魔理沙と霊魔と人里で暮らしている。人里で簡単な札を売ったり結界を貼ったり妖怪退治をしている模様。最近は今代博麗の巫女の師匠をしている。

名前：霧雨 魔理沙〔キリサメ マリサ〕

二つ名：人間の魔法使い、人里の魔法使い

霊夢と結婚した。黒の起こした奇跡により授かった霊魔を可愛がっている。霊夢から甘やかし過ぎないようにと言われるのが何時もの光景。偶に霖之助が霊魔と遊びに訪れる様になった。

名前：霧雨 霊魔〔キリサメ レイマ〕

容姿：金髪、霊夢に似た顔立ちをした少年

能力：〔魔法を使う程度の能力〕〔霊術を使う程度の能力〕

霊夢と魔理沙の子供。魔法使いの才能と霊術の才能がある。活発で元気な少年。もしかしたら彼が人里の守護者になる日も来るかもしれない。

EXTRA

EX√ 「ずっと一緒に」

僕はさくさくと竹林を歩く。

100年能力の修行をしたお陰である程度の物は持つてくることができた。

竹林の分岐地点にきたので、一旦立ち止まってどこに行くか考える。

「どこに行こうか？」

「うーん。そうだ！あの八意とかいうずっと変わらない人間に会いに行ってみよう。」

目的が決まったので、昔その人間を見かけた方向へと歩き出す。

「方向は……まあ、ざっくりでいいか。」

「僕には時間だけはたっぷりあるからな。」



うーん。

僕が一人で「時間だけはたっぷりある」とかカッコつけてから数年がたった。

地形、変わったのかなあ……。

まあ、紅が「私の全部」をあげる」っていうののお陰で寂しくなく（旅への強制力？みたいなのは感じるが）1週間歩き続けられるぐらいの体力があるので焦ることはない。

「今日は流石に何処かに結界張って寝よう。物も食べたいし。」

ってなわけで川の近くに結界を張って、背囊から布団を出して広げる。

「あ。飯食ってない……。」

「・・・釣るか、魚。」

僕は釣りの道具を求めて背嚢を漁る。

確か釣り竿がここら辺に・・・つと。

あった。

さて、久し振りの釣りと洒落込もう!!

「よっこらせつと。」

川辺に丁度いい石を見つけたのでその石に腰を下ろす。

「釣りは久しぶりだなあ。」

「確か、紅とどつちが多く釣れるか競争したつけ。」

懐かしいなーと思いつつ糸を垂らす。

「お、かかった!!」

そんなこんなで二尾の川魚を入手した僕は、結界を張った場所へ戻る。

「妖術で火を浮かべて、魚の腸をとって、串に刺して焼く!!」

「できた。いただきます。」

結構美味しかった。

適当に塩をふったのが良かったのだろう。

僕は満腹になったので、布団で寝ることにする。

「おやすみなさい。」



気持ちの良い朝が来た!!

つて言いたいところだけど・・・

残念ながら寝過ぎたみたいでもう夕方だ。

「まあ、良く寝れたことには変わらない。」

「出発だ。」

僕は布団を背囊に収納し、また歩き出した。

「てか、どこへ何処？」

まあ、前途多難だな。

——王様

ん？

歩いていると何と無く呼ばれた気がしたのでその方向へ向舵を取る。

暫く呼ばれた気がした方へ歩いていると、其処には闇色の球？が有った。

何となく親しみ？みたいなものを感じる。

近寄ると闇色の球が崩れ、中から金髪の少女が現れた。

彼女は紅い瞳で僕を真っ直ぐ見据えた。

そして彼女は僕に向かって跪く。

「初めまして、愛しき我が王。私はルーミア。貴方様の名前を聞かせて貰えませんか？」

——ああ、きっと彼女は唯一無二の大切な眷属^{モノ}だ。

そう感じた。

「僕は出雲 黒。よろしく、ルーミア。」

「はい！黒様！」



僕はそれからルーミアと旅をした。

彼女は産まれてから僕を探していたらしい。

僕は彼女を快く受け入れた。

彼女はもつと命令が欲しいと不満気味だが永い時間でルーミアは成長していった。

ルーミアと観光したり、友と救世の旅に着いていつてみたり、絶景を二人で眺めたりもした。

ルーミアが居るだけで僕の旅は鮮やかになった。

ルーミアは永い時間を掛けて情緒が豊かになり、イエスマンじゃ無くなったことも大きい。

「黒様！次は射的？をしてみたいです！」

「よし、行くかうか。」

「はー。」

今僕達は縁日に来ている。

永い時間で人間は発展し、今は平安？という場所に都がある。

ルーミアはとも楽しそうに僕の手を引く。

昔の「黒様、私は貴方の下僕。私は貴方の命令が至上の喜び」とか言つてた時より今のルーミアの方が僕は好きだ。

「御二人さん熱いねー！ほい、おまけだよ。楽しんで行きな！」

「ご店主、ありがとう。」

菓子を売っていた屋台でルーミアに菓子を買つてあげると店主がおまけをくれた。

ルーミアと手を？ぎ、縁日を歩く。

「黒様、楽しいですね！」

「うん。」

——ルーミア、君が居るから楽しいんだよ。
こうして縁日の夜は更けていく。



「ルーミア、次は何処に行こうか？」

「ええつとですね．．．旦那様となら何処でもいいです!!」

「あー殆ど巡り尽くしたからね。」

「はい．．．あ!あの胡散臭い妖怪の賢者の言っていた幻想郷? っていうのに行ってみるのはどうですか?」

そう提案するルーミアの左の薬指には銀色の指輪が嵌っている。

随分前に僕はルーミアと結婚した。

知り合ひなんて殆ど居ないけど何処から聞いたのかイエスとエディは祝福を述べにきた。

それから僕達は世界をぐるっと一周し行けるところは行き尽くした。

紅の残した旅への強制力も無くなっている。

「確かにその幻想郷っていうのは気になるね。」

——幻想郷、忘れ去られた者の最後の楽園。

妖怪や神等の神秘は忘れられると消えてしまう。

それを掬い上げるのが幻想郷。

僕とルーミアは半ば妖怪では無い為か忘れ去られても消えることは無い。

世界は回り尽くしたし、そろそろルーミアとの家も欲しいかな？

「ルーミア、幻想郷に行こう。」

「はい！」

「あ、家ってどんなのがいい？」

「へ?!」



八雲紫によつて幻想郷に来てから数年が経つた。

僕とルーミアは博麗神社と人里の間らへんに屋敷を建てて暮らしている。

僕とルーミアは人間にしか見えない程の隠形が出来るので人里でデートしたりしても大丈夫だ。

因みに生活資金は現世の金を換金してもらつたものと妖怪退治や人里の手伝いで稼いでいる。

正直言つて換金した金で向こう1000年程は大丈夫な計算なのだが働かないとルーミアに駄目駄目にされそうだし、紫の要請もあり働いている。

とはいえ働くのは週に2日位だしその他の日はルーミアと家で過ごしたり、デートに行ったり、愚痴を言いに来た紫とルーミアを交えてお茶をしたりと穏やか？に過ごしている。

「旦那様、愛してます。」

「うん。ルーミア、愛してる。」

——これからもこの日常は続いて行くだろう。

日常を脅かすものを黒が排除しているから。

黒はルーミアが居ればいい。

ルーミアも黒が居るだけでいい。

彼等は今日もまた日常を謳歌する。

「幸せな彼等はずっとずっと一緒に暮らしましたとき。．．．ってね？」

EX√ 「面白可笑しく」

永琳と別れて（ツクヨミに爆殺されかけたが）から結構な時が流れた。

僕は今、海の向こうを旅している。

僕は昔に永琳の手伝いをしていた頃の知識で医者 of 真似事をしている。

ある日、救世主の噂を聞いた。

僕はその救世主に会ってみることにした。

思い立ったが吉日。

僕は救世主が滞在している町に向かった。

能力を使って空間を飛び越えたので救世主に会うことが出来た。

僕はその集団のまとめ役、イエスと言ったかな？に声をかける。

「君が救世主？」

「ええ。私が救世主と呼ばれている者だよ。何者でも無い者よ。」

「・・・僕が人じゃないのがわかるのか。」

「うん。貴方に頼みがあるんだ。」

「頼みとはなんだ？」

「神でも人でも無い貴方にこの旅の行く末を見届けて欲しい。」

「・・・いいよ。」

僕は何となくこの男の旅に興味が湧いた。



そうして僕が友に会ってから一年弱が経った。

僕は友と聖人達との関わりで未だに知らなかった事を沢山見聞きした。

だが、聖人の一人が騙され、友がが処刑されてしまうことになった。

「イエス、本当にいいのか？僕ならこの場所から君を助けられるが？」

「いいんだ友よ。これもまた神の試練だ。神は乗り越えられない試練を与えない。もし乗り越えられなかったら私がそこまでだったというだけだよ。」

彼は穏やかだった。

僕は彼に人々の魂が時折放つ強い輝きを見た。

僕は問うた。

「イエス、これが君の言っていた旅の終わりか？」

「友よ、死は終わりでは無い。君は約束を果たしてくれ。」

「・・・わかった。約束通り君の旅の行く末を見届ける。」

「それでいい。」

次の日、友が十字架に磔にされ処刑された。

ああ、なんて人間は愚かんだろう。

自分達を救おうとする友を処刑するなんて。

すると友の骸から光が出てきた。

眩しさに目を細め、周りを見渡すとこの光が見えているのは僕だけのようだ。

——友よ。

「・・・イエス。」

——私はどうやら神に成るみたいだ。

「それが試練を乗り越えた報酬か？」

——俗な言い方だとそうなるね。

「……友よ、君との旅は楽しかった。神になっても頑張れよ。」

——友よ、私も楽しかった。これは、キリスト神ではなく言わせてもらう。何者でもない者よ、友人として貴方の幸せを願ってる。

「ああ、ありがとう。」

そうして僕はまた旅を始めた。



「ひっぐ、えっぐ、ぐすん……」

それは偶然のことだった。

僕がエクソシストを辞め、深い霧の中を歩いているときに誰かの泣く声がきこえた気がした。

エクソシストの経験上、こういう深い霧の中で聞こえてくる泣き声っていうのは大概が罨なんだが、何となく違う気がした。

暫くその声が聞こえた気がした方に歩いていくと紅い館が見えてきた。

泣き声はあの館の時計塔の上から聞こえている気がする。

寝ている門番？にばれないように存在を曖昧にして時計塔に向かって飛んでいく。

其処には金髪の虹色の羽を持った少女が座って泣いていた。

「ひっぐぐ……」

「どうしたの？」

僕は彼女の横に腰掛け、声をかける。

「貴方は？」

「僕は黒。泣いている声が聞こえたんだ。君はどうして泣いていたの？」

彼女はポツポツと話し始めた。

彼女の名前はフランドール・スカーレットというらしい。

彼女は能力故に実の姉に地下に幽閉されているらしい。

その為、友人も居らずこの紅魔館の外の世界も知らないそうだ。

「ねえ、フラン。」

「なあに？」

「僕と友達になろう？」

「えっ……いいの？」

「うん。僕には友達は殆ど居ないけどフランの話し相手位はなれるかな？」

「なれるよ！やった！初めてのトモダチ！」

そうして僕はフランと友達になった。

それから僕は紅魔館の近くにセーフハウスを作り、夜になったら紅魔館に侵入して時計塔でフランと話すという生活を送った。

「ねえ、クロく。外ってどんなところなの？」

「うーん。・・・一言でいうと変なところかな？」

「変なところ？」

「うん。いいところもあれば、嫌なところもある。そんな変なところ。」

「じゃあ、私何時かクロと行ってみたい！」

「いいねそれ。何時か行こう。」

「うん！」

「そうだ、指切りしよう。」

「指切り？指を切り落とすの？」

「違う違う。フラン、こうやって小指を出してみて。」

「(こ)う？」

フランの小さな小指に自分の小指を引っ掛ける。

「指切りげんまん、嘘ついたら・・・どうする？」

「うーんとね、腕と足を切り落とすの！」

「わかった。よし、改めて：指切りげんまん、嘘ついたら腕と足を切り落とす。指切った。」

「た！」

フランと笑い合う。

僕はフランとのささやかな約束位は叶えてあげたいと思った。

その為なら腕や足の一本二本は必要経費だ。



一人で泣いていた満月の夜のことだった。

「どうしたの？」と横から声が聞こえた。

横を向くと黒い髪に水色の瞳をした気配のあやふやな不思議な人が座っていた。

紅魔館の人じゃないみたいだし門番の美鈴は何をしているのだろうか？

その人は私に何故泣いていたのか聞いてきた。

私はパチュリーから悩みというのには人に聞いてもらった方が楽になるという言葉を思い出して、何となく話してみることにした。

そうして話を聞き終わったクロは言った。

「友達になろう」って。

その日私に初めてトモダチが出来た。

クロは毎日来てくれていろいろなことを話してくれた。

クロの膝の上でクロの話を聞くのは大好きだ。

私は少しクロと外に行ってみたいと思った。

そしたらクロが指切りというのをしようと言ってきた。

指切りって指を切り落とすのだろうか？

クロが言うには約束事をするときの儀式みたいなものらしい。

クロが「嘘ついたら・・・どうする？」と聞いてきたので腕と足を切り落とすと言ったらクロは「指切りげんまん、嘘ついたら腕と足を切り落とす。指切った。」と約束してくれた。

そうだ！今度パチュリーに指切りのこととか外のこととか聞いてみよう！



何時もの様にフランに会いに行くとき計塔の上にはフランではない人物達がいた。

何時も眠っている門番、紫色の魔法使い、青い髪のフランに似た少女だ。

青い髪の少女の紅い瞳が僕を見据え、彼女は口を開いた。

「貴方がクロね？」

「そうだけど、君達は？フランは何処へ？」

「フランは地下に居るわ。パチュリーから聞いて貴方の存在に気付いたの。貴方は危険そうだからこの館の全力を以って殺すわ。」

「……フランを閉じ込めた姉って君？」

僕は冷静に目の前の青い髪の少女に問う。

「ええ、そうよ。私はレミリア・スカーレット。こんなにも月が紅いから、本気で殺すわよ。」

「そっか。じゃあ、取り敢えず泣かす。」

僕はエクソシスト時代に使っていた白鍵という強度を上げた幅広剣の形をした黒鍵の亜種を取り出し右手に構え、左には黒鍵を4本挟む。

……これ指が結構疲れるからやりたくないのになあ。

「つ!!それは聖堂教会の!!」

「僕は元だよ。今は只のフランの友達。」

昔はとある機関に所属して吸血鬼狩りと肩を並べてたけどね。

「白々しい!!美鈴、パチエ!!行くわよ!!」

レミリア達が攻撃を開始する。

美鈴は氣を纏い、こちらに突進。

レミリアは魔法で出来た槍?を構え、魔法を乱射しながら美鈴の後を追う。

パチユリーは魔法の並列展開で二人の援護。

いいチームワークだ。

「済まんが少し頭に来てるんでね。友よ、使わせてもらうよ。……レミリア・スカ
レット。僕のコレはちと痛いぞ?」

「まさか!!美鈴、パチエ、あれを阻止して!!」

「レミイ、アレは何?!!」

僕は昔に友と作り出した、今風に言々と洗礼詠唱を使う。

「——生きとし死せるもの、この詩を聴け。留まり動かぬもの、時を奏でよ。」

【彩光乱舞】!!

【スピア・ザ・グングニル】!!

【賢者の石】!!

飛んでくる5色の弾幕を避け、美鈴の乱打を左の黒鍵で往なし、レミリアの槍を白鍵で弾く。

「——遍く全てに価値は無く、遍く全てに価値は有る。遍く全てに価値は付けられない。」

「はあ!!」【スカーレットシユート!!】

「レミイ、援護するわ!」

レミリアの抜き手を躲し、飛んでいく弾幕を黒鍵で往なし、切り裂く。

黒鍵は霊的なものに強く作用する。

魔法の核は霊的なものだ。

見えるなら、斬れる。

「な?!魔法の式を斬ったですって?!」

「——たとえこの手が血に濡れようと、たとえこの剣ツルギが碎け折れようと、私は奏でる、
終末オワリの音を。」

「不味い!!」

レミリア・スカーレット、もう遅いよ。

「——私は否定する、終末無きものを。私は肯定する、遍く全ての終末を。」

「レミイ、下がって！」

「わかったわ！美鈴！」

「はあああ!!【極彩颱風】!!」

「——賽は投げられ、路は交わった。私は光明、遍く全てに救済を与える。さあ、——
永遠に終止符を。」

白鍵や僕の霊力が青い色を帯びる。

僕の洗礼詠唱は彼等が使うものと異なり、空間ではなく僕の力に作用する。

『永遠に終止符を』を使用したあと5分間、僕が発する力はどんなものにも
必ず割合ダメージを押し付ける。

要するに○撃必殺というやつだ。

踏み込んで加速、先ずはパチュリーの前に躍り出る。

フランはパチュリーは頼れるお姉さんと言っていたので意識ろ刈り取るだけで済ませて転がしておく。

「よくもパチュリー様を！」

「済まんが転がってろ。」

飛びかかって来た美鈴の片脚を切り飛ばし、左の黒鍵全てで残った手足の骨を穿く。

僕は上を飛んでいるレミア・スカーレットを見る。

彼女は狼狽えていた。

「そんな、一瞬で?!」

スキだらけだよ。

僕は彼女にに向かって最高速度でただただ真っ直ぐに進む。

確認したことは無いが瞬間的になら音速の3倍ぐらい出てるのでは無いだろうか？

「な?!ぐあつっ」

僕は左腕で彼女の首を絞めながら持ち上げる。

今も僕の青い霊力は彼女を焼き続けている。

吸血鬼狩りは専門じゃないんだけど、確か刻んだだけじゃ死なないんだっけ？

「あな、たにフランは、殺させない、わ……!!」

レミリアは僕の左腕を両手で握る。

……ていうかコイツなに言ってるんだ？

「…………おい、レミリア・スカーレット。僕にフランを殺す気は無いぞ?」

「は?…………貴方は、聖堂教会の、回し者じゃ、ないのかしら?」

「違うけど。」

少し誤解があるようなのでレミリア・スカーレットの首から手を離す。

暫く彼女の首に青色を帯びた白鍵を突き付けながら聞いたところ、彼女は僕がフランや彼女を殺しに来たと思つた様だ。

・・・そもそも僕が彼女を殺しに来たんだつたら数週間前に殺してるよ。



「クロ、あつちに行こう！」

「はいはい。」

「むう。反応薄いよ何やってんの！だよ！」

「・・・何故そのネタを。」

僕は今、幻想郷の人里を克蘭に手を引かれながら歩いている。

あの紅魔館での激闘？の後、レミリア達とは和解し、フランの要望により僕は紅魔館に住むことになった。

そうしてメイドが増えたり、美鈴をフランとフルボッコにしたりして楽しく生活していたのだが科学が発展した結果神秘が減り、フラン達が弱ってきたので、数年前に八雲紫という妖怪により幻想郷に紅魔館ごとお引越した感じだ。

僕とフランは異変解決を手伝ったり、弾幕ごっこをしたり、殺し^{愛し}合ったりして過ごしている。

……拝啓、居るかわからない天国の母さん。彼女は肉食系でした。

そんなこんなで僕とフランは面白可笑しく日常を満喫している。

何時か来る終わりに向けて後悔の無い様に。

それまではフランを泣かせはしないし、フランと一緒に居ようと思う。

「そうしてこの世界の黒は彼女と楽しく、最後まで面白可笑しく過ごしましたとさって

ね
？
」

EX 「とある観測者の日記」

◇◇今、これを読んでいる私から見て2万光年前

今日、というか今の世界線で面白い物を見かけた。

私が2万光年後位に読み返す未来が見えたのである程度細かく記載しておくことにする。

見たものは『有り得そうで有り得ない可能性』だ。

今いる世界線は数億前に龍神——創造神に類する存在——が創った世界から数万年前に分岐した並行世界だ。

(もし気になったら行けるように時間座標と世界変動率を此処に記しておく。)

その『有り得そうで有り得ない可能性』の名は『黒』。

『滅び』であり『無』、『始まり』にして『終わり』。

概念が無数分の一の確率、いや奇跡的に自我を『学習してしまった現象』。

この世界に現れた、いや発生した『黒』は魂を学習し、魂を創った。

その魂は人として生まれ、死んだ。

そして『黒』はその魂を回収し、『黒という現象』に組み込んだ。

その瞬間、無数の分岐が発生した。

それにより『黒』は様々な姿形をとるようになった。

例えば『少女の家族になつた化物』、例えば『異界の英霊の紛い物を手本にした妖精』、

例えば『未来の異端者を取り込んだ無貌の神』、例えば『無垢な化生』。

それの他に私のように世界線を認識出来る存在もいた。

これからも産まれていくだろう。

私は世界線を行き来しているため数万光年もの時間差が発生しているが、彼彼女らか

らしたら一瞬に過ぎない。

その点に留意されたし。

……何故かレポート臭く成ってしまった。

◇◇あー面倒臭さいから時間座標■■■■に居た頃。後は自分で思い出せ

日記を書く気になったのは私が増えたからだ。

正確には違うが、目出度いことだろう。

彼女の『成り果てる前の名前』はパチュリー・ノーレッジ。

龍神が創った世界変動率3未満の世界に居た存在であり、その世界ではただの百の時を研究に宛てた魔法使いに過ぎなかった。

だが、『黒』——今回から『あの現象』によつて発生した存在もそう呼称する——の一つの可能性の『クロ』という猫、か? . . . 猫又? を使い魔にしたことで運命が変化しようだ。

本来發揮されることのなかったはずのパチュリー・ノーレッジの才能——日月火水木金土の属性に加え、時と星、そして聖魔混沌の属性——を發揮し、『全知全能』に成り果てた。

彼女はそれを回避しようとしたようだが、結局『エディ・オスマンサス』——『裏側の魔女』、『銀木犀』——が誕生していることから徒労に終わってしまったのだろう。

まあ、しかし、彼女のお陰でまた別の可能性が出てきた。

その可能性は『同一存在が同時時間軸に存在出来る』というもの。

これなら、元の『壊れてしまったアノ世界』を再構築——いや、正しい分岐を創り出せるかも知れない。

……『無貌の神』を一石として投げれば上手く行きそうだ。

◇◇最近書いた……と思う

持っていた時計が壊れていたのに今気付いたため正確な時間軸がわからない。

まあ、とても面白いことに成っている。

……奴——『黒』は悉く修羅場というものに好かれているようだ。

愛する者によつて左腕を失い、魂まで歪むとは滑稽極まりない。

それはさて置き、『無貌の神』を『黒い化生』の世界線へ導くための種はまき終わった。これでアノ世界は正しい分岐を——私が見れなかった『私の原典』を見ることが出来る筈だ。

結局のところ、私はパチュリー・ノーレッジが成り果てた存在でないのは確かだ。

では私は誰だったのだろう？

何処から来て、何処に往くのか？

私はそれが知りたい。

『私』であり、『私の原典』ならこの問いの答えを持っている気がする。

・・・「気がする」とは全知全能が聞いて呆れる。
まあ良い。

後は時を待つだけだ。

待つのに慣れている。

何せ無限で一瞬に生きるのが『エディ・トルロツクダウソ俯瞰する編集者』というものなのだから。

EX, Another√「銀」

「まったく……上はなにやってんだ?!

「まったくもってその通りね」

サービスキヤップを深く被った青年が敵の射線から隠れながら、自身の相棒——ナタルに通信で愚痴をこぼす。

ナタルは青年——ネームレスの愚痴に苦笑しながら物陰からアサルトライフルを敵の居る方向に連射。

ネームレスは物陰からちらりと周囲を確認し、ナタルに気を取られた敵の頭部を狙撃する。

「ネームレス、貴方よくそれで当てられるわね」

「腕のいい相棒のお陰かね」

二人は軽口を叩き合った後に二手に分かれ、敵の数を減らしていく。彼らは元傭兵の軍人。

二人しかいない特殊部隊。

国の長の指示で動き、敵対者やテロの芽を摘む者。

「……クリア。周囲に生存者ゼロ。ナタル、お前の方は？」

「此方もクリアよ。周囲に生存者ゼロ。あるのは盗まれたと思われる『マルチフォームスーツ』位ね」

「あー。あの『天災』が作り上げた発明品か」

「ええ。まあ、貴方を差し置いて『天災』とは笑えるけどね」

ナタルは「貴方の方が余っ程常識外れよ」と笑う。

ネームレスは「まあ確かにな」と同意し、周囲を警戒しながらナタルに合流するために歩く。

ネームレスはナタルのナビゲートで彼女のいる倉庫にたどり着く。

その倉庫には『天災』が作り上げた発明品——『マルチフォームスーツ』が佇んでいた。

「さて、『マルチフォームスーツ』をどうしましょうか」

「んーそうだな。型式からして……ウチの試作機じゃねえかコレ。盗まれたっていう報告は無かった筈だが」

「いよいよよきな臭くなってきたわね」

「何時ものことだろ」

「……そうだったわ」



「……………ナタル、起きろ」

すやすやと先程まで俺も寝ていたベッドで産まれたままの姿で寝ている相棒の肩を揺する。

「ん……………今何時？」

「7時。さっさと服着ろ」

俺はナタルに手短かに時間を伝え、持って来た彼女の服を投げ渡す。

それを受け取ったナタルは何を思い付いたのか、Yシャツを胸を隠す様に持ち、ニヤニヤとした。

「いやんエッチ♪」

「はっ倒すぞ」

イラツと来て拳を握る。

一変病院送りになりたいのだろうか？

「まだ死にたくは無いから着るわ……でも別にそれ以上も見てるんだし良くない？」

俺と彼女は恋人という訳では無い。

長期潜入任務で色々あり、その爛れた関係がズルズルと続いている。

……ナタル、駄目人間だけど魅力的ではあるんだよなあ。

「人としてやってやつだよ。それに今日はアレの稼働実験だろ？」

「そうだったわ！」

ナタルは今日の用事を思い出したようで、急いで服を着始める。

今日は俺と彼女が回収した『マルチフォームスーツ』試作機の正式採用型——確か開発コードは『銀の鐘』だっけか？——の稼働実験の日だ。

あの数週間前の任務の後に『世界初の男性操縦者』が現れたりしてばたばたした後、ナタルと俺はテストパイロットに抜擢された。

何の縁かは知らんがああ『試作機』のコアを流用したらしい。

俺は何時もの様に朝飯を作り、テーブルに並べる。

「いただきます」

「……相変わらずネームレス、貴方の料理は美味しいわね」

「そりゃどーも」

「今考えると貴方って案外優良物件よね」

「そうか？……でも、俺は異端者だしなあ。まともな恋愛とかは無理だろうな」

現にナタルとの関係も健全とは言いがたいし、愛と云うものはとうに擦り切れちゃったしな。

感情とかは擦り切れてんのにまるで人間の様に身体的な欲求は残ってるから不思議なもんだ。

「ふふっ……ええ、確かにね。貴方は異世界神だものね」

「まあ、何でこんなのが神様してんだらうな」

クズ、異端者、ヒトデナシロクデナシ……悪口悪評といったものは言われ尽くしたのでは内だろうか？

このナタルとの世界は何個目の世界だろうか？

そもそも俺は居て良いのか？

「やあ？」

俺のぼつりと溢した疑問にナタルはいたずらっ子の様に微笑んで首を傾げる。

何となく救われた気がした。

「……だから俺はこの関係をズルズルと続けたいんだらうなあ。」

そうしている内に時間は過ぎ、食べ終わった食器を二人で片付ける。

窓を締め、家の鍵を閉め、傭兵時代から愛用している二人乗りのバイクに跨がる。

ナタルがヘルメットを被り、後ろに乗ったのを確認し、クラッチを握りながら右足を地面につけ、左足で1速に入れる。

「ナタル、行くぞー」

「ええ」

さて、今日も頑張りますかね。



— System, Boot:

私の装着している『銀の福音』が起動を開始する。

ハイパーセンサーで見るとネームレスは近くで見守ってくれているみたいね。

この子の稼働実験もこれが最終工程。

それに今日、この稼働実験が終わったらネームレスに渡さなきゃいけないものがある。

まったく困った神様ね。

— System, All Green.
— 『Silverio Gospel』, start up.

「こちら、ナタル。『Silverio Gospel』起動を確認。異常は診られないわ」

「——了解。PIC及びメイン、サブスラスタの動作確認を?!」

「どうしたの？」

オペレータとの通信が途切れる。

私の疑問に答えたのは情報端末を見ていたネームレスだった。

「不味い、襲撃だ!!稼働実験は中止、奴らの狙いは『銀の福音』だ!!逃げるぞナタル!!」

瞬間、稼働実験場の天井が崩落した。



「不味い、襲撃だ!!稼働実験は中止、奴らの狙いは『銀の福音』だ!!逃げるぞナタル!!」

俺は急いで状況を把握する。

——上か!!

俺は『銀の福音』の姉妹機である『銀の御旗』を装着、崩落してくる天井に向けてA I C慣性停止結界を全開にする。

「はっ、がら空きだぜ!! 銀色お!!」

「な?!」

横から大きな装甲脚を装備した『マルチフォームスーツ』を着た女性が襲いかかつてくる。

その装甲脚はA I Cを使用していたことにより、がら空きだった俺の胴を薙ぎ払った。

俺は背中から壁に叩きつけられる。

・・・痛えなあ。

A I Cによる押さえが無くなったことにより、崩落してくる天井の向こうでナタルが声を上げるのが見える。

「ネームレス!!」

「つたく。ナタル、逃げろ!! 時間は稼ぐ!!」

「~~~~!!」

ナタルは天井によって見えなくなった。



「……ネームレス、貴方に……これを」

「銀色の十字架?」

「……誕生日プレゼント、よ。貴方が、前に言っていた名前を、考えたの、よ。顔のない神様、ニヤルラトホテプ。どう、かしら?」

「ああ……良い名前だ」

「それなら、良かったわ。『銀この福こ音』と、飛べなかったのと、貴方と、もっと、居れなかったのが、後悔ね……ネームレス、いえ、ニヤル。愛してるわ」

「……こんな化物に情でも湧いたか？」

「ええ、だって、私を、見て、くれたから。化物だろうと、関係無いわ」

「……」

「私は、幸せ、だったわ。貴方も、幸せになって、ね？」

「……ああ」

「私の、物は、好きに処分して、くれて、構わないわ。ニヤル、愛してる、さような、

ら………」



腕の中で息絶えたナタルを見る。

まるで眠っているようだ。

だが、もう目を開けることは無いだろう。

「ナタル………」

「ははは!!お前も今すぐソイツのところに送ってやるよ!!」

「………初めてだ」

濟まないな、『銀の御旗』。

今から俺はお前を人殺しの道具として使う。

——マスターの御心のままに

．．．．．ありがとう。

「あ?」

「．．．．．怒り、憤怒つてのはこんなもんだったんだな。ああ、済まないなナタル。俺はお前を愛していたみたいだ」

「何をごちやごちやと．．．．．」

”黙れ”

俺はA I Cで奴の動きを停める。

「あ?．．．．．動かなねえ?!

そりやそうだろう。

何せこの『銀の御旗』は容量の殆どをA I Cに割いているから。

本来は『銀の福音』の盾役だったんだから。

リミッターを外せば倒壊したビルをも受け止める程の出力がある。

「——ラーフフィスト」

背後のサブアーム一対が展開し、計四本の腕をもった異形の『マルチフォームスーツ』。

俺はラーフフィストというマニピュレーター型ワイヤーアンカーを射出し、奴を拘束する。

「こんなもん引き千切ってやる!!」

「いや、そのまま死ね」

ワイヤーを巻き取り、奴に高速接近。

膝の装甲が展開し、パイルバンカーが顔を出す。

俺は膝蹴りの要領でパイルバンカーを奴に叩き込んだ。

グシヤリ、と何かを潰すような音をハイパーセンサーが拾う。

奴の断末魔の言葉も。

「……地獄に落ちろ、か。済まんが俺のほうが閻魔より強いんでな。当分落ちることは無いだろうな」

俺はナタルの遺体を優しく抱え、スラストを吹かす。

取り敢えず、帰ろう。

俺とナタルの家に。



「……ナタル、お前のことは連れて行く。俺の自分勝手を恨んでくれて構わない。

何せ終わりのない旅路だからな……俺は、探してみるよ。幸せってやつを」

——行きましょう、マスター

「ああ、『銀の御旗』。行くか」

TR√「運命の出逢い」

此処はとある山奥。

其処のさらに奥深い場所でポンチヨを着た黒髪の青年がため息をついていた。

「……はあ」

僕は出雲黒。

今はしがない旅人だ。

何でため息をついてるかって？

それは僕の周りに広がっている惨^{ホロホロの妖怪達}状が原因かな。

因みにこの周りに転がっている妖怪を伸したのは僕だ。

戦い方を教えてくれた母^{アカカコ}さんには感謝しないとな。

「綺麗な景色の良さも半減だよ．．．．はあ」

そんな僕は今、天狗の里に来ていた。

人間に間違えた挙げ句、証拠隠滅のために襲い掛かってくるとか世も末だな。

いや、妖怪とは自分勝手に自分本位こういう生き方が当たり前だったな。

倒れている女天狗が呻く。

「うう．．．．貴様、私達に手を出して、此処を無傷で出られると思ってるのか？」

「思ってるよ。僕を倒したかったら神様でも連れてくるんだね．．．．ま、返り討ちにするけど」

黒はため息をつき、自身の服をに着いた砂埃を叩いて落す。

彼は百年の修行で自身の能力を掌握し、アカコの遺した補助輪道士服を必要としなくなっ

た。

故に彼はそのアカコが遺した道士服大切なものを傷付けないように仕舞っている。

さてさて、見せしめに一体位なら惨殺するかなーと思っただけど無駄な恨みは買いたくないしなあ……。

よし、偉い奴に会いに行こうか。

「ねえ、其処の女天狗」

「ひっ……な、なんだ」

「此処の長の所まで案内してくれるかな？」

「わ、わかった（くっ……四天王様からお叱りを受けるが、貴様はもう終わりだ!!）」

さてと、此処の長はどんな奴かな？



暫く時間が経ち……

天狗の里の更に上、山の頂上では大地が所々陥没しており、何か大きな者が戦ったかのような惨状が広がっている。

その中心には黒髪出雲の青年と薄い茶髪伊吹の鬼萃香が居た。

だが、黒は無傷で立っており、萃香はポロポロで仰向けに寝転がっていた。

「いやー参った参った!!」

「はあ……」

「嘘でしょ、萃香様が負けるなんて……」

まあ、結論だけ言うと伊吹萃香という此処の四天王最強を倒した。

いやね、この萃香っていう鬼は強かったよ？

妖怪にしては最強クラスだったんじゃない？

でもね、僕はこれでも『始まりの妖怪』だから力や経験で負けるわけには行かないんだよ。

「気に入った!! あんた、なんて言うんだ?」

「僕は出雲 黒。今はただのしがない旅人だよ」

「そうか!! 黒、また来な!! 今度は宴を開いてやるよ!! . . . 誰も殺さなかつた礼も兼ねてね」

「ふう. . . . 気が向いたらね。じゃあ、また会おう伊吹萃香」

「ああ!! またね!!」

萃香が小さな手をひらひらと振ってくる。

彼女の純粋な橙色の魂には好感が持てるね. . . . 戦闘狂じゃなきやね。

僕はそれに手を振り返してから背を向ける。

そうして僕はまた宛もなく歩き出した。

『良い？ 貴方にはきつと良い出会いがあるわ!! それもとつつつても素敵な運命の出会いがね!!』

「紅、運命の出逢いは未だみたいだ……僕にそんなモノ、訪れるのかねえ」

僕は昔、義理出の姉雲である人間紅が言った言葉を思い出して苦笑する。

さあ、次は何処に行こうか。



更に時間が経ち……

黒は栄えている国に訪れていた。

「へえ、此処が神様が治める国か」

僕は今、諏訪の国という神様が治めているという国に来ていた。

「僕は旅をしている者ですが……」と言ったら結構簡単に通してくれた。

国として大丈夫か？

……と、思ったけど国自体に大妖怪クラスじゃないと破れない程強い結界が張つてあった。

まあ、僕は素通りしたけども。

害する気は無いから許してくれ……気付いては無いと思うけど。

「ふむ、神様が治めてるからなのか空気が美味しいな」

……それに人々の魂に濁りが少ない。

それに濁り……いや、穢れが少な過ぎない。

うん、好感が持てる。

此処は結構良い神様が治めてるみたいだね、会うのが楽しみだ。

周囲の活気のある人々を見回して黒は無意識の内に楽しそうな笑みを浮かべる。そうして黒は諏訪の国を散策するために歩き出した。



暫く市場を散策していると端の方で露店を広げている少年の魂の輝きが黒の目を引いた。

「へいらっしやい!!」

「こんにちは、これは?」

少年の元気な声に黒は挨拶を返し、少年が広げている大きな笠について聞いた。

「ああ、それは市女笠つつー代物よ。イカしてるだろ？……一つしか無いけど」
「へえ……丁度笠が欲しかったところだし一つ貰っても？」

「おうよ！金は良いぜ。売れ残りつつーか試作品みたいなもんだからな！！」

少年に黒は少し驚く。

この精密に編まれた笠をこの少年が一人で作ったとは少年にしては考えられない程の聡明さだ。

黒は少年から市女笠を受け取る。

「そうだ、泊まる所を探しているんだが……良い所を知らないかい？」

黒は少年から貰った大きめな市女笠を被りながら言う。

「お、それならおらの家に来ねえか？宿をやってるんだ！」

「ほう、これもなにかの縁だお邪魔させていただくよ」

「おう！じゃあ、ついて来てくれ」

少年は敷物を畳み、黒を先導する。

黒は不思議な縁を感じながらその少年について行った。

「む、この市女笠っていうの被りやすいな」

「本当か?!」

「ああ」

「そうだ！ウチに泊まるんだったら後で市女笠の作り方と直し方教えてやるよ!!……」
「売れないしな」

「ふむ、じゃあ代わりに何か教えて上げよう」

「え、良いのか?！」

「良いとも、僕に教えられることならね」

「じゃあ読み書きとか計算を教えてください!!」

「ああ」

黒は嬉しそうに笑う少年に頷いた。



あの後、少年に連れられてたどり着いた少年の母が一人で経営している『白樺の宿』は

閑古鳥が鳴いてはいたが、とても良い宿だった。

部屋もしつかり清潔にされ、料理も客の健康を考えたうえで美味しく作られていた。要するに知る人ぞ知る名宿というやつだな。

因みに少年の名前はジロウと言い、働きに出た年の離れた兄が一人、幼い妹が一人、父は既に他界したそうだ。

ジロウは頭がよく、一週間程で読み書きに加えて四則算を完璧にした。

……永琳の所の豊姫を思い出すなあ。

「クロ!!草履の編み方ってこれで合ってるか?」

「おお、上手く出来てる!!直ぐにでも売り物に出来そうだね」

「よっしゃあ!!もつと作るぞ!!」

僕はこの広い諏訪の国を見て回る拠点として『白樺の宿』に泊まっている。

その傍らでジロウに様々なことを教えている。

ジロウ曰く「母ちゃんを少しでも楽させてあげたいんだ!!」とのこと。

因みにここ二週間の間にちよくちよく此処の神様が祀られている諏訪神社に訪れているのだが神様は不在だった。

今日、また行ってみよう。

そしたら会えるかもしれないしね。

「クロ、何処か行くのか？」

「ああ、少し神社にね」

「へー。おらは草履売りに行つてくら!!」

そう言つてジロウは敷物と作つた草履を抱えて市場の方へ駆けて行く。

僕は市女笠を少し上げてジロウに手を振る。

「気を付けろよー」

「おう！クロも神様に会えると良いな!!」

さてと、行きますか。



黒が神社への石段を登り切ると、其処には緑髪の巫女服の女性が箒で境内の落ち葉を掃除していた。

彼女は石段を登って来た黒に気付くと掃除を一旦辞めて黒に声を掛けた。

「あ、旅人さん。おはようございます！」

「巫女さん、おはよう」

「別に大樹と呼んでくれても良いですよ？」

「はは、考えておくよ巫女さん」

「もう！．．．．．と、今日も参拝ですか？」

「ああ」

「では、どうぞごゆっくり」

僕は巫女さんにひらひらと手を振って神社の方に向かって歩く。

彼女は東風谷 大樹。

此処の風祝という巫女をやっている女性だ。

最近をよく会っているので「巫女さん」「旅人さん」と呼び合うちょっとした知り合いだ。

暫く歩く。

眼の前には此処二週間で見慣れた諏訪神社がある。

僕は一応参拝の手順に則って二拝二拍手一拝。

「相変わらずこの国にお世話になっています．．．．．今日も居ないか」

今日も此処の神様は留守の様だ。

だが、居るのは確かみたいだ。

彼女（神力の性質から判断した）が残している神力の残滓は透き通っており、会うのが楽しみだ。

．．．．二週間も会えてないが。

僕は神社に背を向ける。

「さて、帰るか．．．．」

「．．．．ねえ、其処の君」

「ん？」

神社の方から声を掛けられた。

僕は振り向き、彼女の姿を見る。

「君、何も……」

「君はだ……」

僕は彼女を見た瞬間——時が止まったように感じた。

金の長髪に、透き通る水色の瞳、神々しい気配。

彼女が此処の神なのだろうと直感する。

それ以前に、美しい。

魂とか外見とか仕草とか……全てが愛おしい。

彼女が欲しい、彼女を抱き締めたいと思った。

まるで足りなかったものを見つけたかのようにカチリと嵌まる。

「僕は出雲 黒……君の名前は？」

「私は、洩矢 諏訪子……ねえ、出雲 黒。私は、君が欲しい」

「うん？」

あれ、話が可笑しいぞ？

彼女から蠱惑的な雰囲気を感じる。

それも美しいと思う。

紅が言つてたな、『相手の事しか考えられなくなる』と。

僕はこれが運命の出逢だと思った。

取り敢えず彼女に声をかける事にする。

「取り敢えず、何処かで話さない？」

「良いよ、神社の中で話そう」

洩矢諏訪子が金の髪を翻し、神社の方へ歩いて行く。

僕は彼女の後を追って歩き出した。



大樹から三日に一度参拝に来る旅人が居ると聞いて少し気になった。

何故、旅人なのにこまめに来るのだろう？

大樹に会いに来ている訳では無いみたいだし。

少し見に行つて見ようかな。

今、神社に参拝しているようだ。

ふむ、『相変わらずこの国にお世話になっています……今日も居ないか』……
?!

居ない?!

私のことを認識している？

ちよつと会つとかないと不味いかも。

私はその旅人が帰ろうと神社に背を向けた瞬間に神社の前……要するに旅人の背後に転移する。

大樹以外の人に声を掛けるのは久しぶりだ。

私は慎重に彼に声を掛けた。

「……ねえ、其処の君」

私の声に反応し、彼がこちらを向く。

「君、何も……」

「君はだ……」

相手の正体を聞こうとして、彼を真つ直ぐ見る。

——綺麗だ。

言葉が詰まってしまった。

身体が熱い。

本能が、魂が、私が、彼を、彼の魂を、彼の全てを求める。

嗚呼、これが一目惚れというものか。

彼の一挙一動から意識を外らせない。

「僕は出雲 黒……君の名前は？」

彼が口を開いた。

君の名前は出雲 黒って言うんだね。

「私は、洩矢 諏訪子……ねえ、出雲 黒。私は、君が欲しい」

「うん？」

彼が疑問符を浮かべる。

……やっちゃった!?

不味い不味い!!

変な女だと思われた?!

大樹、こういう時はどうすれば良いの?!

そうやって表内心めっちゃめっちゃテンパってに出さず表情を保っていると彼がもう一度口を開いた。

「取り敢えず、何処かで話さない?」

……絶好の機会だ。

「良いよ、神社の中で話そう」

私は神社の境内に強い結界を気付かれない様に張り、神社の中へと彼を先導する。

ああ、確かに、人が言うように恋とは厄介なものだ。

もう、ここまでしてしまったんだ。

出雲 黒、君を絶対に逃さない。



暫くして……

諏訪神社の中で黒と諏訪子は話していた。

「えっ?!黒って人間じゃ無かったの?!」

「うん。ごめんね」

「ううん、全然大丈夫だよ!!」

暫くして僕と諏訪子は互いに名前で呼び合う程、仲良くなった。

……僕の自惚れでなければ、諏訪子は僕のことを嫌ってはないみたい。
と、思いたいなあ……。

「黒はどうして此処に?」

「ああ、旅をしてたんだ。それで神様が治める国の噂を聞いて此処に来たんだ」

「へえー。黒から見てこの国はどう？」

「とっても良い国だよ。活気もあつて、魂の濁りが多過ぎず少な過ぎない。だからこの国を治める神様に会いたかったんだ」

「……で、会った感想は？」

「美し……えっと、抱き締めたい？」

「……」

……あー、やらかした。

永琳に「貴方は思ったことを直ぐ言いやすいから気をつけたほうが良いわ……何時か苦労するわよ（主に恋愛で）」って言われたじゃん!!

最後の方、小声でなんて言ってたんだらう？

まあ良い……………どうしよう?!

すると暫くして諏訪子が口を開く。

「……………じゃあ、抱き締めてみる？」

「え？」

其処で僕の記憶は途切れた。



「ううん……」

目が覚める。

うーん、温かい？

何と無く横を向く。

「すう……」

直ぐ横には愛おしい諏訪子の可愛い寝顔。
但し、服は着てない。

……ん???

どういうこと?!

.....。

.....落ち着け出雲 黒。

僕も服着てない!!

.....。

びーくーるだ。

SAN値直葬☆謎の粘液触手

永琳も哀れなクリーチャーを前に「びーくーる、びーくーるよ」って震え声で.....

それ駄目だったやつう!!

(永琳と黒は粘液触手と涙目で格闘した)

「ううん.....?」

諏訪子が身動きする。

.....あれ、状況把握ができてないタイミングでこれは不味くない??

昨日?の僕、何したの?!

「く、ろ．．．．．?、．．．．．え?! 夢じゃ無い?!」

諏訪子は完全に目が覚めたみたいだし、聞くしか無い。

「．．．．．諏訪子、これってどういう状態?」

「あーうー．．．．．ごめん、黒。責任、取るよ」

「はい?」

．．．．．真逆の僕が責任を取られる側?!
本当に昨日?というか寝る前に何があったの???



「———っっていうわけだね．．．．．」

「あー……大体思い出してきた」

服を着て、諏訪子の説明を聞く。

「……うん、まあ、なんと言いますか。」

その後、僕は諏訪子を抱き締めて……本人曰く我慢できなくなった諏訪子が僕を襲ったと。

「……。」

「……こういう時って「もうお婿に行けないっ」って言うべき？」

そうして考えていると諏訪子が怖ず怖ずと口を開いた。

「……ねえ、黒。私のこと嫌いになった？」

「諏訪子を嫌いになんてならないよ……僕は、君に一目惚れしてるんだし」

「おん、薄っすらと昨日ぶつちやけた記憶が残ってるんだが??」

「というか言覚えてますよね諏訪子さん?? (テンパっているため敬語モドキ)」

「良かったあ……(嫌いって言われたら繋ぐしか無かったし)」

「……何か言った?」

「ううん、何にも」

「……ごめん、何に繋ぐつもりだったの??」

「……。」

「気にしたら負けだ。」

「ねえ、黒……責任取って私が黒を貰うね!!」

「うん……うん?」

「今日から黒は私のモノね!!」

．．．．．笑顔が眩しい。
まあ、諏訪子なら良いか。

「まあ、よろしく諏訪子」

「うん!!」

「取り敢えず心配してるであろう宿の人達に会ってきていい?」

「あ」

「荷物処分されたら困るし、搜索されるのも……」

僕はかなり急いだとだけ言っておく。



更に時は流れ……

「ふう……今日の鍛錬はここまでかな」

「柏手様〜ご飯が出来ましたよ!!」

「ああ、ごめん。今行くよ翠」

色々あつて僕はこの諏訪神社で暮らしている。

今呼びに来た緑髪の少女は東風谷 翠、大樹の孫だ。

「……もう、50年か」

あの出来事からもう五十年が経った。

ジロウは立派に白樺の宿を継ぎ、大樹は巫女を引退した。

その五十年の間に僕は何故か『柏手様』という縁結びの神様として祀られていた。……いや、まあ【縁を司る程度の能力】で縁結び位なら出来るけどさあ。

因みに僕の本名を知っているのは諏訪子と大樹とジロウ位だ。

「……うん、翠は料理が上手になったね」

「本当ですか?!」

「うん、私も上手になつてると思うよ」

「やったあ!!」

翠はまだ幼いけれど、巫女見習いとして頑張っている。

大樹の娘の鶯は既に他界している。

何処ぞの神が送り込んできた刺客に殺されてしまった。

僕は怒りに任せてその刺客を滅ぼした。

その為、翠は母を知らない。

僕と諏訪子、大樹が親代わりだ。

まあ、そんなこんなで僕は今を生きている。

この幸せが続きますように。

「ねえ、大好きだよ、黒」

「うん、僕も大好きだよ、諏訪子」

「蛇足のような設定集」

▷ キャラクター（主要四名）

名前：出雲 黒（イズモ クロ）

種族：化物

性別：男性

容姿：水色の瞳、黒の短髪、中性的

能力：ありとあらゆるものを曖昧にする程度の能力

イメージカラー：黒

主人公。元人間の長い時間によって人間性が擦り切れたバケモノ。正確には長い時間で精神構造が作り変わった。『終わり』である故に『始まり』が在ることを保証する妖精だったもの。妖精が変質した妖怪が変質して出来上がった化物。主人公ムーブは偶にする。プロット段階では純愛物語だった……。筈なんだ。はい、ルーレットを回した作者が元凶ですすいません。

名前：洩矢 諏訪子（モリヤ スワコ）

種族：崇神

性別：女性

容姿：金色の瞳、金の長髪、美少女

能力：坤を創造する程度の能力

イメージカラー：金

メインヒロイン。独りぼっちの白い蛇。元霊物の崇神。太古の土着神。地味に億は生きてる模様。ヘビとカエルはその時代には居なかつた筈だが、ご都合主義（作者のミス）ですきにしないきしない。やはり諏訪子様可愛い最高。プロット段階では神奈子に負けたのを期に黒の旅に同行するルートもあつた。

名前：出雲 紅（イズモ ベニ）

種族：半妖

性別：女性

容姿：水色の瞳、緋の長髪、美少女

能力：与える程度の能力、認識を操る程度の能力

イメージカラー：紅

主人公の姉。申し訳無いが実は旅をさせるためだけに作ったキャラが思いの外気に入ったので「姉にしてみよう☆」した結果産まれたキャラ。作者的には結構気に入ってるキャラ。

名前：出雲 緋狐（イズモ アカコ）

種族：妖怪

性別：女性

容姿：緋色の瞳、緋の長髪、美女

能力：認識と記憶を操る程度の能力

イメージカラー：緋

主人公の師匠。その時代の最強。人と恋に落ち、人を食べるのを辞めた妖怪。理由は「人と同じように生きて夫を追いかける為」。何気に重要な立ち位置のキャラクター。

▷ 初期プロット（二章まで、大雑把）

一章

← ケムリ妖怪（正確には妖精）誕生

← 長い時間で摩耗（上手く書けるかなあ・・・）

← 緋狐に出会い、取引をする

← 紅に出会い、名前を貰う

← 紅、緋狐との生活（ほのぼの系で）

← 緋狐死去

← 紅死去、最後に黒へ無自覚な呪いを遺す

← 黒の旅立ち

一章終了

二章

← 暫くの旅

← 諏訪子との出会い

← 同化未遂、強制的な共振（相性が悪いと共振は無い）

← 諏訪子との約束

← 黒、旅を再開

← 永琳と出会う

← 様々な事を学ぶ（後に役立つ・・・答？）

← 月夜見に暗殺されかける

← 休眠する

← 目が覚める

← 旅再開

← 後のフラグを何個か入れて二章終了

NX「(真面目な) 黒雲録りメイクに向けて」

題名：東方黒化生(仮)

▷Material

◆Character (式章迄のメイン)

◇出雲 黒《イズモ クロ》

・人物

妖怪らしく無い妖怪。底抜けの善性。基本的にどんな相手にも友好的で人間の様に

振る舞う。その為、幻想郷の賢者である紫とは対照的に大体の人妖達から信頼されている。彼を敵に回したら最後、幻想郷のみならず地獄すら敵に回すという。

・容姿

背丈は百七十五程で姿形は人間の青年と特に変わり無い。

髪は黒色の短髪。

瞳の色は水色で、基本的に閉じられている為に薄目や薄目と勘違いされることもある。

・能力

【曖昧にする程度の能力】

ゆかりん曰く「インチキ」。八雲紫の【境界を操る程度の能力】と同等の全ての事象を根底から覆す能力。現実と空想を曖昧にして空想を現実に引つ張り出したり、事象を曖昧にして状態を上書きして事象を無かったことにしたり、認識というテクスチャを曖昧にして認識を阻害したり、死すら曖昧に……と、様々な事が可能。黒曰く「紫も大概」。

【視える程度の能力】

紅から譲り受けた能力。過去未来を見通し、幻術や虚構を見破る。「視る」ことや「認識する」ことに特化した能力。「視る」ことに関することなら大体出来る。

・ 関連人物

↓ 洩矢 諏訪子

黒の愛しい人。相思相愛。重い愛すらも愛している。ソレが更に愛を重くする。

↓ 出雲 紅

名付け親であり姉。黒の人間性の基盤を作った。黒の大好きな人物の一人。最近、夢に出て来る。

↓ 出雲 緋狐

紅の母。母親というより師匠。黒は彼女を敬語を使う時の基準にしている。

↓ 八雲 紫

友達。軽口を叩き合う仲。漸く意中の彼とくつついたとの噂を聞いて「紫、結婚式には呼んでね」。結婚式では「あんなに尖っていた紫が……。」と号泣する。

◇ 洩矢 諏訪子《モリヤ スワコ》

・ 人物

太古から祀られる土着神。正確には土着神の側面を持つ崇りの力を持った白い大蛇の化生。慈悲深いように見えるが正確には何時でも崇り殺せるから放置してる。彼女

の心を動かしたのは黒が初めて。機械的で本能的な根は寂しがりの気分屋。

・容姿

背丈は百六十程で姿形は人間の女性と特に変わら無い。

髪は金色の肩甲骨位まで届く長さ。

瞳の色は金色で、よく見ると爬虫類のように瞳孔が縦に細く長い。

・能力

【坤を創造する程度の能力】

坤……大地に関するものを創造する能力。地上由来なら鉱物から植物まで。大地や創造したものを操ることも出来る。

・関連人物

↓出雲 黒

一目惚れ。地味に一番厄介な惚れ方をしている。愛してくれる彼へ煮詰まった重い愛を向けている。そしてどんどん重くなる。

↓出雲 紅

会ったこと無い。故人だが黒の心の片隅を専有しているため少し嫉妬している。

◇出雲 紅《イズモ ベニ》

・人物

緋狐譲りの敬語で話す心優しい半妖の少女。当時最強の妖怪と世捨て人の間に産まれた。生活能力は高く、黒の料理等の師でもある。死の間際にとある方法で黒に【視える程度の能力】と自身の全てを譲った。愛ほど歪んだ呪いはない。

・容姿

背丈は百四十程。

半妖だが、姿形は人間の少女と変わらない。

髪は紅色の腰に届く位の長髪。

瞳の色は水色で、基本的に閉じられている。

・能力

【視える程度の能力】

過去未来を見通し、幻術や虚構を見破る。「視る」ことや「認識する」ことに特化した能力。「視る」ことに関することなら大体出来る。命名は紅。

・関連人物

↓出雲 黒

大切で大好きな家族。歪んだ愛を向けている。だが、愛とはそう云うもの。

↓出雲 緋狐

母親。尊敬している。彼女が紅に恋愛や呪いについて教えていたら……。(でも教えていたら黒が諏訪子と会う確率は限り無く低くなっていた)

↓洩矢 諏訪子

黒の中から見ている。彼女なら黒を任せることが出来るでしょうか？

◇出雲 緋狐《イズモ アカコ》

・人物

敬語で話す緋い妖怪。当時最強の妖怪でもある。世捨て人の出雲 灯馬に惚れ、出雲 紅を産んだ。比較的人間に近い感性を持っている。紅が五十の時に死去。死因は寿命。何の妖怪だったかは灯馬しか知らない。

・容姿

姿形は人間の女性と変わらない。

髪は緋色の腰に届く位の長髪。

瞳の色は髪と同じ緋色。

・能力

【認識を操る程度の能力】

幻術等の超上位互換。認識を相手に植え付け常識すら改竄する。認識が力の源となっている妖怪や神への究極のメタ能力。彼女はこの能力と類稀な戦闘センスにより当時の最強の称号を欲しいままにしていた。

・関連人物

↓出雲 灯馬

愛する夫。世捨て人だった。何と無く放つて置けず世話を焼くために屋敷に通い(通い妻)、幾つかのラブコメを経て夫婦になった。

↓出雲 紅

一人娘。灯馬との愛の結晶。孤独になってしまふのを心配していたが、弟を拾ってきたので一安心。もう少し情操教育をしつかりするべきでしたね……。

↓出雲 黒

娘が拾ってきた弟(?!)。無垢な魂の妖怪。ふむ……彼なら紅の支えに成つてくれるでしょう。黒、貴方の姉を頼みましたよ。

◆World (式章迄)

◇ORIGIN

この世界は原点にして原典。始まりであり全てを内包する。そして……一枚の古い紙（メモの切れ端）から始まった物語である。本の虫曰く「矛盾が無い様に頑張りまーす。まあ、やるんならやりたいように書こうか。その方が面白いだろ?!ハハハッ」。

◇迷いの竹林

緋狐が張った結界により侵入者を迷わせる竹林。竹林自体に細工我あるらしく緋狐が居なくても迷いの結界は機能するらしい。極稀に特異な存在を引き寄せる。

◇出雲の屋敷

迷いの竹林の中心付近に建つ緋狐と灯馬の屋敷。今の所有者は紅と黒。庭が広く、縁側からは月が良く見える。部屋が多めなのは緋狐曰く「……若気の至りです」とのこと。今は庭に緋狐と灯馬の墓がある。

◇洞窟

黒が諏訪子を手当てするために運んだ洞窟。諏訪子の住処の近くにあり、後の守谷神社はこの洞窟の上に建つことになる。

◇諏訪子の住処

後の諏訪地域にある小さな湖。底には社が沈んでおり、諏訪子は其処で寝ている。実

はこの社はとある神のものだった。

◇月夜見の都

月夜見(高位神)と八意 永琳(天才)と綿月 育治(転生者)が創り上げた都市。後に場所を月へと移した。

◇諏訪の国

諏訪子を祀る国。中心には諏訪神社がある。当時の天照の作った国と並ぶほどの大ききさだったらしい(故に八坂神奈子が戦を吹っ掛けてきたわけだが)。

◇守谷神社

元諏訪神社。八坂神奈子を下し、彼女の国を統合した時に「東風谷一族が守る神社」という意で改名した。天照からのちよっかいを避ける為に(主に諏訪子が自由に動ける様に)八坂神奈子が表に出ている。諏訪子曰く「神奈子の威厳って便利だよね」とのこと。

EX√ 「聖夜の奇跡」

守谷神社の縁側にて。

「黒、降って来たね。」

膝の上に座る諏訪子が雪が降って来たのを見て言う。

「うん、この調子だと明日は結構積もってそうだ。」

「うーん、じゃあ明日は二人でごろごろしようよ」

「あはは。そうしよつか……。それにしても、もう百年かあ」

まだ、あの——幻想郷の喧騒を覚えている。

だけど何時かは忘れてしまうのだろう。

己が己を忘れた様に、もう居ない彼女の事も。

……あれ？

「……黒、寂しい？」

「まあ、寂しく無いって言ったら嘘になるけどね。でも諏訪子と一緒にだからあんまり寂しくは無いかな。」

「うん、そっか。」

僕は諏訪子を抱き締める。

諏訪子は無言で抱きしめ返してくれる。

ああ、温かいなあ。

「大丈夫。私はずっと一緒に居るよ」

「うん、ありがとう。」

ノイズが走る。

「■■■■、■■。」

ああ、彼女の声が聞こえない。

『済まないね、イレギュラー君には此処で死んでもらおう』

？

気付くと、暗い水の底。

夢か。

もう諏訪子は居ないっていうのに。

「(ぼっ)ぼっ……………(夢魔の類か)」

——お前は、幸せになれ。……宿敵よ、汝の生に幸があらんことを。
……………想起しろ、思い起こせ。

——ごめんね、黒……………愛してる、よ……………。

熱を、もつと熱を!!

『な?!夢幻牢獄が?!』

「クリスマスに、なんてことしてくれるんだよ!!」

『ぐあっ?!』

「来い、クラン!!」

「はいはい!!待ってましたあ!!想符『一億と二千年の翼』!!」

『ぐあ?!』

「合わせて!!」

「了解!!」

「合符『比翼』!!」

そうして、僕とクランによって不届き者は消滅した。



「……諏訪子お姉ちゃんが死んでからもう、百年なんだね。」

「うん」

克蘭と並んで、ボロボロの神社の縁側から夜空を見上げる。

「お兄ちゃんは寂しい？」

「勿論だよ。ぶつちやけ克蘭が居なかったらこんな世界、とうにおさらばしてるよ」

諏訪子を殺した

思い出す。

諏訪子の最後を。

——ごめんね、黒。……輪廻の果て……逢える、から……ね……あれから、僕と克蘭はこの荒廃した幻想郷で過ごしている。

「僕等は、輪廻の輪に弾かれた存在だ。だからさ、諏訪子。輪廻の果てに、逢うことは……できないんだよ。」

「お兄ちゃん……。」

すると、空間が歪み見慣れたクソダサTシャツの中年が現れた。
道を譲り 本日は『ポストアポカリプスだわ!』

「やれやれ、友よ。相変わらず湿気た顔してるね。」

「……友よ、僕はそんなに湿気た顔してるかな?というかそのシャツさ、ブツダとかに止められなかったの?」

「いや全然?」

※ブツダさんの本日のTシャツは『ヒヤッハー!!』

「……つとそうだった。今日は君達に良い知らせがあつて来たんだった。」

「良い知らせ?」

「肯定^{YES}おじさん、良い知らせって？」

「ふっふっふ、それは見てからのお楽しみさ。馬に蹴られたくはないし、誕生日パーティーに行かなくちゃいけないから帰るよ。友よ、良い^{メリクリスマス}クリスマス^{マス}を。」

そう言つて友は帰つて行く。

それと入れ替わる様に金の長髪の、特徴的な市女笠を……。

間違える筈無い、最愛の彼女のことを。

「諏訪子!!」

僕は彼女を抱き締める。

彼女は困つたような、気恥ずかしいような顔で、優しく抱き締め返してくれる。

「あーうー……ただいま、黒。」

■ ■ 「何時か…」

—— 此れは、紡がれるべき物語

「貴方は？」

「これもまた運命の悪戯、ですか……見ているのでしょうか？ エディ・トルロックダ
ウン」

「良くわかったね？ 始めまして久し振り。 赫い妖怪」

「私は紅。 よろしくね、 黒!!」

「そうですね、 久し振りとも始めましてとも…… 貴方には何方が良いでしょう？」

「僕？ 僕は黒、 出雲の黒 出雲黒。 君の名は？」

「ごめんね……黒」

「ああ、 黒が居るならそれも良いかもね……でも、 私にだって最古の神としての意地や矜持があるんだ」

「さあ、さあさあ!! 戦祭の始まりだ!!」

「またね、諏訪子」

「始めまして、君が救世主であってる?」

「ははは、私には大層な称号だけどね」

「ああ、承った。友よ、君の行く末を見届けよう」

「黒、君は何処から来て何処に行くんだい?」

「さようなら、友よ」

「ありがとう、黒。私の友よ」

「聖女、か。君は後悔していないのかい？ ……友の言い回しが感染った」

「私は、立ち上がったことに後悔などありません」

「風が吹いている …… 良い風だ。気長に行こう。僕には時間だけは沢山あるのだから …… 言うなれば、此の旅は答えの為につてね」

「儂は …… 儂は、何をしたかったのだ?！」

「——友の名に於いて、私が赦しを与える。此の詩は友に捧ぐ …… 柄じゃ無いけど」

「私は …… 」

「僕は異端審問官じゃないんだけどなあ?! 何方かというと祓魔師エクスモストなんだが?」

「ははは!! クロード!! ワタシを三度殺した貴様が何を言う!!」

「だから!! 僕は!! 唯の医者だって言ってるだろ!!」

「神医ウオン!! とても良い腕です! さあ! もっと闘いましょう!!」

「じゃあな、クロード。何時も言ってた好きな奴に会いに行くんだろ? さっさと安心させてやれよ?」

「ああ。勿論だ。また会おう、ユーリ。達者でな」

「はあ……君達はさ、恥ずかしくないのかな？少女を寄って集って虐めるなんて陰湿にもほどがある」

「なんで……なんで私を助けたんですか?！」

「色々言いたいことはあるけど……取り敢えずお帰り、黒」

「うん。ただいま、諏訪子」



——無貌の神は、次の担い手へ

「俺は白。化石の中に居たお前は何んていうんだ？」

「……古明地こいし」

「じゃ、一緒に来ねえ？ どうせ永い旅になるんだ。話し相手がいたほうが気が楽だぜ？」

「そっか。じゃあ、よろしく、白」

「ああ、よろしくな、こいし……取り敢えずその無表情からどうにかしないとな」

「まったく……柄じゃない」

「白、死ぬよ？」

「はは!!こいしには言つてなかつたな……」

「——大丈夫、俺、最強だから」